
Black Heart Open Your Mind

銀色流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black Heart Open Your Mind

【Nコード】

N6309V

【作者名】

銀色流星群

【あらすじ】

主人公、天崎和麻は、何となく日常を過ごす高校二年生。

ある日の放課後、女子トイレでいじめを受けている同じ二年生の女生徒、霧野夜美を見つける。聞けば夜美は小学生のころから友達はおらず、いつも孤独で、ずっといじめられていたのだという。夜美を孤独から救ってやりたいと思った和麻は、彼女の友人第一号として、日々接していくことに――。

- P r o l o g u e - (前書き)

処女作です。なので書き方が粗かったり、ストーリーがごった返している可能性があります。楽しんでいただけたら幸いです。

- Prologue -

あなたは、人生の目的について考えたことがありますか？ つまり、簡単に言くと、『生きる意味』です。自分という人間の存在価値、そしてこの世で自分が果たすべきことについて、じっくりと向き合ったことがありますか？ という質問です。

私はあります。なぜ、どうして、何のために今自分は生きているのだろうか、そんなことを考えたりするのです。自分自身が生きる理由を探すが、果たして自分に何らかのメリットをもたらすのかどうかは分かりません。だけど、無意識に考えてしまうのです。いつも答えは一つです。

生きる理由なんて、ないんじゃないか——。そう答えが告げるのです。

つまりそれは答えが出ないという答えなのです。何のために私は生まれ、この世の理に従い時を過ごしているのか。見つけ出すことができないのです。何も感じないまま、ただ淡々と過ぎていく一日を見つめ、明日を迎えるような生活しかできないのです。

いつからこう考えるようになったのかは分かりませんが、きっとそれは気にするほどのことではないでしょう。こんなことを考えるようになったことが問題なのだと思います。

だけど、頭では分かっている、考えてしまうのです。

では、あなたには、何故私がこう考えるようになったか、分かりますか？ 『生きる理由を見つめ直すようになってしまった』理由です。分かる人にはすぐに理解してもらえないではないでしょうか。分からない人には……無理に分かってもらおうとは思いません。何故ならそれがその人の生き方だと思うからです。

だけど、ひとつだけ、これだけは言わせてください。

そんなに、私は邪魔な者ですか？　生きていてはいけない者なので
すか？

そして――。

私を蔑むことが、そんなに楽しいですか――？

「なあ、クーポン使って二個買うのと素直に一つ買うの、どっちが
いいと思う？」

日曜の昼はファーストフード。それは俺らの常識といっても過言で
はないほど見慣れた環境設定だった。もちろん何かを食べてばかり
いると財布にも体にも優しくは無いので、ドリンクバーを頼んで過
ごすのがほとんどだ。今日は珍しく昼食をとったのだが。

俺の親友、黒木充は^{くろきみつる}デザートにクーポンを使うかどうか迷っていた。
「そろそろ自重したらどうだ？」

「今日までなんだよ使えるのが。だけど、かといって二つ食べきれ
るかという自信がない」

「じゃあ俺が食う」

「だめだ」

なんと冷たい親友だろうか。コイツほどケチなやつはなかなかおる
まい。

「ええい男は度胸だ、使つてやる」

ファーストフード店には大抵置いてある、テーブルの端にあるボタ
ンを押す。

充はクーポンでショートケーキとレアチーズケーキを頼むと、床で腕立てを始めた。少しでも腹を空けようという無駄なあがきだ。腹筋の方が効果的ではないだろうか。

「今日はどうする？」

俺は充に意見を求めた。

毎週日曜にここへ来るわけじゃないが、ここへ集まった時はどこかを目指して街中を徘徊する時である。

基本的には買い物や別の友人の家に遊びに行ったりする程度だが、時には山へ行ってみ

たり遠い場所を目指して出発することもある。家にこもってゲームするより、外に出て徘徊^{ゲーム}

する方が気持ちいいという考え方の合致が、俺と充が仲良くなったきっかけだった。

「とりあえず買い物でもするか。ちょうど一昨日出た新譜も欲しかったし」

「よし。賛成だな」

天気もいいので出かけるには持って来いだ。俺も買いたいものがあったし、好都合だろう。

「じゃ、とりあえずそれは俺が食ってやる」

運ばれてきたレアチーズケーキをみて俺は言った。

「食ったら殺す」

笑顔でフレンドリーに言うから逆に殺気が引き立つ。その瞳の奥には煉獄の炎が渦巻いているのだろう。相変わらずケチなやつだ。

仕方がないのでさっさと先に勘定を済ませて外に出る。もちろん払うのは自分の分だけだ。

時刻はちょうど一時を過ぎたあたりだった。春の日差しはそこはかとなく気持ちのいいものである。車の通った後の排ガスさえ除けば、自転車のサドルに腰かけ、充を待つことにする。ちゃんと食べきれぬなら五分もかからない量だろう。

「さーで、どうすっかな」

思い切って外に出たものの、もちろん暇がつぶれる保証などどこにもない。サドルに座ってボーっとしていた。

「…あ、あの」

「ん？」

唐突に背中の方で声がした。自分に話しかけているのだと理解したが、何故話しかけられているのかは皆目見当がつかない。知らない女の子だったからだ。

「俺に用か？」

年は同じくらいだが、少しおびえた表情をしていた。俺ってそんなにこついのか？

「…あの、ここへは、どう行ったらいいんでしょう？」

何やらチラシを手に持っていた。見る限り洋服店のチラシのようだ。この店の場所なら知っていた。俺も利用したことがあったからだ。

「ああ、この店なら、この次の信号を右に曲がってまっすぐ行くと右手にあるよ」

「そうですか。…あ、あの、教えて頂きありがとうございます」

一つ気がかりだったのはそれが一般的な服を扱っている店ではなく、学生服の店だったことくらいだろうか。俺の学校では新学期を迎えて二週間がたっている。他の高校もそろそろ入学式は終わっているだろう。

「いや、別にいいけど君、入院でもしてたの？ 今から制服を買うなんて」

「あの、いえ、えっと、はい、そ、そうです」

今の解答はどうとらえればいいのか。『いいえ』と『はい』が両方入った日本語というものを俺はまだ学習していないはずだ。というか、きつと未来永劫そんな日本語は存在しないだろう。

「どっち？」

「あ、えっと、…入院してました」

そうか。それなら仕方ないだろう。

「じゃあ頑張つてな」

「ど、どうもありがとうございました」

そいうと女の子は去って行った。

「大変だな」

もう少し早めに退院できれば入学式に間に合ったのだろう。ちょっと可哀そうだ。

「おいおい、ひどいぜ。先に行っちまうなんて」

充が走ってきた。どうやら食べ終わったようだ。ちなみにこいつの事を可哀そうだと思ったことは一度もない。

「おつかれ。よかったなクーポンつかえて」

「ゲフツ、流石に食い過ぎの領域かも知れない」

人間腹八分目がちょうどいいのに、無理して食べようとするからだ。たまに間抜けな生きざまをさらす友人をみるたびに俺は笑っていた。「とにかく行こうぜ。買い物に」

二人は自転車に乗って走り始めた。

そよぐ風が頬をなでる。桜の花びらを散らせながらゆっくりと吹きぬけていく。

充は少し脇腹を押えているが気にしない。俺に譲らなかった罰だ。

その日は新譜を買った後、適当に街をぶらぶらして帰ったのだった。

この辺で自己紹介といこうか。

あまさきかずま

俺の名前は天崎和麻。これと言って特徴があるわけじゃないが、一

応は高校二年生だ。

高校生活を楽しめているって言ったら、嘘になってしまいかもしれないが、かといって憂鬱なわけでもないぜ。友達もいないわけじゃないし、勉強も辛いわけでもない。部活動はやる気が起きないがな面倒だし、キツイし、自由時間が減っていく気がして仕方ないんだよな。おっと、こんなこと言うと部活動を楽しんでいる各々の生徒

にいろいろと言われてしまいそうだから、この辺にしようよ。

Part 1 - Misery Girl -

月曜日。あまり休息できる時間もないまま学校へと足を運ぶ日。正直だるい。

和麻は重い体を奮い起して布団から這い出た。もちろん眠たい。

「学校遅れるわよー」

母親の声が呼んでいる。着替えを済ませて下へ降りた。

「おはよ」

「おはよ、じゃないでしょ。早く顔を洗ってらっしゃいな。ご飯できてるわよ」

母親はすでに弁当を包んでくれていた。和麻は寝ぼけ眼でテーブルに着く。朝食は白ご飯に昨日の残り物の肉じゃが、そして定番お味噌汁だ。食パンの方が食べながら登校できるのでそっちがよかったのだが、まあこのメニューも悪くないだろう。

「もう、なるべく早く食べなさいよ。お母さん今日は早いんだから」

「ああ、そうだっけ。悪い」

和麻の母親はこう見えて看護婦なのだ。夜遅くまで勤めることもあれば、今日のように早めに行かなければならない日もある。病院に泊まり込みで勤務することも珍しくないのである。朝起きたらすでに一人なんてしょっちゅうだ。

父親は物心ついた時にはいなかった。和麻が二歳の時に離婚したそうだ。理由は性格の不一致らしいが、真偽のほどは定かではない。

「今日は遅番なのか？」

「それは大丈夫よ。遅番は明後日だから。それじゃいつてきまーす」とみると母親はすでに用意を済ませていた。和麻もあまりゆっくりしている時間は無いようだ。食べる速度を速める。

「鍵は閉めておいてね」

「言われなくても分かってるよ。いつてらー」

トントンと靴を床で叩いて履くと、母親は玄関の向こうへ消えた。

通学用の黒い鞆を手に持ち、もう一方の手で鍵をかける。家の合い鍵は母親の持っていたものとの鍵の二つしかない。なくしたらアウトだ。今まで三回無くしたことがある。そのうち一回見つかったが、あとの二つは今も消息がつかめない。いまさら出てきても何の価値もない代物だが。

そんなことはさておき、おなじみの通学路を自転車で走る。案外時間には余裕があった。

近所のおばさんやコンビニの駐車場で掃除をしている店員さんなどに若干の愛想笑いを浮かべながら通いなれた道を進んだ。

と、後ろから声をかけてくる人物がいた。充である。

「よ、おは〜」

「おはよ。今日も順調に眠いぜ」

顔を洗ってはみたものの、やっぱり眠気というものはしつこく付きまとうものだ。眠い目をこすりながら和麻は答えた。

「そついや今日から本格的な授業だっけか。先週は学力テストだったから適当に流して早めに部活に行けたんだが」

充は実は意外な事に部活動をしていた。小学生のころからずっとサッカーをしているのだ。試合や部活のない日曜日に俺たちはたびたび集まっているのだが、高校に入って忙しくなったのか、月に二、三度出かけるレベルになっていた。

「どうせ国語やら数学やらはテスト返却だろ。まだそんなに面倒じゃないと思うぜ？」

「それが嫌なんじゃねーか。…お前には分かるまい。俺が恐怖している瀬川の説教タイムが」

どうやらまたテストでしくじったようだ。相変わらず勉強嫌いなやつである。ちなみに瀬川というのはうちの学校で一番説教が長いといわれている数学教師だ。今のところの最高タイムは二時間三十六分四十三秒である。測ったやつは誰か知らないが、説教をしている教室の外で測っていたそいつも見つかって、三十分ほどこつてり絞

られたようだ。本当のアホである。

あまりに長い説教なので、食らったやつは高確率でうつ病になるともっばらの噂である。もちろん真偽のほどは定かではない。和麻はまだお世話にはなっていないが、充はすでに常連客である。それでも鬱らないというのはある種耐性が付いているのではなからうか。

「勉強しろよ」

「嫌だね。俺は自分の生きたいように生きるんだよ」

馬鹿は自分で馬鹿だと気づけないから馬鹿なのだろう。気づけないからどんどん馬鹿が進行する。典型的な悪循環だ。

そうこうしているうちに二人はコンビ二にたどり着いた。充のお昼を調達するためだ。和麻は弁当があるので買う必要はないが、充の付き添いでコンビ二に入った。

いつもならしばらく雑誌を立ち読みするのだが、流石に今日は時間がないためさつさとレジを抜けて登校に戻る。

「運がいいぜ。今日はスペシャルカツサンドだ」

喜ぶ充。和麻も、たしかに今日はいつもより品ぞろえがよかったと思っていた。

コンビ二を出ると学校はもう目と鼻の先だ。信号の向こうに校門を確認する。

きれいに整えられた桜の木が並ぶ並木道。その先に校舎がある。校門をまたぐと同時に予鈴のチャイムが鳴り響いた。

小走りで並木道を進んでいく。そろそろ桜の花も散るころではなかったか。

校庭を彩る桜たちはまだ見事に咲き誇っている。きれいな桃色の花びらが校庭の雰囲気をもるく染めていた。二人は自転車小屋に駐輪すると鍵をかけて校舎に入った。

校舎に入ると、朝HRはまだ始まっていなかった。ラッキーだ。

「おはよー」

「おはよ」

適当にクラスの人間に挨拶する。友達が多いわけではないが、それ

なりに慕われているつもりだ。

少し遅れて担任教師が入ってきた。小脇に生徒名簿となにやらプリント類を抱え、いつもの老け顔で教室のドアをくぐってきた。たまには休めばいいものを、律儀な担任である。

「よし、席に着けー」

チャイムとともにHRは始まる。ショートホームルームSHRなので普通に席について話を聞き流すだけでいい。

「出席とるぞ。天崎、――」

いつもどおりに返事を返す。なんとHRは出席確認で大体終わりである。

さて、退屈な一日になるかそうならないかは自分次第だが、この時の和麻はこの日から自分を取り巻く環境が変わっていくことなど、知る由もなかったのだ。

「えー、古文の形容詞には、ク活用とシク活用があり――」

授業というのは睡魔との闘いだ。勝つか負けるか。それはその人物の精神力の強さが左右する。

「コラ黒木、寝るな」

コツンと頭を叩かれて充が目を覚ます。あいつが数学の時間以外でまともに授業を受けるのは体育くらいだ。数学は寝ると昼休みがつぶれるくらい説教されるだろう。

「じゃあ黒木、一番の問題の活用形を答えなさい」

「ふえ？…ああ、えっと、ヤ行上二段活用です」

「やっぱリーページ前の問題を解いてたな？今は形容詞のク活用だぞ」

「え？あ、マジか。すいません」

クラス中が笑いに包まれる。こういう雰囲気は好きだが、授業は好

きではない。

昼休みになるまで、和麻はほとんどの時間外を眺めていた。澄み渡る蒼い空。流れていく白い雲。時の流れを忘れさせるかのよ
うな穏やかな日常の風景である。なんてことない景色だが、じつと
見ていると普段見えないものも見えたりする。

学校へパンを販売しにくるパン屋のトラック。風にそよぐ桜の木。
登校中の女の子。

「って…え？」

和麻は気づいた。こんな時間に登校する女子がいるものなのか。
今は三限目の古典国語の授業中のはずだ。いや、間違いなく授業中
なのだ。

「病院でも行ってきたのかな」

生徒が用事で少し遅れて学校に来るというのはそう珍しいことでは
ない。午前中に病院に通院したり、電車やバスが遅れたりと、その
理由はさまざまである。そういう場合は教師に申請すると遅刻や欠
席扱いにならず、その日を過ごすことができる。

だが、彼女は何かおかしいのだ。和麻はすぐに気づいた。

どこにも怪我や治療の跡が見られないので病院ではないだろう。精
神面での病気の可能性もあるので否定は出来ないが何か別の理由で
ある。

今日は晴天で、しかも渋滞情報なども聞いていない。したがって「
Rや各公共交通機関も滞りなく通常運行しているだろう。つまり交
通の遅れという線は除外できる。」

そして何より、その女の子一人での登校なのだ。車で送ってもらっ
たならその車や親がいるはずだし、そうでなくても事情を話しに事
務室くらいまでなら親はつきそうだろう。一人ということは、本当
に自分一人で登校してきたのだ。理由が不明だ。

ひょっとしてただのサボりなのか、とも考えた。しかしそれならそ
のまま休んでしまった方が良く決まってるし（教師視点では許さ
れざる行為だが）、来るのならそれこそ普通の時間帯に登校すれば

いいだけだ。

「サボろうと思ったが、やっぱり考え直してこの時間帯に来たとか？」

そんなおめでたいやつはきつといないだろう。そもそも何故サボろうと思ったのか謎だ。

そんなことを考えているうちに授業は終わった。忌々しい『国語科 日々課題』というプリントを残して古典教師は教室を去って行った。

四限目の数学をまじめに受けたのは和麻の心からの善意があつたからだ。決して説教回避のためにまじめに受けたのではない。きつと、多分。

「この時をどれだけ待ちわびたか。諸君、来るべき食事の時間だ！」
充が高らかに叫んでいる。諸君というのはクラスの人間のことだろうか。

「誰に向かって言ってるんだよお前は」

「和麻。お前はこの至福の時間がどれだけ大切なものなのか知らないのかい？」

「どうせ飯食って寝るだけだろ。そのどこが至福なんだよ」

「お前と一緒にするな！俺は飯を食った後校庭で決戦の火ぶたを切って落とさなければならんだ！」

すると諸君というのはその決戦に参加する人間のことが。充はどこまでもサッカー好きである。

「勝手に切って落とすといってくれ。んじゃ」

「待てよ和麻。お前もどうだ？」

「さ、食ったら図書室にでも行つて寝るかな」

「…まあいいさ。いつものことだしな」

弁当の包みを解いてふたを開ける。美味しそうな匂いが鼻をくすぐる。和麻の母親はめったに冷凍食品を使わない。ほとんど手作りのので温かみのある弁当だ。もちろん味も申し分ないレベルで、和麻

はおかずを残したことは一度もなかった。

「今日は麻婆豆腐に野菜炒めか。頂きます」

先ほど見た女生徒の事は忘れて和麻は黙々と昼食をとった。
食べ終わるといつもの場所へと足を運ぶ。

校舎三階。図書室。和麻のお昼寝ポジションだ。

今現在図書室はメデイアルームという名前に変更され新校舎の一階に設けられている。ここはそれができる以前に使われていた場所なので、今は当然廃れた部屋だ。

だがそれでも管理の先生はいる。和麻はドアを開けると中へ入った。

「お、来たね和麻」

「来たよ」

和麻はここを管理している人間に短く挨拶をする。ずいぶん前から通っているので結構砕けた会話になっていた。

ソファに寝転ぶと、和麻は天井を見上げた。古い蛍光灯はきれいに掃除され、埃一つかぶっていない。今はこの部屋は教材を置いたり歴史の授業などで使う資料を保管しておいたりする場所になっている。管理人がいるのはそのためだ。

「コーヒーあるか？」

「ポットに入ってるわよ。自分で注ぎな」

ため息について和麻は立ち上がる。カウンターの裏に置いているポットを傾けてカップに注いだ。

この管理人をしている女性は桜庭恵梨奈先生。さくらば めいりな和麻がこの図書室を見つけた時にはすでに

に管理をしていたひとだ。話しているうちにすっかり打ち解けてしまった。

「コーヒー飲んだらこの歴史書をEの棚に運んどいて」

「俺は昼寝に来たんだが」

「この部屋かしてんのはだーれ？」

「……ちつ。しょうがないな」

何かと和麻を手伝わせようとするのがこの人だ。この部屋がまだ図

書室だった時は図書室の先生だったのだろうが、きつと図書委員にも力仕事を任せていたに違いない。

全部で数kgはあるであろう歴史書の束を持ち上げると、和麻は両手で抱えながら指定された棚に運ぶ。案外年季が入った歴史書なので慎重に運ぶ必要がある。

「つーかなんで寛いでんだよ」

みると恵梨奈先生はカウンターのいすに座りながら新聞を広げている。

「せつかく生徒が作ってくれた休み時間なのに、寛がなきゃ損じゃん？」

マイペースすぎる。和麻がサボったら本棚の埃をはたくあれを使っ
て動きだすまで叩き続けるのだ。あれは痛い。

「あんた教師としてどうなんだよ」

「文句あるなら出て行きなさい」

きつとこの人に口げんかして勝てる日など永遠に訪れないだろう。
和麻はしぶしぶ作業を続け、積み上げられた歴史書を並べるとようやくソファに寝転がった。

「最近問題になってるねえ」

唐突に先生は新聞を読みながら声をあげた。

「問題って、何が？」

天井を見たまま、和麻は答える。どうせ新聞の話題なのだろう。

「最近増えてるらしいね。いじめとか、恐喝とか」

よくニュースで取り上げられている話題だ。確かにここ数力月の間で中学校・高校での生徒間でのいじめが増えているそうだ。

それに伴って耐えきれなくなった生徒の自殺が激増しているようだ。いじめをする人間の気などはわかってたまるものではないが、いじめられる側の心は何となくわかる気がした。和麻はとりたて過去にいじめられたことがあるわけでもないが、そういうことは許せない性格だった。

「いじめか。残念だが大人が動いてどうにかなるっていうことは無

いだろうな。もともと大人のいないところで起こるものだし、いじめられてるヤツもなかなか自分で言い出すことができない。こればかりは仕方のないことだぜ」

「あんたもどこかでいじめたりしてるんじゃないの？」

「そんな野郎どもと一緒にするなつての」

和麻は起き上がってコーヒを飲み干すと、もう一杯のコーヒを注ぐ。

「昼寝したいのか目覚めたいのかどっちかにしたら？」

「昼寝の一番いい長さは二、三十分と言われてるんだ。そしてコーヒが効き始めるのも三十分後。つまりちょうどいいタイミングですつきりと起きられるって寸法さ」

和麻は三度ソファに寝そべると、目を閉じた。

恵梨奈は新聞をたたむと、奥の部屋に入り、その隅のソファに寝転がった。別に眠いわけじゃないが、何かをしようという気にもなれない。こういうときはボーっとするに限るものだ。きっと和麻がここで時々昼寝をするのもそういう考えだろう。

初めて和麻がこの部屋に来たのは一年生の夏だったか。突然扉が開いて現れたのが和麻だった。なぜヤツを入れてしまったのか分からないが、それなりにいい奴だったので置いておくことにしたのだ。ぶつくさ言いながらも仕事を手伝えと言えば最後まできっちりやつてくれるし、いつの間にかだいぶ話しやすい相手になった。何か不思議な力が和麻にあるわけでもないが、人を引き寄せるというか、すぐに仲良くなれるというか、クラスメイトの視点から見ればそういう人間なのだと恵梨奈は思っている。

ボーっとしているとあっという間に予鈴のチャイムが鳴った。和麻はちょうど良く目を覚ました。

「それじゃ」

「はいよ」

和麻は短くさよならを告げると資料室化した元図書室を後にした。ちようと良く充が校庭から戻ってきたところだった。

「よ」

「あ、和麻。お前何やってたんだよ」

走り回った所為だろう。汗が大量に額から噴き出ている。充のサッカー馬鹿は死んでも治らないだろう。

「もち。昼寝」

「何で来ないんだよー」

「眠かったから」

欠伸をしながら和麻は答えた。ただし目はコーヒーの効果でしっかり覚醒している。

「少しは運動しないと体に毒だぜ？」

「お前は動き過ぎだ。それに俺は必要最低限運動はしているつもりだ」

実はそれなりに家から学校までの距離は遠い。案外早めに出ないとすぐ遅刻で瀬川の説教を食らう可能性がある。

毎朝長い距離を自転車で登校すれば十分な運動ではなかるうか。少なくとも和麻はそう思っている。

「早く教室行かないと遅れるぜ」

そう言い残して和麻は教室に向かおうとする。充も脱いだ靴を靴箱にしまつと和麻の後ろを歩く。

「登校だけだと、筋肉付かないぜ？」

「お前はとにかく筋肉の前に脳みそを鍛えろ」

「なっ、お前そういうこと言うのか」

「じゃあ今日の放課後の補習はどう説明する」

三限目の数学の時間、充は思いっきり欠点の領域を全力疾走したテストを受け取っていた。欠点者は放課後多目的室に集合するように、という瀬川の声を聞いた充の表情は誰よりも憂鬱な雰囲気が出ていた。

「ぐっ、それは…」

「今日は説教じゃないからマシじゃんか」

「クソ、お前は瀬川の怖さを知らないんだ、チクシヨウ」

「そりゃ、お世話になったことねーからな」

想像するだけで恐ろしい。あれを食らったら生きていける自信が無くなってしまう。

そんな話をしながら、二人は教室へ入り、昼休みを終えた。

帰りのホームの時間が終わると、ようやくと学校の時間が終了する。夕日に響くチャイムは部活動開始の合図だ。西日傾く校庭では運動部のランニングの声が校舎に反響してこだましている。

オレンジ色の廊下で、和麻は一人バグを抱えて待ちぼうけしていた。すぐに終わるからちよつと待っててくれ、と充に頼まれたのだ。どうせ家に帰っても一人なので、補習が終わるまで充を待つことにした。

ロッカーに寄りかかりながら和麻は時間をもてあそんでいた。

「おっせーなあ。やつぱ瀬川の補習じゃしょうがないか」

補習など三十分で終わると踏んでいたが、甘かったようだ。さすが、うちの数学教師は一味も二味も違う。

「帰っちまおうか」

だがさすがに遅すぎるだろう。もうかれこれ一時間半が経過しようとしている。補習生徒はもちろん充だけではないのだが、どうやらきちんと理解するまでみつちり教え込んでいるようだった。

「気の毒なやつだよな」

補習に泣いているであろう親友の姿を哀れむ。だがこれも親友のたどった道なのだ。後悔はしていまい。

「のど渴いてきたな」

補習はいつ終わるのか誰にもわからない。きっと瀬川にも分からないだろう。少しここを離れても仕方のないことだろう。

和麻は校内の自動販売機を求めて歩きだした。

実はこの学校は案外広かったりする。小学校から高校まで、つまり

高等部までエスカレーター式になっているのだ。校舎の数だけでも七棟あり、全体では生徒の人数が三千人いるというマンモス校なのだった。

それゆえに校内も彷徨うことができるくらいに広大だ。中等部や管理棟とはもちろん個別になっているとはいえ、はじめて入学した人間は迷子になるだろう。

和麻自身、慣れるまで相当時間がかかった。

オレンジ色の夕日が差し込む廊下を延々と歩く。和麻は重い鞆を下げながら自動販売機を目指していた。

「何が楽しくて一つにまとめたのか」

学校を分割してしまえばもっと快適になるのに、と和麻は一人愚痴をこぼした。聞いた話によると経費削減とか同じ土地だとやりやすいとか、諸説あるらしいが、本当のところわかったものじゃない。

そんなことを考えて歩いていた時のことだ。ふと耳を澄ますと、声が聞こえてきた。

「ほらほら、どうして逃げるのよ？ 嫌がるのよ？」

「その汚い体をわざわざ洗ってあげようとしてるのよ？ 感謝してほしいくらいなんだけど？」

「動くんじやないわよ！そこに座ってなさいって言ったでしょ？」
なにやら三人組の女子の声が聞こえてきた。汚い体？ 一体何のことだろうか？

しかし聞こえたのはそれだけではなかった。

「嫌、やめてください。…お願いだから」

今にも泣いてしまいそうな、いや、すでに泣き出してしまった女の子の声も聞こえてきたのだ。和麻は不審に思っ、声のする方向へと歩を進めた。万が一和麻の考えた想像が外れているとも限らないからだ。

そして、その想像——誰かがいじめられているんじゃないかという想像は形になってしまったのだった。

放課後の女子トイレ。本来なら夕日が照らすだけで、静まり返った

その空間で一人の少女が泣いていた。恐らく同じクラスのものであるろう、三人組の女子にいじめられながら。

「ほんとに見るだけで腹が立つわ!」

「なんであんなみたいなのヤツがうちのクラスにいるわけ? 意味分かんないんだけど」

「きつたない髪ね。洗ってあげるわ」

女子の一人はホースを蛇口につなぎ、あるうことかその少女に水をかけていた。おかげで制服はびしょびしょに濡れ、髪の毛からは水が滴り落ちていく。

次の瞬間、別の女生徒が掃除用具入れからトイレの便器を磨くためのスポンジブラシを取り出し、なんとびしょぬれの少女の頭にこすりつけ始めた。

「やめて! ほんとにお願い! 髪が汚れちゃう!」

必死に女生徒は抵抗する。しかしもう一人が手を振り払って床に少女を押し倒した。

「汚れる? はあ? 何言ってるの? すでに汚れてるからきれいにしておけるのに、何様のつもりなわけ?」

ブラシを持った女生徒は更に、便器を磨いたその汚らしい黄ばんだスポンジの先を少女の髪に押し当て続ける。口許には笑みを浮かべ、思いつきり少女を嘲笑っている。

「ぐすつ…私が…なにをしたって言うんですか…」

「存在がむかつくのよ! そんなぼろ雑巾みたいな顔して、よく今まで生きてこれたわね」

「ねえ? なんで生きてんの? とつとと死になさいよ? あんたなんか死んで悲しむ人間なんか一人もいやしないのよ? どうして無駄に生き続けるのかしら」

「そんな…。誰か、助けて…」

一連の会話を聞いて、和麻の心は決まっていた。男子が女子トイレに入るのはいそりや生徒指導室行きだろうが、今は行かないやつを生徒指導室にぶち込んでやるべきだろう。あの腐った三人組と一緒に。

バン！ と勢いよく扉を開け放ち、和麻はどなった。

「てめえら！ いい加減にしやがれ！」

女生徒三人は茫然とした表情で和麻を見ている。構わず和麻は続けた。

「人が黙って聞いてりやふざけたことしやがつて！ てめえらこの数分間のうちに何をやったか分かってんのか！」

すると女生徒達は口々に声を上げ始めた。

「ちよつとここ女子トイレよ。あんた変態？ うわゝ最低！ この年になつて覗きなんて、あんたこそ何やってんのか分かってんの」「この子が汚れているからきれいにしてあげてただけじゃない。なんでキレちゃつてんの？ 意味分かんない」

「しかもえらそゝに何言い出すかと思えば。さつさと帰らないと通報するわよ？ 男子トイレは隣。わかつた？」

この発言が更に和麻の怒りを燃やさせる引き金となった。

「おまえら… 本当に人間のクズなのか。… いや、クズ以下だぜ！」
吐き捨てるように静かな口調で和麻は言った。

「クズ以下の人間に、この子を罵る権利はない。絶対に許さねえ！

これならまだぼろ雑巾の方がましだぜ！」

「うつさいわね！ あんたには関係ないでしょ！」

「そつよ！ とつと消えなさいよ！」

「あんたも水かけてほしいの？」

依然として引き下がる様子はないようだ。和麻はトイレの蛇口をひねると、水の出なくなつたホースを女生徒の手からひったくつた。

同時にもう一人の持っていたスポンジブラシも頂戴する。

「ちよつと何すんのよ！」

「消えるのはお前らの方だぜ。この子に謝れよ」

少女は和麻の後ろでブルブルと震えている。濡れて寒いのと、恐怖が入り混じっているのだろう。

「はあ？ なんで謝らなくちゃいけないわけ？ あんた馬鹿じゃないの？」

とことん口の悪い三人組である。和麻は言葉を遮るように思いつきり拳でタイル張りの壁を叩いた。

「そんなことも分からねえのか？ 謝る理由も分からないって言うのか！？」

和麻の大声が廊下にとどろいた。三人もさすがにビビったようだ。目を丸くして和麻を見ている。

「この子がお前らにどんな迷惑をかけたっていうんだ？ この質問に対してお前は単に、むかつくからと答えたな。これは答えになっちゃいない。何故ならそれはお前の勝手な人間の感じ方だからだ。この子がお前らに何かをしたことによってお前らに不利益が生じたならそれは立派な迷惑だ。だが仕掛けたのはお前らの方なんじゃねえのか？ 本当にこの子がこんな目に遭うほどお前らに何かしたのか？ どうなんだ！ 言ってみろよ」

三人は黙り込んだままだ。返す言葉がないのだろう。そのうち一人が口を開いた。

「はあ、やだやだ。なにムキになっちゃってんの？ ちょっとかわいがってあげたくらいで。行きましよ。時間がもつたないわ」

「待てよ。確かお前だったな、とつとと死んでしまえなんてふざけたことぬかしたやつは」

その女生徒はまたも硬い表情した。

「本当にそんなこと思ってたのか？」

「お、思ってるわけ無いじゃない。冗談も通じないの？」

「その冗談で傷ついてる子がいるってのにずいぶんとしらじらしいんだな」

「悪かったわね！ さ、行きましよ！」

一言心にも思っていないような謝罪を告げると三人は小走りでトイレを抜けていった。

あたりに沈黙が訪れる。和麻は口を開いた。

「大丈夫…そうには見えないよな」

少女はガタガタと震えていた。しかし三人がいなくなったことによ

り、心なしか少し落ち着いたようだった。涙も引いている。

「あ、あの、ありがとうございます…ぐすっ」

少女が口を開いた。とてもうるんだ目でこちらを見ている。

「気にすんなって。——ん？ 君は」

その時和麻は気づいた。その少女を知っていたのだ。

日曜日のファーストフード店で、学生服の店を尋ねてきた女の子。完全に目の前にいる少女とその姿が重なった。

少女も和麻には気づいていたようだ。

「はい。度々ありがとうございます」

声を聞くまで分からなかった。全身はずぶ濡れだし、顔もよく見えなかったからだ。

「とにかく、早く服を乾かさないと。立てるか？」

「は、はい。大丈夫です」

スカートから何から水が滴り落ちている。目をそむけなくなるほどひどいいじめだった。

「ある程度ここで水を切って行こう。ちょっと待ってろ」

トイレの外に置いていた鞆からタオルを取り出す。気休めにしかないが、無いよりはマシだろう。

「髪の毛を拭くくらいなら活躍できるだろう」

そう言って少女の髪の毛を拭こうとする。しかし少女は抵抗した。

「だめです。…髪の毛、汚いです」

スポンジブラシでこすられていたのを思い出す。しかしもちろん気にするつもりはない。

「そんなくらいどうって事無いさ。洗えばいいんだし。ほら、風邪引いちまうぜ」

「でも——あっ」

まだ何かもごもと言いだそうとしたので、さっさとタオルを当ててみる。少し申し訳なさそうな表情をしているが、黙って拭き終わるのを待っていた。

そのあともう一枚予備のタオルで可能な限り制服の水分を拭き取り、

女子トイレを後にした。

夕日も四分の一が沈んできた頃、廊下に足音が二つ響く。きっと充の追試は済んでいるころだろう。瀬川のとっておきスペシャルな説教を食らっていなければ、だが。

二人は保健室を指して歩いていた。保健室には洗濯機と乾燥機が備え付けられているのだ。乾かすには一番だろう。

薄暗くなってきたので校舎には明かりがともっている。白色の蛍光灯が照らす細長い廊下を黙々と進んでいく。

が、やはり会話がないとさみしいので、和麻は話しかけてみることにした。

「なあ、君、いつもあいづらにいじめられてるのか？」

「…はい。掃除時間になるとトイレに連れていかれて、放水されたり、個室に閉じ込められたり…」

「掃除時間って、それじゃ一時間以上あんなことされてたつていうのか？」

「いつもなら掃除が終われば許してもらえますけど…今日は担任の先生が出張で…HRに出なくてもばれないからという理由で、散々こんな目に…」

何というひどい仕打ちだろうか。これはもういじめを通り越して拷問である。一体なぜここまで彼女はいじめを受けているのだろう。

「どうしていじめられているのか、心当たりはないのか？」

「よくは分からないのですが、きっとアドバンスクラスに入ってしまったからだと思います」

アドバンスクラスというのは、本校の特色の一つだ。各学年一組から三組までをアドバンスクラスと呼び、成績上位者の生徒たちで構成されるいわばトップレベル集団だ。学力で生徒を差別するなど教師にあるまじき行為だが、更に高度な授業を行うというのが狙らしい。

「どうして、君がアドバンスクラスにいただけでいじめられるんだ？」

「私、頭はそんなに良くないんです。それなのにアドバンススリーにたまたま入ってしまったんです。『テストの平均点が低いのはおまえの所為だ』って言われるようになって、それで」

最近の生徒はやはり腐っている、と和麻は思った。それだけのことであんなひどいいじめをするなんて、とても和麻には考えられなかった。

アドバンススリーは三組、すなわちアドバンスクラスの中でも一番入りやすい低級のアドバンスだ。だがそこにギリギリ入ることができるのも相当のことだった。和麻も頑張ったら入れるかもしれないというレベルだろう。

「理不尽すぎるぜ」

「制服に、ペンキで大きく『アドバンスのお荷物』と書かれたこともあります」

「それじゃ、あの時の入院じゃなくて……」

「すいません。嘘をついてしまって」

ペンキで使えなくなった制服を買いかえるため、だったのだ。ひどすぎる。

「可哀そうなんてレベルじゃねーな」

小さく和麻がそうつぶやいた時、目の前には保健室があった。

「とにかく先生に事情を話して、服を乾かしてもらおう。大丈夫、こここの先生は知ってるから」

小さくうなずくと、少女は一緒に保健室へと入った。まだ先生はいた。ひよつとしたら帰ってしまったているのかと心配したが、杞憂だったようだ。

「あれ、和麻じゃないか。こんな時間にどうし……その子は？」

そう。だれであろうこの先生は桜庭恵梨奈だった。実は彼女は大半をここで過ごしている。さすがに旧図書室の管理だけでは給料はもらえないのだろう。

和麻は保健室に入るや、事のあらましを説明し始めた。

恵梨奈先生はこう見えても話を聞いてくれる人だ。すぐに理解して

くれた。

「そりゃひどいいじめだったね。分かった。それじゃ乾かすから、ちよつと脱ぎな」

「へっ？ 今ですか」

少女は急に顔を赤らめ始めた。どうしたのかと和麻が思索していると、恵梨奈先生の鉄拳殺人スマツシュ右フックが和麻の頬を直撃した。

「おぶうー!!」

「さつさと出ていきな。女の子の着替えをのぞくなんざ百億年早いよ？」

「ああ…悪い」

そういうことだったのか、と妙に和麻は納得しつつ保健室を出た。あれを食らったのは久しぶりだ。見事に油断していた。ちなみに技名を命名したのは和麻だ。

「いつてー。たく手加減しねえんだから」

しばらく廊下でじっとしていると、扉の向こうの衝立がどけられた。別に覗いたりしな

いのに。衝立が必要だなんて、信用は無いみたいだ。がつくし。

「入っていいよ」

「いや、別に入る必要ないけど」

そう言えば何故俺は待っていたんだろう。まあ、あの子の心配があるから待っていて損は無かったのだが。

「コーヒー一杯くらいならサービスするよ？」

「それなら頂こう」

見るとあの少女は何やらパジャマに似た格好をしていた。どうやら洗濯から本格的にきれいにしているようだ。洗濯機がブオンブオンと豪快に音を鳴らしている。

「あのさ」

ベッドに腰掛けている少女に話しかける。

「えっと、なんですか？」

「いや、まだ名前聞いてなかったなっと思ってさ」

「あ、えっと。夜美、霧野^{きりの}夜美^{やみ}といます」

不思議な響きの名前だった。何と言ったらよいのか、どこか儚くて、さみしい感じがした。

「けどそんなことはどうだっていい。夜美。うん、綺麗な名前だ。」

「そうか。俺は天崎和麻。よろしくな」

笑顔を作ってなるべく安心してもらえるように言った。

少し不安だったが、夜美は笑ってくれた。

「はいっ。よろしくお願いしますっ」

心なしか少し元気になった気がする。なんだ、暗い性格かと思っていたが、明るい部分も少なからずあるようだ。和麻は安心した。

「かわいいガールフレンドじゃないか。アッハッハ」

二人を見て恵梨奈先生は大声をあげて笑った。少し夜美は恥ずかしそうにうつむいた。ガールフレンドと言われて照れてしまったのだろうか。

「うつさいな。あんたもいい加減ボ——」

ボーイフレンドを作ったらどうだと言おうとしたその刹那、目の前に恵梨奈先生の拳が叩き込まれていた。床からはシューという熱気が上がっている。

「何か言ったかい？」

「いえ、なんでもございません」

先生、お願いですから笑顔で言わないでください。笑っているのが口だけじゃないですか。

「よろしい。もう少しで乾燥まで終わるからもうちょっと待っててね」

何事もなかったかのように夜美に声をかける。すまなそうに一礼をする夜美には絶対にこの人の怖さは伝わらないだろう。どうせ一生彼氏なんて出来やしないのだ。口に出すと自殺行為になるので心の中にとどめておいた。

空に一番星が光りだしたとき、ようやく二人は帰途に就いた。

「待っててくれたんですか？」

靴を履きながら、夜美は和麻に問うた。

「まあ、な」

少し照れを隠して和麻は答える。さすがに暗くなりすぎたので一人は放っておけなかった、とは言いたくない。

和麻の答えに夜美は嬉しそうに微笑んだ。

「う、嬉しいです。ありがとうございます」

逆に恥ずかしくなってしまうた。どうしたものか。

「今日会ったばかりの男に待ってて貰っても、嬉しかねーだろ」

そういうと夜美は暗い表情になってしまった。しまった、何かマズツたか。

「誰かと一緒に帰るの、初めてなんです」

「え？ 初めてって、どうして」

少し笑顔を取り戻した表情に戻ると、夜美はポツポツと話し始めた。
「私、小学生の時からずっといじめられてたんです。友達なんていませんでした」

「そんな…ここでのいじめ以外にも、いじめに遭ったっていうのか？」

「はい…。小学校三年生までは、普通に過ごしてたんですけど、いつからかみんなにいじめられるようになって…。ぐすつ、気が付いたら、一人で…ひぐつ」

話しながら泣き出してしまった。慌てて話を打ち切る。

「わかった。もういいぜ。…つらい過去を掘り返してしまって、すまない」

「ひぐつ、いえ…大丈夫…です」

とてもつらい過去だったのだろう。それなのに彼女はここまで生きてきた。くじけることなく、ずっと一人で歩いてきたのだ。なんて

可哀そうな人生だろう。

学校を出ても、夜美はなかなか泣きやまなかった。

「もう泣くな。な？ 俺は君の味方で…友達でいたいからさ」

和麻は必死で夜美をなだめた。

だれも手を差し伸べようとしなかった。なら、俺が友達になってやるまでだ。和麻はそう思った。

「ありがとうございます…。…嬉しかったです、初めて、私を嫌いにならないで、一緒に帰り道を歩いて貰って、私を待っててもらって…ぐすつ、ひぐつ、うつ、うわーん」

とうとう本格的に泣き出してしまった。

「お、おいおい。な？ 頼むから泣きやめって。俺が泣かしたみたいじゃなか」

「すいません…うつ、ひぐつ、嬉しくて、ぐすつ、涙が、止まらないんです」

とても感情的な心の持ち主のようだ。いじめられ続けていたのだから、無理もないだろう。いや、むしろこうならない方がどうかしているのではないだろうか。

「はあ。しょうがない。こういうときは泣いても仕方ないよな」

観念した和麻は近くの公園へ夜美を連れていき、自転車を止めてベンチに座った。

夜美は一向に泣きやむ気配がなかったが、和麻はじっとその少女のそばにいた。

「少し、落ち着いたか？」

少しすすり泣き程度までおさまったので聞いてみた。

「ぐすつ、はい。…すいません」

「いいんだよ。霧野の気が済んだなら。そうだ、何か飲むか？ 買ってくるよ」

「え？ そんな、悪いですよ」

「気にするなつて。オレンジジュースでいいか？」

財布から三百円を取り出す。ベンチに夜美を置いて自販機まで和麻

は走った。自分のお金を出そうとする夜美を止めるのは時間がかかった。

二本のオレンジジュースを買って戻ると、夜美は律儀にも一礼してそれを受け取った。

「ほんとに、奢りで良いんですか？」

「ああ、もちろん。こういうこともしてもらったこと、ないだろ？」

「あ……はいっ！」

美味しそうにちよつとずつジュースを飲んでいく夜美。こうしてみていると結構、いや、かなりかわいい。

すらりと伸びた紺色の髪に、大きな鳶色の瞳。体つきはきゃしゃだが、生き生きとした肌の色。いじめられていたせいで気にも留めなかったが、美少女だった。

「あのー」

そんなことを考えていると、夜美が声をかけていた。

「ん？どうした」

「え、えつと、その、も、もし…もしご迷惑でなければ、あの、明日も一緒に……私と帰って頂けませんか？」

少し不安そうな表情で申し出てきた。本来ならビビることもない願望だが、夜美にとってはとても切実な願いなのだろう。もちろん答えは決まっている。

「よし、分かった。これから一緒に帰るか？」

瞬間パツと笑顔に顔が包まれる。

「ほんとですか？　ありがとうございますっ」

よつぽど嬉しそうな顔で笑っている。そんな彼女を見るのが和麻は好きになっていた。

「天崎さん、そっちですか？」

帰りの分かれ道に到達した。どうやら向こうに夜美の家はあるようだ。

「どうやら、ここでさよならみたいだな」

少しさみしそうな表情を夜美は一瞬浮かべたが、すぐに笑顔に戻っ

た。

「それじゃ、また明日会えますよね？」

「霧野がちゃんと遅刻も欠席もせずに学校に来たら会えるさ」

お互い手を振って、別々の道を進む。空には無数の星がいくつも煌めいていた。

今朝見た遅めの登校の女の子は夜美だった。理由を聞いたところ、やっぱり学校に行きたくなかったとのことだった。だが今日はテスト返却だったことを思い出し、いやいや登校したらしかった。ところで――。

「んーと、あれ？　そういや、誰かを待っていたような…。まあいいか。今日は霧野と帰ったんだし」

和麻は完全に補習終わりの親友を忘れていたのだった。

「ただいま」

「夜美？　ああ、よかった。遅かったじゃない、心配してたのよ」
夜美が帰宅すると、母親が夕ご飯を作っていた。夜美が帰ったのを確認すると、ホツと胸をなでおろしたようだった。

「ごめん、ちよつといろいろあつて遅れちゃった」

母親はそんな夜美の表情に疑問を抱いた。心なしかいつもより明るい口調だったからだ。普段はいつも暗い顔で帰宅する夜美に母親は心を痛めていた。やはりこの学校でも夜美はいじめられているのだから。しかし今日はいつもと違う。笑顔で帰宅したのは何カ月振りだろうか。

そして今日は制服が濡れていない。ここ最近毎日のようにずぶ濡れの状態で泣きながら帰宅していたのだが、今日はいじめられた形跡が無かったのだった。

「なにか、良いことでもあったの？」

「え？　良いことって？」

「その…いじめにあつてるんでしょう？　今日は何もされなかったの？」

言いにくいことだったが、その理由を聞くことにした。

「ううん……いじめられたよ。でも、今日は嬉しいことがあったの」「ますます疑問は深くなるばかりだ。いじめられたのに、良い日だったとはどういうことなのか。」

「どんなことがあったの?」

「今日いじめられてる時、助けてくれた人がいたの。すごく、優しい人だったんだよ」

母親の胸の不安が瞬時に希望に変わった。それはつまり、夜美をいたわってくれた人間がいるということに他ならないからだ。

「私の……お友達になってくれたの」

「まあ、それはよかったわね。どんな子なの?」

「とても優しくて、かっこいい男の子だったよ」

「あら、ボーイフレンド? よかったわねー」

夜美の初めてのお友達。何よりも母親にはそれが嬉しかった。

「このまま、仲良くなれるかな?」

ぼつりと夜美は呟いた。昔から友達ができてもしぐにいなくなってしまう夜美には、それが不安だった。きつとまた、離れていくのではないか。そんな考えばかり頭によぎってしまう。

そんな夜美を見て、母親は優しく声をかけた。

「大丈夫よ。きつといいお友達になれるわ。自信持ちなさい」

「うん」

健気にも笑顔を作ると、夜美は答えた。

「ただいま」

疲れた顔で和麻は玄関の扉を開けた。美味しそうな夕飯の匂いが鼻をくすぐる。匂いからして今日はビーフシチューだろう。

台所からひよっこり顔を出したのは母親だ。

「遅かったわね。もしかして補習だった?」

「俺じゃねえよ。充だ。まあそれを待ってたんじゃないけどな」

「あら? じゃあなんで遅かったの?」

「ちょっといろいろあつてな」

母親は釈然としない表情を浮かべたが、すぐに台所に視線を戻した。
「そう。あ、そうそう、洗濯物取りこんどいてちょうだい」

「へいへい」

何故もつと早めに取り込まないのか。きつと嫌がらせか何かだろう。
いそいそとベランダに出てすっかり乾燥済みの洗濯物を取り込む。
外の風が気持ちいい。

和麻は洗濯物を取り込むと、しばらくベランダで星を見ていた。輝く星を見つめながら、和麻は今日出会ったばかりの少女の事を思い出していた。

「霧野夜美、か」

トイレの中でいじめられていた少女。震えながら泣きながら、必死で助けを求めていた。和麻は今までいじめの現場を直接見たことは無かったのだが、その実態は想像以上に悲惨で生々しいものだった。
「明日から、どうすつか」

勢いで助けてしまって、その上仲良くなってしまったが、本当にそれでよかったのか。しかしかといってあの状況で何もしないのはあまりに非情だった。結果として彼女が和麻を頼ってくるのも仕方がないことだ。

だが。

「その時俺は、霧野を守れるのかな」

きつとまたこの先、夜美はいじめられるだろう。それでも、守っていけるのだろうか。夜美の友達でいたいという気持ちに嘘はないが、それが和麻は不安だった。

「ほんと、可哀そうな子だよな」

絵にかいたようないじめられっこである。だからこそ、いたわりの心も生まれてくるのだろう。それに、可愛かったし。

見上げた星空に、和麻は一筋の流星を見た。

Part 2 - Please Be My Friend -

翌日。また今日も昨日と変わらず空は青一色に染まっている。まさしく春の朝にはうつつつけの暖かさだろう。

和麻が起床したときにはすでに母親は家を後にしていた。『今日は帰れないからそのつもりでよろしく』という置手紙は食卓の上で無造作に置かれていた。

適当に焼いたパンをもぐもぐと口に運びながらテレビのリモコンに手をのばした。

「なにか面白いニュースは…っと」

せつかく余裕を持って起きたのだが、特に見る番組もない。早起きに三文の得は無かった。

「ゲ、牛乳の賞味期限切れてやがる…」

あまり発覚してほしくない事実まで明らかになってしまった。最悪だ。

「ふあゝあ。眠い…」

もちろん今日も学校に行かなくてはならないが、和麻はいつもとは少し気分が違うのだった。

『また明日会えますよね？』

昨日会った少女の笑顔を思い出した。今日欠席したら彼女に合わせる顔がないだろう。まあ、休む理由なんて何もないのだが。

きつと冷めているであろう弁当を鞆に詰め込むと、意を決して和麻は学校へと登校するのだった。

今日は早めに出た所為か、充もまだいない。何もこんな時間に出る必要はなかったのだが、何となくそんな気がしたのだ。

そして、和麻は発見するのだった。

それは昨日夜美と別れた分かれ道に到達したときだ。

きよろきよろとあたりを見回す人影がいた。夜美だ。

近づいていくと、和麻に気づいた瞬間その顔がパツと輝いた。

「あ、天崎さん。おはようございますっ」

「朝っぱらから出会っちゃったな」

昨日と同じ制服に身を包み、夜美は分かれ道の間に立っていた。

「まさか、待ってたのか？」

「はいっ。朝の七時くらいからずっと待ってました。もう着いてるのかもって思ったりしたんですけど、よかったです」

和麻は苦笑した。現在時刻は八時過ぎ。七時からということは一時間以上待っていることになる。

「おいおい。マジかよ」

「…迷惑、でしたか？」

少し不安な表情で夜美は聞いてきた。慌てて和麻は空気を元に戻す。

「ああいや、そんなことはないぜ。さ、早くしないと遅刻する」

「はいっ」

光り輝く朝の道路を進んでいく。夜美は自転車を使っていないので和麻も一度降りた。しかし、女の子と登校なんて、こんなシチュエーションは初めてだった。和麻は少し緊張気味に歩を進めた。

「眠たいですか？」

目をこする和麻を見て、様子を窺うように夜美は和麻の顔を覗きこんだ。

「まあいつものことだ。ふぁーあ」

欠伸を一つしながら答えた。今日も順調に眠い。

自転車を押しながら進んでいるので、風を切って進むことがない。したがってのろのろ歩くため余計に目も覚めないのだ。

手つとり早く学校へ行くために、思い切って和麻は提案した。

「後ろ、乗らないか？」

自転車の荷台に夜美を乗せて、突っ走ろうという寸法だ。

「大丈夫なんですか？」

「もちろん。…ちよつと恥ずかしいけどな。早く着くぜ」

「分かりました。それじゃ、えっと、失礼します」

少し控え目に荷台にちょこんと座った。同じくサドルにまたいだ和

麻の肩に手を乗せる。

「よし、しっかり掴まってるよ」

ちょうど前方は坂道だったので勢いをつけて自転車を走らせる。頬をなでる風が心地よかった。長い夜美の髪をはためかせていた。

が、間もなく覚悟していた痛い視線が襲ってくる。登校中の生徒が次々と二人を凝視している。きつとカップルだと思われるだろう。殺気も混じっている気がしてならない。

しかし夜美は気にした様子もなく、涼しい春の風に身を任せていた。普通に気持ちよさそうにしている。周りの目に気づいていないだけなのか。

だが、そんな夜美を見てみると自然に和麻もそういう視線が気にならなくなっていた。マイペースとは時にすごい力を持っている。

「風が気持ちいいですね」

「ああ。そうだな」

坂道を下りきるとコンビニが見える。今日は特に寄る必要もないのでスルーした。

信号待ちをしていると後ろから奇妙な気配を感じた。

「クアーズマァー！！」

せめてきちんと名前を呼んでほしい。『かずま』の『か』なんか『くあ』になってるし。

超特急の黒木充が坂の向こうから迫って来ていた。ええい、その存在感、なんとかならないものか。

音速のような速度で坂を駆け下ると急ブレーキをかけてちょうど良く和麻たちの目の前で停止した。

「ぜえー、ぜえー。てめえ、何してやる」

肩で息をしながら充は口を開いた。まだ春だというのに汗だくだ。

「見て分らんか。登校だ」

「なんで後ろに女の子が乗ってるんだよっ！！」

元気なやつはいいいよな、と和麻は心の中で感嘆する。いくら疲れてもその精神力は無限大。素晴らしい。

「えっと、この方は…？」

しかし充のお陰で夜美は目を丸くしている。まあ初対面なら一般的な反応だが。

「こいつはまあ黒木充っていう面倒な人間だ」

「はいちよつと待ったー」

すかさず充が口をはさむ。間違ったことを口走ったつもりはないのだが。

「俺ほどクールビューティーで優しい人間は他にいないぜ？」

「ほら見る。面倒だろ？」

「エヘヘ。面白い方ですね」

何故だ、おかしい。普通の女子ならこいつを『面白い』と形容したりはしない。『ウザい』辺りが一般的なはずだ。

「ほらみる和麻。分かる子は分かるんだよ」

「貴様をクールビューティーと形容した瞬間にこの世界は破滅する。熱血サッカー馬鹿あたりが良いところだ」

「うるせえ。不健康引きこもりお昼寝野郎よりはマシだ」

ちつ、言わせておけば。きつと夜美がいなかったらこいつの顔をホットケーキ状に圧縮してやったものを。あと、不健康と引きこもりは撤回しやがれ。

「あ、あの、ケンカはよくないと思います……」

案の定夜美は場の空気におびえている。夜美はこいつのが苦手だということを知っている。

「大丈夫。こう見えても親友だ。ケンカはしないぜ」

「で、和麻。俺にもこの子を紹介しろ」

「自己紹介くらい、出来るよな？ 大丈夫、こんなんだけど良いやつだから」

和麻は夜美に優しく自己紹介を促した。変に優しい和麻の口調に充は疑問を抱いた。

「あ、はい。……えっと、はじめまして、霧野夜美といいます」

「俺は黒木充ってんだ。もうかれこれ和麻の親友を十年以上やって

るな。よろしく」

「そうなんです。よろしくお願いします」

「ところで和麻。なんで俺にはふざけた口調でしゃべるのに夜美ちゃんには優しいのさ？」

充は疑問を述べた。もしかしてコイツは女の子にはこうなるのか、という変な性格を発掘したかもしれないと思ったからだ。これはネタになる。

「その話は後で。ほら、予鈴が鳴ってるぞ」

和麻は再び走り出す。後ろに夜美を乗せて横断歩道を駆け抜けた。

「おい、コラ待てええええええっ！」

後ろからまたも超高速のスピードで和麻を追いかける充。少し自転車をこぎすぎた。今日は下手をすると今日はサッカーが出来ないかも知れない。

校門の前に着くと、荷台から夜美をおろして歩くことにする。ついでに充も追いついた。

「辛いかも知れないけど、頑張れ」

「……はい。大丈夫です」

悪い言い方をすれば、今からみすみすいじめられに行くようなものだ。好き好んでそんな事をするやつはいない。辛いのは和麻もよく分かる。

「何かあったら俺に言えよな。昨日のあいづらがまた何かしてきたら、同じように追っ払ってやる」

「分かりました。ありがとうございますっ」

だが、そんな辛い現実にも負けないように、夜美は笑顔を作った。今笑えるのは、もちろん和麻がいるからだ。

「昨日のあいづらってなんだ？」

隣、というより後ろから充が聞いてきた。二人のやり取りを見て不思議に思ったのだ。

「その話は後で」

「いいじゃんかよー、教えてくれたって」

「ちゃんと話すから、今は黙ってる」

その言葉に、充は素直に黙った。その和麻の口調に強い感情が入っていたからだ。

小屋に自転車を止める。校舎に入ると、夜美は自分の教室へと歩いて行った。

「あの子、アドバンススリーかよ。すげー」

何も知らない充は夜美の走って行ったクラスをみて驚いていた。そうだな。天と地がひ

っくり返ってもお前にや到底たどり着けない頂だ。いまだき

「ああ。哀しい生徒だな」

和麻のその呟きは充には聞こえなかった。

$a/\sin A = b/\sin B = c/\sin C = 2R$ というのが正弦定理で——」

今日も同じく退屈な授業の時間が過ぎていく。充は眠りこけているし、相変わらず教師の講義は右から入って左から出ていく。至って平和な風景だが、和麻はそわそわしていた。

「あいつ、大丈夫かなあ」

今は授業時間。ということとはどのつまりアドバンススリーのクラスも同じく授業中ということになる。さすがに教師のいる目の前でいじめられたりはしないだろうから今は恐らく大丈夫だろうが、休憩時間などのフリータイムは気が気でないのだ。その中でも特に注意すべきは掃除の時間から帰りのHRにかけての時間だ。やつらが一番いじめに徹する時間であり、夜美が一番辛い時間だ。

ふと時計を見た。あと数分もすれば一限目の数学は終了する。

「コラ黒木、起きなさい」

不覚にも数学の時間に寝てしまった親友に追悼の意をささげつつ、数学担当瀬川の熱烈説教タイムにヒューヒューむせび泣く充を想像する。

「あ……えっと、すいません」

「放課後に数学準備室へ来るように」

「……はい」

数学準備室というのはいわゆるグラフ黒板や巨大コンパスなどの数学教材を保管しておく場所だ。そしてわが校に君臨する数学教師どもの根城でもある。説教は大抵ここで行われるのだ。うつ病の発祥地ともつばらの噂だ。

そんな事を考えていると授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。まさに気だるい雰囲気を開する希望の鐘の音だ。数学教師がすたすたと教室を後にすると、生徒たちはみなそれぞれのグループで集まりつかの間の休息をものにする。

「さて、この時間が来てしまった」

つまりそれはあの三人組のグループがつかの間の休息で夜美をいじめにかからないとも限らないということを示していた。今日もずぶ濡れにされてしまうのではないかと心がざわつく。

「あーあ。まためんどい説教だぜ」

和麻の机の前には疲れ切った表情の充が立っていた。一日に一回は説教を受けている気がするのはいのせいだろうか。

「授業はまがいなりにも意識を保って受けるべきだぜ」

「やかましい。あんなめんどくさい定理を吹きこまれて眠くならないやつがいるものか」

お前以外きつと平気だ、と和麻は声に出さずに言うのだが、馬鹿にはわかるまい。

「ところで和麻。さっき言ってた『あの三人組』ってのは何のことだ」

「ああ、その話をしなきゃな」

何故夜美がいじめられているのか。その理由は実のところ和麻にも分らない。だけどいじめられているという事実には誰にも曲げることは出来ない。明確な問題だ。

「実は霧野は、アドバンススリーでいじめにあってるんだ」

和麻は真剣に話を切り出したが、充は笑い飛ばした。

「冗談だろ。あんなかわいい子誰がいじめるってんだよ」

「この状況で冗談なんて言ってられつかよ！」

和麻は声を強くして言った。それで充も理解してくれた。

「そんな…本当に、本当なのか？」

「だからそうだって言ってるじゃねーか。何度も言わせんな。…俺だって、認めたかねーんだよ」

「そうか…。なんだってそんな」

充も哀しい表情をしてくれた。なんだ、案外心があるじゃねーか。ただの筋肉馬鹿ではなかったようだ。

「夜美の成績がアドバンスにしては著しく低いらしいんだ。だからアドバンスのお荷物だとか馬鹿にされてるらしい」

「ひでえ奴らだな。許せねえ」

「昨日俺がお前を待ってた時に、偶然いじめられてるところを見つけたんだ。そこでいじめてたのがその三人組ってわけさ」

「なるほど。そいつらぶつ潰そうぜ」

納得したように充は頷いた。どうやら充も協力してくれるようだ。

「ああ。追い返した時にある程度きつめに言っといたが、きつとやつらはまた仕掛けてくるだろう。そうなったときは、協力してくれ」

「ああ。任せろ」

「だから、霧野の前ではあんまりきつめの言葉を言わないようにしてくれ。そう言つの、あいつ苦手だから」

「分かった」

やる気満々のいい顔をしている。こういうときには頼りになるのが充だ。昔二人でひったくりの現行犯を捕まえたことだってある。

ふと和麻は廊下側からの視線を感じた。教室の外を見やると、そこには夜美がいた。和麻は慌てて外に出る。充はさっきの頼もしい顔とは裏腹に放課後の説教を思い出して机で絶望していた。本当に力ツコ悪いやつだ。

「あ、天崎さん」

「どうした。ってよくここがわかったな」

何組か、まではまだ話していなかったはずだ。どうやって調べたの

か。

「自転車のステッカーで分かりました」

「なるほど」

さすがアドバンスの人間だ。鋭い観察力を持っている。

「…やっぱり一人でクラスにいるのは心細いので、来ちゃいました。迷惑なのは分かっているんですけど…どうしても天崎さんの顔が見たくて」

申し訳なさそうにうつむき加減で話す夜美。だが迷惑などとは和麻は微塵も思っていない。むしろ様子を見たくてこちらから行こうかと思っていたくらいなのだから。

「大丈夫。俺も退屈してたし、霧野と話したかったぜ」

「ほんとですか？ 嬉しいですっ」

につこりとほほ笑む姿はとても幼い女の子のようだ。いや、俺は決してロリコンではないぞ。

「ところで、今朝は何かされなかったか？」

「はい。今のところは大丈夫です」

表情からも哀しそうなそぶりは見られない。嘘をついているわけでもなさそうだ。その様子を見て和麻はホッとした。

「そうか。やっぱり気をつけるとしたら掃除からHRにかけてか」

「はい…」

やはりその不安はぬぐえない。きつとあの三人は出てくるはずだ。

「またいじめられたら、助けてくれますか？」

「心配すんな。まずいじめさせねーぜ」

「わあ。ありがとうございますっ」

この笑顔を涙で歪ませはしない。絶対にさせるもんか。和麻は強くそう誓った。

そろそろ良い時間だ。次の授業が始まってしまっ。

「っと、そろそろ休み時間も終わりだな」

「はい。…あの、また来ていいですか？」

教室に戻るのが嫌だとはつきり分かる表情だった。実際に夜美は出

来ることなら、ずっと和麻と一緒にいたいのだ。

笑顔でその問いに和麻は答えた。

「いつでも来な」

「分かりましたっ」

太陽のような笑顔を残すと、長くしなやかに伸びた髪を翻して夜美は去って行った。

時は昼休み。和麻にとっては恒例のお昼寝タイムだ。が、しかし今日はそういうわけにもいかなかった。

夜美は休み時間になるたびに和麻のもとを訪れ、楽しい時間を過ごしていた。きつと笑っていられるのはこの授業と授業の合間である。たった十分の休憩時間しかない。と夜美は思っているのだ。もちろん和麻もそんな夜美を快く受け入れた。

「あのっ、お昼、一緒に食べませんか？」

三限目の休み時間、夜美は思い切ってそんな提案をしたのだ。

「OK。それじゃ学食で待ち合わせにするか？」

「はいっ。それじゃあ、待ってますねっ」

和麻は迷わず承認した。夜美のそばにいればいじめてくることもないだろう。

因みに充はどうせ早めに切り上げてサッカーに行くので誘わなかった。死んでもサッカー馬鹿は治らない。

そんなこんなで迎えた昼休み。実は和麻はまだ学校の食堂に行ったことがなかった。テキパキと教室でお昼を済ませて昼寝をするからだ。

「あれ、和麻学食行くのか？ 珍しいな」

そんな事を何回か言われてしまっくらい和麻は学食になじみがなかった。

そして和麻はふと気付いた。

「…学食、どこだっけ？」

一体どこに向かっているのだろう。もう一度言っておくが、この学校はかなり広い。普通に歩くと迷ってしまう夢幻の迷宮…とまではいかないが、構造をよく知らないと校舎を出ることすらままならない。

「困った…」

夜美のことだ。早く行かないと泣き出してしまう可能性も否定できない。せつかくできた友達なのに、それを裏切ってしまうことになる。

「学校の道案内はどこだ？」

幸いいたるところにマップが取り付けられている。昔授業参観に来た父兄が、トイレの場所が分からずに困ったという事件があったため、それ以来マップを表示して迷いにくくするという配慮がなされた。

職員室の場所くらいは知っているので、和麻はそこへ赴いた。もちろん職員室の前にマップがあることも知っている。

行ってみると案外自分のクラスからそう離れていないことが分かった。

「悪い、遅れた」

「いえ、私も今来たところです」

なんとか学食にたどり着いた和麻は、食券販売機の横に小ぢんまりと立っている夜美を見つけた。手にはお弁当の包みを握っていた。

「しかし、人が多いな」

「席をとっておきました。こっちですよ」

「お、準備が良いな」

意外にこういうことは出来るみたいだ。しっかりしたところもあるのかもしれない。

テーブルの席に二人並んで座る。やっぱりこういうのはちょっと恥ずかしい。

「黒木さんはいらつしやらないんですか？」

三人分の予約を取っていたので、夜美が聞いてきた。

「あいつはさっさと食って昼休みはサッカーに身を投じているから来れないんだよ」

「そうですね。じゃあ二人で食べましょう」

ふと思う。女の子と一緒に二人きりでお弁当タイム。これは実はすごくはずかしいことなんじゃないか？　そして、夜美は恥ずかしく思っていないのだろうか。羞恥心がないのは女の子としていかなものか。

「そ、そうだな」

「誰かと一緒にお昼を食べるなんて、初めてです」

大そう嬉しそうな表情で夜美は弁当の包みを解いていく。和麻も自分の弁当を開けることにした。

「俺も、女の子と食べるのは初めてかな。微妙に恥ずかしくて、一緒に食べたことなかった」

本当は微妙なんてもものではなく猛烈に恥ずかしかったからなのだが、そんなことはもちろん口に出さない。

「天崎さんは、お弁当はいつもご自分で？」

「いや、いつも母さんが作ってくれてるよ。俺そういうのって苦手だから」

自慢じゃないがカップ麺ならきっちり作り上げることができる。それだけだ。

「そうなんですか」

「霧野のお弁当は誰がつくるんだ？」

見たところとても豪華なおかずたちが狭い箱の中でひしめいている。鼻をくすぐる匂いだけで美味いということははっきりわかる。

「自分で作ってます」

「……これを？」

「はいっ」

夜美はニコツと笑った。

和麻はど肝を抜かれた。どう考えてもこれは女子高校生が作れるようなものではないからだ。大抵良い飲食店は食材が命だ。だが夜美のお弁当箱の中身は和麻がよく通っているスーパーで買ってしまうお手頃な値段の食材ばかりだった。つまり何が言いたいかというと、そんなありふれた食材たちをこれほどまでに豪華なおかずへと変えてしまう力を、技術を、夜美が持っているということだ。

「とてもじゃないが、信じられないぜ……」

「そんなに、下手でしょうか……？」

なぜ夜美は物事をマイナス方面へと考えてしまうのだろうか。やっぱりいじめられっ子は自虐が自然に多くなるものなのか。

「逆だよ。どこぞのシェフが作ったのかと思ったんだ」

和麻の言葉がほめ言葉だと理解したのか、そう和麻が言っていると夜美はちよつと顔を赤くして照れていた。

「そ、そんなに上手じゃないですよ。エヘヘ」

「いやいや、謙遜することなんかないぜ。全部美味しそうだ」

正直母さんほどの料理上手はなかなかいないと思っていたが、これを見せられるともうだめだ。

「……それじゃ、食べてみますか？」

そういうと夜美はきょとんとしている和麻の目の前に自分の弁当を差し出した。

「これを、俺が、食べても、良いの？」

「お弁当の中身を交換して食べたりするの、やってみたかったんです。……駄目でしょうか？」

つまり夜美は俺と弁当の中身を交換したいと言っているのだろうか。

……もちろん乗らない道理はないっ！

「よし、じゃ俺はこの竜田揚げを頂こう。さあ、選べ」

「えっと、じゃあ私はこの卵焼きにしますっ」

トレード成立……でいいのだろうか。

「そんなものでいいのか？」

向こうは竜田揚げ。こっちは卵焼き。明らかに不平等な交換ではな

いか。渡す方として恥ずかしい。

「はい。私、焦げてない卵焼き作れたことないんです」

「まあ、霧野がそう言うならいいけど。じゃトレード成立だな？」

「はいっ」

さっそく和麻はトレードによって手に入れた夜美特製の竜田揚げを食す。結構大きいサイズだ。一口で食べるには無理がある。

「…どうでしょう？」

「…美味い。これ本当に美味いぞ」

この瞬間我が弁当のおかずは霧野夜美という女生徒の黄金の弁当によつて打ち砕かれた。

「よかつたですっ」

につこりとほほ笑む夜美。まるで最初からこれを食べさせたかつたかのような表情だ。

「口の中に広がるジューシーな肉汁、そして絶妙に絡むこのタレが格別だぜ」

まさか夜美がこんなにも料理上手だとは思わなかった。にわかには信じがたい光景だ。

今度は夜美が和麻の卵焼きを食べていた。パクつと一口かじるともぐもぐと口の中でじっくり食す。

「こんなに美味しい卵焼き、見たことないです」

「そうか？ あんまり変わらないと思うけど」

まあ、さすが母親の料理ではあるのだが。

「焦げていない卵焼きは格段に美味しくなるんですよ」

感心しながら夜美はもぐもぐと卵焼きを味わっている。なるほど、料理上手の夜美が言うのなら間違いないだろう。

「他にも、なんか食べていいか？」

「どうぞ、好きなおかずを取ってください」

男とこういうことをする女子はあまり見たことがないのだが、そんなことはお構いなしに夜美はおかずの交換を楽しんでいた。もちろん和麻も楽しんでいるのだが。今日の昼食はいつもより楽しいもの

になった。

「じゃあこの、…コロッケなのかな？」

「それはカキフライです。…初めて挑戦したので、味には自信がないです」

聞いたか諸君。最近の女子高生はカキフライを弁当に詰めるそうぞぞ。

「牡蠣、食えるのか？」

「お母さんの親戚の人から頂いたので、フライにしてみました。食べたことないです」

「よく食おうと思ったな」

「食わず嫌いは、よくないですから」

和麻は牡蠣は割と好きな方なので頂くことにした。

「じゃあ、私の番ですね。……うーんと、ハンバーグを一かけら食べたいです」

母さん特製の和風みぞれハンバーグに食いついてきた。さすがだ。

「今度はカキフライに見合うブツということか。いいだろう」

カキフライを夜美の弁当から頂戴する。夜美は丁寧に裏箸を使って三分の一ほどハンバーグを切り取ると、そっと自分の弁当箱に移した。裏箸についたタレを舐める仕草がかわいい。

「何という美味さだ」

和麻はまたもカキフライの味わい深いその味に感嘆していた。これは本当に初めて作ったものなのか。

「美味しいですか？」

「食べてみるよ」

夜美は意を決してカキフライをかじる。だが、やはり女の子には複雑な味だったのか、あまり美味しそうな顔ではなかった。

「…私にはちよつと早すぎる味です…」

「まあ、仕方ないよな」

牡蠣は好きな人間と嫌いな人間の差が激しい食材だ。好きな人間は一度食べるとやみつきになってしまいが、嫌いな人間はいつになっ

ても食べられないものなのだ。

「でも、ハンバーグは美味しいですっ」

先ほど和麻の弁当から取ったみぞれソースのハンバーグは夜美の心を捉えたようだ。やはりハンバーグは美味しい。揺るがない世界共通の常識である。

「母さんの得意料理だからな」

「いつかレシピを教えて頂きたいです」

きつとハンバーグは基本的に他と変わらないだろう。あまりそういう世界に入ったことがないのでよく分からないのだが。

こうして、楽しい昼食タイムは過ぎていった。残ったカキフライは和麻が喜んでたいらげた。

「ふー。美味かったぜ」

「楽しいお昼になってよかったです」

二人が席で満腹感を味わっていると、充が現れた。

「…おばちゃん、水ちょうだい」

相当疲れているようだ。きつとはしゃぎまわりすぎたに違いない。何度も言うが充はサッカー馬鹿である。

「あれ、黒木さんですよね？」

夜美はその存在感に気づいたらしく、声をあげた。と、同時に和麻と充の目があったしまった。

「あ、和麻。お前なんでここにいるんだよ。昼寝じゃねーのか？」

「今日はちよつとここで食べたかったのさ」

不審な顔をしたが、夜美に気づいた充はニヤリと顔を歪めると、こちらに近づいてきた。

「ほーう。お主なかなかやるではないか」

「なんだよ」

「俺を差し置いてリア充してんじゃねーっ」

笑ったかと思うといきなり叫んで泣き出す。感情がぐちゃぐちゃだ。

「とにかく、落ちつくうぜ。なあ」

「いつから彼女なんて作りやがったんだチクショウ」

「へっ？ か、かかか彼女って、私がですかああ！？」

「いや、彼女ではねーし」

夜美は顔が真っ赤で、充は疲れているのか真っ青だ。人間とは見事に感情豊かな生物だ。

「か、彼女…わ、私が…彼…女」

「こらこら、落ちつけよ」

何か勘違いしているようだ。きっとこれは感情的な意識の表れではなく、勘違いだろう。

「は、はい。えーっと、ふうー」

「冗談だよ。事情は聞いた。俺も協力するぜ」

「協力、ですか？」

「その三人が出てきたら、一緒に追っ払ってやるよ」

につこり笑いながら、充は右手の親指を突き出した。

「ほんとですか？ 嬉しいです」

「だからさ、俺も、夜美ちゃんの友達になってもいいかな？」

「ぜひ、お友達になってほしいです」

二人目の友達に、夜美は歓喜の表情を浮かべている。微笑ましい光景だった。

「さあ、三人いれば何とやらだぜ」

「そこを略すな」

きつと出てこなかったのだろう。やはりこいつは馬鹿なのだった。

「さあ、白状しろ和麻。…なんで俺を昼飯に呼ばなかったんだ！」

そんな事を根に持つとはどこまでも心が小さい男だ。忘れてしまえばいいものを。数学の公式は三分で忘れるくせに、こいつは三年前に貸した小銭の金額を正確に覚えているのだ。

「さつさと食ってグラウンドに走って言ったやつに『もう一度よく考えろ、お前が悪いんじゃないのか』って質問をして答えを聞いてから考えやがれ」

「……すまん」

「いいんだ。おかげで楽しい飯になった」

「夜美ちゃん、どんなお昼だった？」

和麻に聞いても無駄だと踏んだのか、充は夜美に今回の昼休みの全貌を問うた。

「えっと、おしゃべりしたり、お弁当のおかずを交換したりしました」

「地獄に堕ちろおーっ、和麻ああああ」

「ええいやかましい！ここは食堂だ。てめえは動物園の檻にでも入ってる！」

下手すると動物園の猿よりうるさいやつなのだ。こいつは。

「うるさい！てめえこそワニの水槽で泳いでろ！」

嫉妬というものは時に人の心を激しく豹変させるということを、和麻は嫌というほど知った。

だが、そんな三人を遠くから睨みつけている三つの視線には、気づかなかったのだった。

三人は食堂を出ると、校庭に出た。グラウンドではたくさんの生徒が走り回っている。先ほど充が共に闘っていたであろうサッカーの集まりもたむろっている。

「今日もいい天気だなあ」

充は背伸びをすると、一つ欠伸をした。

「そっぴやなんで戻ってきたんだよ」

和麻は学食に現れた理由を充に問うた。

「ちよつとのどが渴いたから水飲みに行ったんだよ。そしたらお前らを見つけたから戻るのやめた」

「戻っていいばいものを」

「なんか言ったか」

「いやなにも」

そんな会話をしながら和麻は校庭を見つめた。夜美は校庭で走り回

っている生徒をみて羨ましそうな顔をしている。

「私も…遊んでみたいな」

ふと夜美はそう呟いていた。小学校の時も、校庭に出て遊んだことなど無かった。遊びに誘ってくれるような人間はいなかったのだ。いつも一人で本を読むか、せいぜい頑張っても一人さみしくブランコをこぐくらいしかなかった。

和麻はその、消え入りそうなほど小さく呟いた夜美の言葉を聞き逃さなかった。

「じゃ、遊んでみるか？」

和麻の言葉に驚いた表情を見せる夜美。だが、一瞬のあと、その顔は輝いていた。

「良いんですか？」

「充。サッカーしに行こうぜ」

「お、珍しいな。いいぜ、行こうか」

和麻は夜美の手を引いて靴箱へと走り出す。少しバランスを崩しつつも夜美は走り出した。

「おまたせ。和麻連れてきたぜ」

充は先ほどもにサッカーをしていた同志に声をかけた。

「早く入れよ。ヤバいぜ、二人抜けてった」

充のチームのうちの二人は校内放送で呼び出されたらしく、その用事を済ませるために抜けたらしい。グッドタイミングだ。

「大丈夫。代えがいるから」

「代えって…なんで女子？」

「いいじゃん。たまにはこういうのも」

チームのメンバーは少しいぶかしんでいたが、すぐに了承した。

「そうだな。可愛い子ならオールオッケーだぜ」

理由が理由だが気にしない。

「あ、あの、よよよろしくお願いしますっ」

緊張気味ではあるが、和麻と充がいれば大丈夫だろう。点数差は三対〇。そして昼休みの残り時間はあと二十分弱だ。十分逆転できる。

「よし。じゃあ霧野は俺のそばで待ってる。サッカーはやったことがあるか？」

「授業で少しならやったことがありますけど…ダメダメです」

和麻は笑って答える。上手下手は関係ないのだ。

「そんなの関係ないさ。楽しく遊べば、それでいいんだよ。さあ、行くぜ」

三人が入ると試合が再開される。依然としてボールの支配率は敵チームが高い。

敵側にはチームワークのとれた三人組がいる。見事な連携でパスを回し、絶妙な位置からシュートを決めてくる。

そしてボールはその三人のうちの一人が所有していた。

目配せをしながら連携を散る。試合のときでも素晴らしい活躍をしている三人なので、とても厄介だった。

「和麻、そっちは任せたぜ」

「いつでもこい」

だが和麻と充も連携の面ではまさに阿吽の呼吸と呼ぶにふさわしいものだった。ひたたくりを捕まえることができたのも、そのコンビネーションがあつたからだ。

まずは充が攻撃を仕掛ける。サッカー馬鹿であるがゆえに鍛えられたその腕にはなかなか勝てる人間はいない。

斜め後ろから思いつきりボールに突っ込みそれを奪い取る。思いもよらぬ不意打ちに走っていた敵プレイヤーはバランスを崩す。

「ほらよ和麻」

「よしきた」

取りあげたボールを和麻へとパスする。

華麗にそれを受け取ると、ゴールに向かって走り出す。サッカー経験はそれほどないが、シュートくらいはいくらでも決めたことがあった。充によく付き合わされたこともある。

「させないぜ和麻あ！」

だが目の前から二人ほど和麻に突っ込んでくる敵メンバーを確認し

た。

「くっ」

一人目はなんとか避けられたものの、もう一人がボールを蹴り上げた。和麻の足に当たったそれは跳ね返ったかと思うとちょうど後ろにいた夜美の前に転がった。

「霧野、そいつをゴールに向かって思いっきりぶっ飛ばせえ！」

「はわわわ、えっと」

夜美は慌てていた。無理もないだろう。いきなり目の前にボールが来るのだから。

「えいつ！」

目を瞑ったまま、夜美は言われた通り力いっぱいボールを蹴った。放物線を描いてそのボールは飛んでいく。和麻には見守ることしかできなかった。

「オーライ」

だがその先にはゴールとともにキーパーの姿も確認された。余裕の表情で構えている。

キーパーがキャッチすると思われた瞬間だった。

「なっ」

ゴールの左端にボールが当たり、変則的な曲がり方をした。キーパーとの隙間をくぐり抜け、その後ろのネットに当たったのだった。

「入った！入ったぞ！」

歓声が上がった。まさか女子に入れられるとは思っていなかったらしく、キーパーは落胆していた。

「今のつて、ゴールでいいんですよ？」

「ナイスシュートだぜ霧野」

角にあてて入れるとは、素晴らしい腕前だ。まぐれでも滅多にないことだ。

「夜美ちゃん、ほんとにあまり経験ないの？ プロ並みのシュートだったぜ」

「そ、そんなことないですよ。いつものけものにされてたし、今の

「ゴールが初めてですから」

照れた表情で夜美は笑っていた。敵味方問わずメンバーはみんな脱帽している。もちろん和麻だって例外ではない。

「よし。まずは一点。まだまだ行こうぜ！」

「おう！」

「がんばりますっ」

昼休み終了の予鈴が鳴るころには、一気に三人のチームが逆転していた。

「さっきのすごかったな」

「ああ」

教室で和麻と充は昼休みのスーパープレイについて語っていた。まさしくミラクルシュートと呼ぶにふさわしいものだった。

現在六限目、自習時間中。どうやら世界史の教師が出張でいないらしく、至福の時間を味わうことができた。

隣のクラスにはばれないように私語は控えめであるが、クラスの間はのびのびとしている。幸いなことに教師は途中退席したため、代わりの監督教師が来ることもなかった。グループで駄弁ったり、読書を始めたりしている人間が大半だ。

そんな中、二人は仲良く菓子パンを食べながらゆっくりと寛いでいた。

「夜美ちゃんってホントは運動神経良いんじゃないのか」

「どうだろうな」

運動神経がよかつたらいじめられずに済むのではなかるうか。返り打ちにしたり……なんてこともあるかもしれない。

昼休みの夜美はとても元気がよかった。楽しくサッカーしていたし、なによりずっと笑顔でいてくれたことが和麻は嬉しかった。

「ここからが正念場だ……」

この六限目が終われば、恐れていた掃除時間がやってくる。和麻は教室担当だが、そんなことは関係ない。掃除時間になったらすぐさ

ま昨日の女子トイレにダッシュするつもりでいた。

「そうか。そういえば掃除時間だったな」

「ああ。きつとまた何かされるはずだ。何もないことが一番いいんだが」

どうか何も起きませんように。そう願うしかない。

まだ授業が終わるまで二十分ほど残っていた。

充がふと気づいたように声をあげた。

「そう言えば、他のクラスの人間には、特にいじめられはしてないのか？」

「分らない。だが、その可能性は低いんじゃないか？ 少なくとも今日のサッカーのメンバーには嫌われていないはずだ。あれほど楽しくゲームしてたんだからな」

夜美の登場に不快感を持った者はいなかった。それはつまりいじめられていることを知らないということだ。

「そうだな。ってことはやっぱり直接嫌ってるのはアドスリーの人間ってことか」

「誰か力になってくれるやつがいれば……」

和麻たちから直接クラスの様子を観察することは出来ないので、アドバンススリークラス内の誰かがかばってくれば、十分解決への力となる。ただし問題も起こる。

一人二人の人数でかばったとしたら、効果は望めない。なぜならばその人間を含めて新たにいじめが起こる可能性が高いからだ。すると結果、せっかく出来た夜美の友達は無残にも離れていき、最悪の場合更なる憎悪を生み出すことにもつながる。

やはりいじめに立ち向かうのにはいろんなハイリスクを伴うのだった。

「何話してるの？ 和麻くん」

悩み事をしている和麻たちのもとに声をかけてくる人間がいた。

「え？ ……ああ吉野か」

我がクラスの学級委員長、よしのまどか吉野円だ。先ほどから真面目に自習して

いない生徒を注意して回っているようだ。

「何やってんの？」

「こっちのセリフよ」

ぽかんと聞き返した充の言葉に呆れた顔をしている。銀縁の眼鏡が異様な輝きを放っている気がした。怒ってるわけではないと思う。多分。

「そうだ。ちょっと相談に乗ってくれないか？」

「いいけど、授業が終わってからね」

「それじゃ間に合わないんだよ。少しでいい。知恵を貸してくれ」

和麻は真剣な表情で訴えた。顔色を読み取ったのか、なんとか円は相談にすぐ乗ってくれた。

「で、何なの、相談って」

「もし、決まった時間にある人物が事件に巻き込まれることを知っていたら、吉野ならどうする？」

「何それ、何の話？ 予言でも聞いたの？」

半分聞き流している。さすがにこんな切り出しではこの対応で当然だろう。

「そうじゃない。…実は——」

和麻と充は順を追って今までの経緯を説明し始めた。すぐに話を聞いてくれたのは委員長のいいところだ。

「つまり、その子が今日またいじめられるかも知れないってこと？」

話がひと段落して、円は納得していた。

「ああ。だからそいつのために何かしてやれることはないか、委員長をやってる人間ならなにか的確な方法を教えてくれないかと思って、訊いてみたんだ」

「なるほどね、分かったわ。…へー、和麻くんもやるじゃない」

ちよつといたずらっぽい目をしている。銀縁の眼鏡が先ほどとは違う輝きをともしている。

「なんだよ……」

「別にー。何でもないよ。えーと、そうね。誰か先生を呼んで待機してもらうとか、どうかな」

はぐらかされて話を戻された。相変わらず何を考えているのか分かんやっただ。

「…なるほど。そう言う手があったか」

夜美は極めて控えめで遠慮がちな性格なので、なかなか人に自分の悩みを伝えることができないのだ。先生もきつと夜美がいじめられているという事実を知らないだろう。知っているのは恵梨奈先生だけだ。

「ってことは恵梨奈先生か」

授業終了まで残り五分。走れば保健室まで間に合うかどうか際どいところだ。

「どうするよ、和麻」

「行くつつつてもな。掃除が始まるだろう。それに、いなかったら最悪だ」

すでに間に合わない可能性が高い。やはり自分たちで行くしかないようだ。

「やっぱりそうよね。その子のこと、後で先生たちにも言っておくね」

「頼むぜ」

間もなくして、本日最後の授業は終わりを迎えた。

廊下には箒をもつ生徒、雑巾をしぼる生徒、各々の掃除を実行する人間があふれている。なんてことのないいつもの掃除の雰囲気の中、二人の少年が廊下をダッシュしていた。

「どこだ、和麻」

「こつちだ！あの角を曲がって最初のトイレ！」

二人の少年——和麻と充は例の場所へと急いでいた。教室からはそう遠くないが、すでに掃除が始まっている。これは夜美に対するいじめが開始されたことを意味する。

角を曲がって確認。昨日の女子トイレが見える。女子トイレにダッシュする男子二人は見事に変態にしか見えないが、今は気にしている場合ではなかった。

「霧野！ いるか、霧野！」

トイレの前で夜美の名前を叫ぶ。中からは反応が見られない。これは大丈夫なのだろうか。

再度名前を呼んでみると、扉が開いた。だが、現れたのは夜美ではなく昨日の三人組の一人だった。

「またあんた？ いい加減にしてよ、ここ女子トイレって何回言ったら分かるわけ？」

「霧野はどうした。またいじめてるんじゃないのか？」

「はあ。あの子なら今日はここにいないわよ。六限の途中で気分が悪くなったとか言って、保健室に行ったのよ」

「何？ 嘘じゃねーだろうな」

「疑うっていうの？」

「ああ。疑う。お前を信用するつもりはねえ」

「嘘だと思うなら見てみなさいよ」

そう言つとその女子はトイレの扉を開いて二人にトイレの様子を見せた。確かにその三人しかいない。ジツトリした目でこちらを見つめている。

「これで分かった？ 早くどっ行きなさい」

「…そうかよ。悪かったな」

扉をボタンと閉められた。早とちりしすぎたようだ。だが和麻は何か引つかかるものを抱えた。違和感を感じたのだが、それが何なのか分からない。

「なあ和麻。夜美ちゃんのこと、見に行こうぜ」

「ああ、そうだな」

二人は保健室へと走る。先ほどのスピードよりはゆっくり目だが、具合が悪くなつたと言われたら急がねばなるまい。

保健室へとたどり着くと、和麻は扉を開けた。

「恵梨奈先生、いるか？」

先生は花瓶の手入れをしていた。和麻たちに気づくと、こちらに歩み寄ってきた。

「どうした和麻、そんな急いだ顔して」

「霧野が具合悪いって聞いたんだけど、大丈夫か？」

すると恵梨奈先生はぽかんと口を開けた。

「何言ってるの、夜美はここに来ちゃいないよ？ どうしたっての」

「なんだって！！」

二人同時に叫んでいた。まんまとしてやられた。やはり嘘だったのだ。

和麻と充は踵を返して保健室を飛び出す。変な子たち、と恵梨奈先生は呟いた。

「くそつ、もう間に合わねえぞ、和麻」

「分かってる！！」

ここからトイレまで約三分半。さっきはペースを落として走ったので五分ほどだったが相変わらず広い校舎が裏目に出た。

トイレが見えたところには、掃除残り時間は残り四分を切った頃だった。

トイレはすでもぬけの殻で、適当に水を流して帰ったようだ。そして、そのトイレの中で、夜美が泣いていた。

「あ、あのさ、霧野」

和麻に気づいた夜美は目をごしごしこすって無理やり涙を拭いた。作り笑顔でこう言った。

「…いじめられちゃいました」

「守れなかったのは俺の所為だ。本当にすまない！ 霧野」

和麻は必死の思いで謝った。もちろん充も頭を下げた。

だが、土下座する二人に夜美は言った。

「そんな、やめてください。…お二人は、何も悪くなんてありません。あの時、声を出せなかった私が問題なんです」

「あの時？ さっきここにいたのか？」

「はい。その個室に閉じ込められて……声を出すとあの二人をひどい目に合わせるぞって言われて……」

和麻は違和感の正体に気づいた。そう。あの時個室はしまっていた。三人見えたのに、誰もいないはずのあの個室はしまっていたのだ。それに気づいた時、和麻はひどく自分を憎んだ。

びしょ濡れの夜美を見るたびに心が痛んだ。守れなかったという哀しみとやるせなさが込み上げてきた。

「安心してくれ夜美ちゃん。あの三人に何かされるほど、俺も和麻もやわじゃないよ」

充も優しく笑って見せた。

「分かりました。本当に、すいません」

「夜美ちゃんの謝ることなんかないぜ。俺たちが不注意だったんだ」
声が出せないことは仕方がない。恐怖心だってもちろんあったに決まっているし、口止めされたら打つ手がないのだ。もう少し注意していれば――。そんな思いだけが和麻たちを覆っていた。

「本当に、すまなかった、霧野。……いじめさせないって言ったのにな」

「そんなことないです。天崎さんには感謝しても足りないくらいなんです。謝るなんて、そんなことしないでください」

震えながらも、少女は笑った。作り笑いなどではなく、純粋なほほ笑みだった。

「次からは、絶対に守って見せるから、約束する」

「はい」

今度こそ、守って見せる。小さく和麻は呟いた。

「立てるか？」

「はい。大丈夫です」

「また水切りしないとな」

「恵梨奈先生、またお世話になって迷惑じゃないでしょうか？」

タオルで夜美の制服を拭いていく。今回は充がいたので早めに作業が完了した。

「大丈夫。恵梨奈先生はとことん面倒を見てくれる人だぜ。きっと今日も保健室で待ってるよ」

「今日は俺も一緒に――」

『2・D 黒木充、今すぐ数学準備室へ来なさい。繰り返す、黒木充、今すぐ数学準備室へ来なさい』

校舎にこだまするスピーカー経由の瀬川の声。

充が口を開いて瞬時に凍りついた。そういえば呼び出されてたっけ。

「和麻、一生の頼みだ。俺の身代わりになってくれ！」

「さあ、霧野、急ごうぜ。風邪を引いたら大変だ」

和麻は夜美の手を引いて走り始めた。ぽかんとした表情で夜美はついてくる。

持つべきものは友達？ そんなご都合主義な考えは捨て去るべきだ。待てよ、薄情者！」

なにやら充は叫んでいるが聞かないことにした。夜美の服を乾燥させるのが先だ。友の自業自得につきあっている暇はない。

「やっぱり来たか。待ってたよ」

椅子に腰かけてコーヒーを飲んでいた恵梨奈先生はまるで二人が来るのを知っていたかのようだった。まあ予想は出来るだろう。頭のキレるひとだし。いろんな意味で。

「すみません」

控えめに夜美は謝った。しかし先生は笑ったままだ。

「気にしないでいいよ。悪いのは和麻だ」

バツサリだ。正論だから仕方ないのだが。

「そんなことありません。天崎さんは、私を一生懸命に助けてくれたんです」

うん、良い子だ。こんなときでも唯一夜美は和麻を弁護してくれるのだ。

「アハハ。そうだったね。それじゃ服を洗濯するよ」

慌てて和麻は廊下に出る。あれを食らうのは勘弁だ。本気で顔が変形しそうだ。一体どれだけの人間がああ殺人級の鉄拳を前に沈んで

いったことか。考えるだけで恐ろしい。

服を乾かしている間、和麻は三人組の手口を説明した。

「なるほど、それで一回ここに来たんだね」

和麻はまだやるせない気持ちが残っていた。あの三人組を信用したばかりにまんまと手口にはまったのだ。

「本当に許せないね、そいつら。一度制裁を下す必要がある」

この人が言うとどうしてこんな怖い響きになるんだろうか。だが今だけはすごく頼もしい。

「本当にごめんな、霧野」

「大丈夫です。全然気にしてませんよ。……それに、慣れてますから」

ずぶ濡れになることに慣れてしまった少女。それはとても悲しい。

「こらこら落ち込むな和麻。そんなんじゃ守れるものも守れないよ？」

恵梨奈先生も和麻を励ましてくれた。少し元気が出た。

「ありがとよ」

呟くと和麻は微笑んだ。

「あの、天崎さん」

話題を変えるためか、表情を変えて夜美は話しかけた。

「ん？ どうした？」

「あの、今日も、一緒に帰って頂けますか？」

昨日交わした約束を夜美は切り出した。本当に心配性な性格だな、と和麻は穏やかな気持ちになる。

「約束しただろ？ これから一緒に帰ろうぜって。心配しなくても忘れねえよ」

「よかったです。嬉しいです」

ニコツと夜美は笑うとベッドの上から床に下ろした脚をばたつかせた。まるでさつきまですず濡れで校舎を歩いていたことなど忘れていたようだ。いや、実際忘れてしまいたいことなのだからその方がいいのだ。

「和麻モテモテじゃないか」

ちやかすような口調で恵梨奈先生が言う。いたずらっぽい目をして
いる時のこの人に近づくところでもない目に遭わされるのは和麻が
経験から得た知識である。そのうちの八割は力仕事が待っていたこ
とも立証されている。

「そんなんじゃないやねえっての」

「照れなくていいんだよ色男」

「だから違うって」

「うんうんそうかそうか。それにしてもやけに嬉しそうだけどな」

「べ、別に俺は」

「あんたじゃなくて夜美が、だよ」

たとえ男の子でも、自分を慕ってくれる人がいるならそれで女の子
は嬉しいものなのだ、というのが恵梨奈先生の思想だ。きっと彼氏
ができない自分への言い訳だろう。

「あんた、なにかフザけたこと考えてないだろうね」

「まさか、ハッハッハ」

鋭い感性まで持ち合わせているとは、戦闘マシンに似つかわしい性
能だ。時々人間なのかどうか疑わしい。

「そうだ、霧野」

「はい？　なんですか天崎さん」

突然呼ばれたので不思議な顔でこっちを見ている。和麻は恵梨奈先
生から逃げるように夜美の方へと移動した。

「あのさ、携帯電話の番号教えとこうって思ったんだけど、どうだ
？」

「番号ですか？」

「ああ。またいじめられそうになったりしたら、すぐに駆けつけて
やるから」

「交換、して頂けるんですか？」

「うん。どうだ？」

「もちろん嬉しいですっ。ちょっと待っててください」

そういうとバッグから携帯電話を取り出す。赤外線の準備をし始めた。が、どう操作したらいいのか分からないようだ。

「どうしたらいいんでしょう」

「赤外線にしたら、受信を選んで、しばらく待つてればいい」

「受信ですね。…これでいいですか？」

「オーケー。バッチリ。それじゃ行くぜ」

ピピツという電子音の後、和麻の番号が夜美の携帯電話の液晶画面に浮かび上がる。『登録』のボタンを押すと、夜美の二番目のメモリーとして登録された。

「やっぱり、他は母親だけなのか…」

「はい…。ほとんど電話したことなかったです…」

ほぼ新品同様のメモリーには殺風景なほど名前がなかった。『あ行』に二つ、『天崎さん』と『お母さん』の文字が並んでいるだけだった。

「それじゃ、霧野の番号も教えてくれ。今度は送信だ」

「えっと、送信つと…」

次は和麻の携帯に番号が登録される。女の子の番号なんて初めてだった。少しドキドキする。

こうして二人は電話番号とメールアドレスを交換したのだった。

「あー。今日は疲れたな」

自転車小屋。二人は帰宅の時間を迎えていた。もちろん充はまだ説教を受けているだろう。

「すみません。私のために時間を割いてもらって」

「いいんだよ。気にすんな」

残っているのは部活動に勤しんでいる生徒ぐらいだろう。辺りは静まり返っている。時折聞こえてくる吹奏楽の音色が放課後の独特の雰囲気醸し出している。

和麻と夜美の二人は朝も通った道を歩き出す。雲行きが怪しくなっていたが、構わず帰路をたどった。

「雨降りそうですね」

「また濡れるのは嫌だよなあ」

「せっかく乾かしたので、出来れば濡れたくはないですけど…」

空は真つ黒な雲が一面覆っている。そう言えば朝一瞬テレビをつけた時、午後は降水確率八〇パーセントだったのを思い出した。

信号を渡りきったあたりでついに降り出した。

「うわ、降ってきやがった」

「急ぎましょう」

二人は傘を持っていない。それもそのはず、朝はこれでもかというくらい青い世界を空に展開していたのだから。

小雨の中を二人は駆け抜ける。今はまだそれほど降っていないが、じきに雨足は強くなるだろうと和麻は踏んだ。

しかし――。

「ひどい雨ですね」

早くも土砂降りである。とあるバス停で二人は雨宿りしていた。

「そうだな。止んでくれるといいけど」

こういうときの雨はなかなか止まないのが世の常だ。特に急ぐこともないので和麻はのんびりしているが。

「結局、濡れちゃったな」

「エヘヘ。でも、これはしょうがないですから」

せっかく乾かした服も髪も水が滴るほどに濡れてしまっている。和麻は苦笑した。

しかし突然の雨というのは厄介なものだ。傘を持ってくるんだったと後悔してももう遅い。

「あ、折りたたみ傘入ってました」

突然夜美が声をあげた。その手には水色の折りたたみ傘が握られている。

「どっから出したんだ？」

「鞆に入っていました。もしかしたらお母さんが入れてくれたのかも知れません」

「よかったじゃんか。俺の母さんは不親切だからそんな事してくれるはずないんだよな」

実際起床したときにはすでにいなかったのだから。

「でも、これで帰れますね」

「じゃあ、行くか。…まだ強いけど」

二人はバス停を離れる。雨は一向にやまないが、夜美が濡れないなら良いだろう。自分は濡れても乾かせばいい。

そんな事を考えていると、夜美が傘を差し出してきた。

「天崎さん濡れちゃいます」

「え？ 俺も入るのか？」

「もちろんですよ。…それとも、嫌ですか？」

ちよつと待つてほしい。これは、その、俗に言う相合傘ではないか。しかも女の子って。いや男子ともやりたいもんじゃないけど。

「霧野は、恥ずかしくないのか？ 相合傘」

「だって、仲良しのお友達同士なら楽しいじゃないですか」

につこりと笑う夜美。和麻は辺りを見回してみる。誰もいないので、入ることにした。

「じゃ、じゃあ、頼むよ」

「もうちよつとこっちにきて下さい。雨ひどいですから」

自転車だけを外に出して二人は傘の中へと入る。折り畳み傘なので決して大きくは無いため、ある程度身を寄せ合う必要があるのだ。

恥ずかしい。

やっぱり夜美も少し恥ずかしくなってきたらしく、若干頬を赤らめ始めた。二人の間に沈黙が訪れる。それをかき消すように雨は降り続いた。

「なんか、ちよつとドキドキしますね…エヘヘ」

「やっぱり恥ずかしいぜ…」

誰かに見られるのが恥ずかしいというより、二人でいることが恥ず

かしくなってきた。きつと夜美も同じような心境なのだろう。

「ひとつ、お願いしてもいいですか？」

唐突に夜美は口を開いた。和麻が顔を上げると、さみしげな表情で和麻の顔を覗き込んでいた。

「なんだ、言ってみるよ」

昨日のようにジュースが飲みたいのだろうか。それともやっぱり傘から出てほしいのか。

そんな和麻の考えはすぐに虚空へと消えた。夜美は言った。

「私、この通り、何も出来なくて、暗くて、変な子です。でも、嫌いにはならないで欲しいです。天崎さんが、初めて出来た唯一友達と呼べる存在なんです。だから、だからどうか……」

必死にそれだけ絞り出すような言い方だった。やっぱり一番つらいのは夜美自身なのだと和麻は痛感した。

こう言うときの夜美の接し方もだんだんと分かってきた。かける言葉を選んで、和麻は言った。

「大丈夫。俺はずっと、霧野の味方さ。充だって一緒だ。心配することは無いぜ」

「本当……ですか？」

「こんな時に嘘言つて、どうするんだよ？」

「私、怖いんです。いつか裏切られるんじゃないかって。いままでだって、いろんな裏切られ方をされてきたんです。だから、天崎さんだけは、そうならないで欲しくて」

うつむいて過去を思い出す夜美。胸をズキズキと突きまわす忌わしい過去のなだらう。いじめられた時の感情は、いじめられた人間にしか分からない。

「そんな悲しい顔すんなって。何があっても俺は霧野を裏切ったりしないぜ。だから元気出せよ」

「こんなこと言ってくれたの、天崎さんが初めてです。ありがとうございますっ」

雨にかき消されないほどに輝かしい笑顔で夜美は答えた。

「暗い顔したりするなよ？」

「はいっ。大丈夫です」

やっぱり笑っている時の夜美が一番輝いている。みじめな少女でいる夜美を和麻は見たくないのだ。笑顔の方が夜美らしいし、それに……可愛いし。

「あ、分かれ道ですね」

夜美が歩きながら声をあげた。みるといつもの分かれ道に二人はたどり着いていたのだった。

「それじゃ、ここでさよならだな」

「でっでも、それじゃ天崎さんが……」

ここで帰り道が分岐するということは、傘を持っていない和麻がずぶ濡れで帰るということに他ならない。

「大丈夫。濡れたら乾かせばいい」

「だめです。風邪引いちゃいます」

どうにも和麻を離そうとしない夜美。気持ちは分かるが、さすがにこれ以上お世話になるわけにはいかない。

「走ればすぐつくさ」

「……」

夜美はうつむいてしまった。少しでも長く会話していたかった。だが、和麻とはここで別れなければならぬ。

「じゃあ、風邪、引かないでくださいね。明日、私待ってますから。ここで」

「ああ。また明日な」

渋々夜美は一人になることを決めた。昨日以上にこの瞬間が寂しい。きつと一緒に過ごした時間が長かったからだろう。母親以外のひとと一日を過ごしたことのない夜美には、こんな感覚が新鮮だった。別れがづらい。それはどうしようもない感情なのだ。

降りしきる雨に打たれながら自転車走らせる和麻を、夜美は見えなくなるまで見つめていた。

Part 3 - Unexpected Accident -

「おはようございますっ、天崎さんっ」

「おはよ」

翌日の朝。夜美はウキウキしながら和麻に声をかけた。一緒に登校してくれる友達という存在が夜美を突き動かしている。和麻に会えるのが嬉しいのだ。

「テンション高いな」

「気持ちのいい朝ですねっ」

和麻にとってはただ眠いだけだった。昨日雨が降ったことを考えれば、雲ひとつない空は確かに清々しいが。

「やっぱり、眠たいですか？」

「いつものことだ。ふぁーあ」

昨日と同じ風景。変わらない通学路。そして隣を歩く夜美。やっぱりこんな朝のシチュエーションは緊張するのが人間だろう。

「クアーズマー……！！」

そしてこんな平和的登校時間を台無しにしてくれるやつもいるわけだ。世界の理は塞翁が馬なのだ。

充はまたも和麻たちの前でギリギリ停止した。肩で息をしているのは言つまでもないことだ。

「おはようございますっ、黒木さんっ」

「…ああおはよう、夜美ちゃん」

「暑苦しい奴め。もう少し静かに登場しやがれ」

自転車をぶっ飛ばすのは競輪選手にでもなっただけにしてくれ。サッカーより向いている可能性がある。

「無茶言つなよ。超高速で静かに迫るなんて出来るか」

「超高速で接近するなと言っただよ」

「てめえ。俺を置いて帰りやがったな」

「昨日は霧野と帰ったからな。お前を待っていると日が暮れる気がし

「ただ」

相合傘のことは口に出すつもりがない。そんなもの恥ずかしくて顔から火が出てしまう。

「俺も一緒に帰りたかったな」

「じゃあ、今日は三人で帰りましょう」

「充が説教されてなかったら考えてやるよ」

もつともそれは至難の技だろう。充にとっては。

雨で散ってしまった桜の並木道を、笑いながら三人は進んでいた。

しかし、行く手を阻むものが現れた。それは信号待ちをしていた時である。

「あんたたち、そんな奴をかばって楽しいの？」

「ほんと、そんな奴と突き合うなんて、虫唾が走るわ。人生無駄にするわよ」

「そんなゴミみたいな人間のどこがいいのかしら」

例の三人組だった。和麻は三人の言葉を聞いた瞬間に睨みつけた。

「あ、天崎さん……」

無意識に夜美は和麻の後ろに隠れた。夜美にとっては天敵も同然だ。一番で会いたくない人間三連発だ。やはり人間万事塞翁が馬だ。

「大丈夫。あんなのに耳を貸しちゃだめだ」

相変わらず他人を見下したような視線が飛んでくる。夜美を嘲笑い、放課後にいじめる卑劣なやつらだ。

「少なくともお前らの方が何千倍もゴミに近いんじゃないのか？」

「そうだな。夜美ちゃんは俺たちの友達だ」

そう充が叫ぶと、三人はどっと笑いだした。

「アッハハハハ。友達？ そんなの？ 冗談もいい加減にしてよね」

「悪いが本気なんでね。お前らが俺らを罵るのは一向に構わねえ。だげどな、霧野を侮辱するのだけは許さないぜ」

夜美の笑顔を奪おうとするやつらだけは絶対に許せない。許してはいけないのだ。

「いるものねえ、物好きな馬鹿って」

「キモいだけの変態男子なのよ。女子トイレに勝手に踏み込んできたし」

口数は一向に減らないようだ。相手にするのも面倒なのでそろそろ行くことにした。

「結構。じゃあな。さ、行こうぜ霧野」

「は、はい」

和麻たちはちょうど青になった信号を渡りだした。そのまま何事もなかったかのように他愛もない会話を始める。

三人は少しその態度にいらつきを覚えた。あれだけ悪口を言っているのに、微動だにしない様子。相手になどしていかないような、そんな雰囲気。

「ちよつと、あの二人ウザくない？」

「ウザいね。あいつらもやっちゃおうよ」

「そうね。友達とやらを消し去ってやろうかしら」

不敵な微笑を三人はそれぞれに浮かべ、横断歩道を渡った。

昼休みとは不思議なものだ。長いようで短い四十分の時間のうちに存在するつかの間の休息。それを生徒は思い思いに過ごすのだが、その時間の感じ方はその人その人、またはその日その日によって様々だ。長く感じる人もいれば、あつという間に終わる人もいる。長く感じる日があれば、あつという間に終わる日だってあるのだ。

そして大半の場合、楽しい時間を過ごしている時の方が短く感じてしまうのが世の常であり、人間の感覚なのである。

そんな不思議な昼休みをどう過ごすかは自由だ。何故ならつかの間の休息であるからだ。

「ああ、違います。そこはxじゃなくてyでくくってみてください」
現在三人は例の廃れた図書館にいるのだった。理由は簡単。昨日だ

された充の特別課題をこなすためである。

「本当だ……。出来た。出来たよ夜美ちゃん!!」

「エヘヘ。これは因数分解の中でも基本的なカタチですから、覚えておくと便利ですよ?」

「そうなんだ、サンキューな」

「それほどでもないです」

ついに瀬川がシビレを切らしたのだった。いつまでたっても治らない充の居眠り癖を改心させるために出された課題だ。その枚数、五枚半。今日中に提出するように。瀬川はそう言い放ったのだった。

「瀬川じゃなくて夜美ちゃんが数学の先生だったら大喜びなんだけどな」

「嬉しいお言葉ですっ」

「それだと霧野の授業が進まないだろうが」

和麻はソファーに寝転がって本を読みながら突っ込んだ。腐つても図書室。いろんな本が置いてある。ヒマつぶしの材料にはうってつけだ。さすがに辞書は読む気にはならないが。

「和麻も手伝ってやりなよ。親友なんだろう?」

コーヒーを飲みながら恵梨奈先生は言った。もう早速片づけに飽きたようである。整頓しかけの歴史資料を足元にドカッと置いたかと思ふといすに座って新聞を読み始めたのだった。

「ヤツの自業自得につきあう道理はねーからな」

和麻も一口コーヒーを飲む。眠気覚ましのコーヒーのつもりだったが、例によって恵梨奈先生に働かせられ、更に問題を一問解く毎に感動して声を上げる充の所為ですっかり眠気が吹き飛んでしまった。

「そう。じゃ、これを――」

「よし充、次の問題はな、こうやればいいんだ」

「あ、ああサンキュー」

危うくまた途方もなく重い資料を運ばされるところだった。和麻は反射的にソファーから跳ね起きていた。

「天崎さんは数学得意ですか?」

「全然だな。とりあえず赤点は無いようにしてるけど、得意とは呼べないぜ」

「そうなんですか」

「ま、こいつよりは何倍もマシだけだな」

充を指さして吐き捨てた。充は不服そうな顔はするものの、否定はしない。自分で認めてしまっているのだ。最近ようやく自分が馬鹿だということに気が始めたようだ。

「しかし夜美は流石アドスリーなんだな」

夜美の教え方に恵梨奈先生は感心していた。和麻もそれには素直にうなずける。なんとあの充が納得できるように教えることができるのだ。瀬川が手こずっている最大の刺客をいとも簡単に打破していたのだった。

「でも、成績は全然ですから……エヘヘ」

無理に笑つてもその暗い瞳は隠せない。いじめがエスカレートしないことを願うばかりだ。

「終わったぜー!!」

昼休みもあと五分ほどで終了と言うギリギリの時間、充はついに課題をクリアした。

「時間内に終わってよかったです」

「これに懲りてもう居眠りはしないことだな」

「ど、努力はしてみよう」

そろそろ教室に戻る時間なので三人は旧図書室を後にする。最後に恵梨奈先生が鍵をかけて外に出た。

「ここがいつも天崎さんが過ごしている憩いの場所なんですよね？」

「まあ、憩いつつてもただ寝るだけだな」

「ふふっ。それもいい過ごし方だと思います」

しばらく進んで渡り廊下。その先の階段でそれぞれ分かれる。先生は保健室に、夜美はアドバンスクラスへ、和麻と充は2・Dへ向かった。

それは和麻たちが教室に入った瞬間であつた。ただならぬ違和感が漂っていた。

二人を敬遠するような、そんな視線が飛んでくる。なかには非難の目もあるようだった。

「なんか、おかしくねえか？」

充も分かつたようだ。やはりこの雰囲気はおかしい。

「みんな俺たちを遠ざけているのか？」

その時、とある女子のグループからヒソヒソ話が聞こえてきた。

「あの二人、本当に女子トイレに入ったの？」

「うん、いきなり飛び込んできたらしいよ。誰かが入ったタイミングを見計らつて」

「うっそー、キモいー」

なるほど、そう言うことだったのか。和麻は理解した。

昨日の事件が間違つた伝わり方をしているのだ。それもあの三人に都合のいいように組みかえられている。

「みんな誤解だ！ その情報は間違つてる！」

和麻は叫んだ。だが、皆は聞く耳を持たない。

「まさかお前らがそんなことするなんてな、がっかりだぜ」

「だから、これには理由があるんだ！」

充も声を大にして叫ぶ。こんなうわさ、冗談ではすまない。

「あーら、覗きに理由なんて、やっぱり変態さんなのねー」

突然後ろで声がした。和麻たちが振り返ると、あの三人組が微笑を浮かべていた。勝ち誇つた様な顔をしている。

「てめえらか。こんな意味不明な情報を流したのは！」

「何を言ってるの。私たちは被害者なのよ。あんたたちにトイレを覗かれた」

やはり仕組んだのはあいつらのようだ。そもそも掃除時間なので、被害者も何もあつたものではない。

「何をばかな。そろそろ授業始まっちゃうぜ？」

充がそう言つた瞬間にまさしくグッドタイミングでチャイムが鳴つ

た。

しかし彼女たちは一向にその場を動こうとしない。むしろ余裕の表情である。

「そうね。でも今日はここもあっちも自習なの」

「それで俺らにこじつけをしに来たってところか」

「こじつけなんてよく言えるわね。こっちは覗かれたのよ」

「だから、覗いてねえって言ってるんだろ！」

そろそろ苦しくなってきた。クラスの人間は明らかに三人組の言うことを信じ込んでいる。

すると、三人組はするだけのことをしたのか、帰っていった。

「くそっ、あのやるー」

和麻も怒りでいっぱいだった。いじめの矛先を和麻たちに向けたのだ。どこまでも卑劣である。

仕方なく、陰険な雰囲気の漂うクラスの席に二人は腰を下ろした。

自習時間。静かな空間だが、今はこの静寂が逆に焦りを掻きたてる。みんな誤解しているのに、それを解くことができない。

まだひそひそと会話が聞こえてくるが、気にしてはいけない。

二人は暗い気分のまま、午後の授業を終えた。

「和麻、どうする？」

「どうするってたって、やっぱり行くしかねえだろ」

六限目は通常通り授業が行われた。英語教師はクラスの空気に気づいた様子もなく、冷静に淡々と分厚いグラマーをめくっていたのだった。

今は現在掃除時間だが、二人は例の女子トイレに行くことをためらっていた。クラスの人間にこれ以上間違った情報が伝われば、更に誤解を解くことは難しくなる。だが行かなければ夜美がまたいじめられてしまう。絵にかいたような苦渋の選択だ。

「やっぱり、俺たちの都合で夜美ちゃんを悲しませるわけにはいかねえよな」

「ああ。早くしないと、もう始まっている可能性は高い」

だがクラスの間は依然として冷酷な目で二人を見ている。このままでは二人とクラスとの間には溝が深まるばかりだ。

だが和麻は不審に思っていることがあった。

「なあ、なんでみんなあんなに簡単に信じ込んでいるんだ？」

その和麻の疑問に充も相槌をうつ。

「あ、言われてみれば。確かになんの根拠もなしにあそこまで信じさせることはなかなか出来そうにねーよな」

「そうするなら、何かあいつらが決定的な証拠を掴んでいるということになる。何か、クラスの間を一発で信じ込ませるようなものを」

それが何なのかは皆目見当もつかないが、そう考えるのが自然である。

そんな事を考えていると、吉野円が近づいてきた。

「あなたたち、本当に女子トイレを覗いたの？」

「違う。そんなダサイことするかよ」

必死に和麻は反論する。もしかしたら円なら分かってくれるかもしれないと思ったからだ。

「昨日言っただろ？ いじめを止めるんだって。それが俺たちが女子トイレに踏み込んだ理由だ」

「まさか、女子トイレでいじめが起こってるの？」

「ああ、その通りだ。五限目前にいたあの三人組がいじめてるんだよ。その子に向かって放水したり、汚い掃除用のスポンジをこすりつけたりして」

その話を聞くだけで円は嫌そうな顔をした。半分は納得したようだ。

「でも、あの子たちはこんなものを見せてきたわよ？」

そう言うと円は携帯を取り出す。その画面に映っていた画像に二人は言葉を無くした。

女子トイレの扉を開けて中を覗き込んでいる和麻と充。そして泣いている夜美。

「なるほど。確かに見ようによっちゃ覗きの現場に見えるわけだ」
「どこから撮りやがったんだ。いつの間に」

携帯カメラの画質では、夜美が濡れているかどうかまでは分からない。撮り方がうまい写真だ。

「これは覗きじゃないの？」

「俺たちが昨日、駆けつけたときだ。すでに女子トイレではいじめがあつた後で、ずぶ濡れの彼女が泣いていたんだ」

「そうなの…。さっきの三人組は、この子を含む私たちが覗かれまして言つてたのよ」

「そいつは違うな。この子に訊けば分かることだけど、普段は掃除時間にいじめられてるんだよ」

ようやく納得したような顔をしてくれた。クラスの委員長に信じてもらえれば心強い。

「じゃ、今も」

「ああそうだ！ 和麻！ こんなことしてる場合じゃねーぞ。早く行かないと」

「分かつてるよ！」

何故だ。何故携帯がならないんだ！

「私も連れてつてくれない？ いじめられているかどうか、この目で確かめたいわ。そうすればあなたたちの容疑も晴れるでしょ？」

その意見には賛成だ。味方が多いのはとても助かる。だが…。

携帯電話が反応を示さない。夜美から連絡が来ればすぐにとんでいけるが、現状あのトイレに近づくのは難しいのだ。恐らくあの三人組のことだから女子トイレの周りのクラスにも手を打っているはずだ。不用意に近づくとは拘束される恐れがある。

「和麻！ 行くぞ！」

「…分かった！」

三人は走り出した。掃除時間はすでに半分が経過しようとしている。走っても五分かかる距離なので、いじめられていたら手遅れになる可能性がある。無事を祈りながら和麻は角を曲がる。

走る途中、意外にも白い目で見られることは無かった。円がついていたからかもしれないが、和麻の考えは先を急ぎ過ぎていたようだった。

そして三人は辿り着いた先でそれを見た。和麻は拍子抜けして膝をついた。

恵梨奈先生が夜美をかばい、三人にきつくお灸をすえていたのだ。夜美が和麻に気づくと、駆け寄ってきた。

「大丈夫か？」

「はい。恵梨奈先生に助けて頂いたんです。もう少しで水をかけられるところだったんですけど」

和麻の問いかけに元氣よく答えた。恵梨奈先生も三人に気づいたらしく、少し視線を送ってきた。

「ごめんね夜美ちゃん。俺たち、あいつらの所為で覗きつて勘違いされて、出るに出られなかったんだ」

「そうだったんですか。…ごめんなさい。私の所為でこんなことに…」

「気にすんなって。あいつらのやりそうなことだし」

「すいません…」

申し訳なさそうに頭を下げる夜美を見て、円が尋ねた。

「あなたが、いじめられてるっていう生徒なの？」

「え？ …あ、はい。えーっと、あなたは？」

「和麻さんと充くんのクラスで委員長してるの。吉野円よ」

「そうなんですか。私は霧野夜美と言います」

どうやら三人目の友達ができたようだ。仲良く笑顔をかわしながら自己紹介していた。

と、横では恵梨奈先生の説教が続いていた。

「あんなことをしていいと思ってるんだね？」

「いえ、そんな事は…」

「じゃあどうしてこんなことするんだらうね。簡単だね。誰も見てないから。違うかい？」

「……………」

言葉が返せないようだ。やはり正論に勝てる理論は存在しえない。

「夜美がどれだけ傷ついたか、永遠にあんたたちには分からないよ。平気で人をいじめるやつは、絶対にいじめられてるやつの気なんざわかりえないからね」

流石恵梨奈先生だ。説教に関しても、この人の前に出る者はいない。その後、他の先生方にも事が知れ、校内で発生していたいじめに対して全く感知されていなかったことが問題となり、対策が進むことになった。三人は生徒指導室でこつてり絞られたという。

こうしてこの日は一度もいじめに遭うことなく帰宅することができたのだった。

「それでは、また明日ですね」

帰り道。夜美はニコツと微笑んで手を振った。和麻も手を振り返す。

「ああ、また明日な」

夕日差す通学路。今日は円、充、夜美、和麻の四人で帰ることになったのだった。夜美は楽しそうに笑いながらみんなと歩いていった。けれどもやはり最後はこの二人になってしまふ。充は和麻と道は同じだが、本屋に寄って帰るからと、ひとつ前の曲がり角で別れた。そしてたった今夜美と分かれ道で手を振りあつたところである。明日また、そう約束した。

和麻は自転車に乗ると、家に向かってゆっくりとペダルをこぎ始める。坂に伸びる影を見つめながら、和麻はぼんやりと考えた。

自分は、果たして夜美の役に立っているのだろうか。あいつのためにと思っただけでやっていることは正しいのだろうか。もしそれが正しいとして、本当にそれをすべきなのか。

「ほんと、カスみてえだな。俺って」

今日結局夜美を守ったのは、恵梨奈先生だった。和麻が自分が変な

目で見られていることを恐れ、躊躇して、その結果辿り着いた時、夜美は恵梨奈先生が守っていた。助けてやると、約束したのに。自分だけでは守れなかった。いや、自分で守れるものを守ろうとしなかった。

いじめさせないと、約束したのに。

昨日だってそうである。見え透いた嘘を真に受けてまんまと三人組の自作自演に踊らされ、夜美は酷いいじめを受けた。また、守ることができなかったのだ。

何一つとして、役に立ってないじゃないか。

和麻は想像以上に、いや、もともと分かっていたのかもしれないが、弱く、もろく、誰かを守ることすらできなかった。目の前にある不正を許さないと誓うことは出来ても、それを正すことは出来ない。そう考えると和麻は言いようもない感情がこみあげてきた。あんなにも夜美は和麻を頼っているのに、それを裏切ることしかできないのだから。

誰でもない自分に対しての、怒り、悲しみ、むなしさ、切なさ。全てのマイナスイメージを自分で自分に突きつける。

そんな事を考えていたからかもしれない。負の意思、感情は、不幸を招いてしまうのだろう。

明日、学校で会うという当たり前のように当たり前な約束。それすらも、守れなくなってしまうのだ。

「天崎さん、どうしちゃったのかな」

夜美はいつもの分かれ道で和麻を待っていた。しかし夜美は困っていた。

「遅いなあ」

腕時計を見て確認する。午前八時三十分。いつもの和麻なら、二十

分も前にここへきてくれるはずなのに。

和麻は一向に姿を見せない。もうあと二十分もすれば登校完了時間なのだ。

「そうだ、メールをしてみようつと」

携帯電話を取り出して、和麻あてのメールを作成する。もつと早くこうしておけばよかったと、ほんの少しだけ後悔する。だが、あんまりせかすのも悪い気がしたので、これくらいが妥当だろう。

『おはようございます。まだ、お家にいらっしゃいますか？ そろそろ登校完了時間が迫っていますので、メールしました。もしかしてお体の具合がよろしくないのでしょうか。もしそうでしたら返信して下さい。それまで待ってます。早く学校に行きましょう（＾○＾）』

頑張つて練習した顔文字を使つて、完成。送信の文字が浮かんで、メールの送信はこれでいいはずだ。

「今日のおかず、喜んでもらえるかな？」

一人で早起きして作った、夜美特製のお弁当。ほとんどのおかずは昨日の帰り道で聞いた和麻の好みをもとに作ったのだ。早くお昼にならないかな、と夜美はウキウキしながら和麻を待つことにした。しかし、それから更に十分たつても、和麻は来ない。携帯にもメールは帰つてこなかった。

「どうしたんだろう」

だんだんと不安になっていく。もしかしたら、何か和麻の機嫌を損ねることをしたのだろうか。

もう登校完了まで時間がない。

しかし、ふと夜美は気づいた。

「もしかして、先に行っちゃったのかな」

ここまで待つてこないということは、すでに学校へと登校している可能性がある。

「もしそうだったら、あんなメール送らなきゃよかったなあ」

すでに学校にいる人間に、まだ家ですか、なんてメール、送ったら

不審に思われるに違いない。

そう考えると、夜美は曲がり角から出来るだけ早くダッシュする。唯一、どうして先に行っちゃったんだろうという疑問だけを残してコンビ二前の信号に辿り着くと、ちょうどコンビ二から充が出てきた。

「あ、おはよう、夜美ちゃん」

「はあ、はあ。おはようございます、…黒木さん」

「どうしたの、そんなに息切らして」

「天崎さんを待ってたら、なかなか来なくて、遅れそうだったので走ってきました。ふう」

「そう言えば和麻がいないね。どうしたんだろう」

サンドイッチを朝食代わりに食べながら、充は辺りを見回す。手に持った袋には、お昼の分だろう、たらこスパゲッティが入っていた。

「もう学校に行ってしまったんだと思います」

「マジでか。夜美ちゃんを置いて？」

「そうとしか、考えられないので」

「なんだよ、最低なやつだな。せっかく待ってくれてる子を置いて行くなんて」

「いえ、でも、私が勝手に待ってるだけですから」

そろそろ鬱陶しくなったのかも知れない。やはり静かな朝は一人で登校したい時もあるのかも知れない。

「ちえ。二人を待ってたのにな」

充はつまらなそうにそう言つと、じゃあいこうか、と信号に向かって歩きだした。

教室にも、和麻の姿は無かった。

「あれ、来てないのか？」

和麻の席には鞆がかかっていなければ、机の中身も空っぽだった。案外教科書は持ち帰る和麻なので、空っぽということは和麻の不在を意味する。充はいぶかしんだ。

「なあ、吉野。和麻、来てないのか？」

花瓶の手入れをしていた吉野円を見つけたので、充は訊いた。しかし円の返事も曖昧なものだった。

「知らないわよ。黒木くんと一緒じゃないの？」

「それが、今日は姿が見えないんだよ」

「へえ。天崎くんが欠席なんて、珍しいわね」

本当に珍しいことである。和麻が学校を休む日なんて今までなかったことだ。

話を終えると同時にチャイムがなり、担任教師が来たので、そこで充は席に着いた。後で昼休みにでも夜美に報告することにした。

「席に着け。あさのHR始めるぞ。まずは出された課題を各自提出すること」

聞きあきた中年の声が教室にこだまする。和麻のいない一日をどうやって過ごすかを考える。

サッカーをしてもいいが、昼休みに夜美は一人ぼっちで過ごすことになる。今日はパスするかなさそうだった。

「出席確認。天崎……どうした、天崎が休みか。珍しいな」

担任の教師も驚いている。もちろんクラスの所々からも同じような声が聞こえてきた。

「それじゃ、池田。内山。大久保——」

その他の生徒は全員出席だった。

「そうですか。天崎さん、やっぱりどこかお体の調子が悪かったんですね」

時は変わって昼休み。楽しいランチタイムだが、和麻がいないといまいち盛り上がり欠けるものだった。夜美は予想以上にさびしげな顔をしている。ここ三日間、和麻とずっと一緒に過ごしてきた夜美にとっては辛いだろう。

弁当の中身を見ると、何やら和麻が大好きだというサバの味噌煮やトンカツが入っていた。なるほど、和麻に食べてもらいたかったのだろう。またおかずの交換をしたかったようだ。

「つつつても、別に昨日キツそうな雰囲気は無かったけどな、和麻のヤツ」

帰り道だつてみんなと一緒に笑っていたし、『また明日』といいながら別れたということは、明日もちろん学校へ行くという明確な意思表示が入っている。そんな奴が突然学校を休むというのは不自然だった。

「帰りに、和麻の家にいつてみるか」

「そうですね。ちようどお家がどこにあるのかも知りたかったですし、いい機会ですっ」

夜美の弁当をつつきながら充は放課後に和麻の家へと赴くことを決めた。

「それはそうと、今日は何をしようか」

「天崎さんがいないと、何というか、こう言ってしまったたら黒木さんに失礼かもしれませんが、今一つ盛り上がりません……」

「ああ。俺もそう思うよ」

そう考えるといかに和麻が三人の中でもムードメイカーであつたことが分かる。

「図書室、行くか」

「そうですね。恵梨奈先生にもお礼を言わなきゃいけませんし」

昼食を食べ終わると、二人はいつもの和麻の昼寝場所へと向かった。

「あの和麻がかい。へえ、明日は雪でも降るかもしれないね」

「そりゃ困るな。マフラーの用意をしないと」

足を組んでコーヒーを飲みながら、恵梨奈先生はお気楽にパソコンをいじっていた。

「恵梨奈先生は、いつもここで過ごしておられるんですか？」

「昼休みの間だけね。他は職員室か、あの保健室にいるよ」

この学校はとても広いので、保健室は他にもう二部屋存在する。

「ここでこんな仕事をしてなかったら、和麻にも会ってなかったね」「やっぱり、天崎さんと初めて会ったのは、ここなんですか？」

「ええ。いきなり入ってきて、昼寝したときは、こいつはもうホンマもののアホだと思ったけどね」

もう一年も前の話だ。恵梨奈がこの担当をはじめて間もない時だったのを覚えている。

「そうだ、あんたたちヒマなら、こいつをしまつのを手伝ってくれないかい？」

恵梨奈はいかにも重そうな辞書の類をどっさりと抱えてきた。それをどかっと床に置くと、ふうと腕で額を拭う。

「えー、何で俺らが？」

すぐさま充は不満の声をあげた。和麻につきあってここに来るたび何か重いものを運ばされるのだ。骨が折れる。

「良いじゃないですか、手伝いましょうよ」

「んー、まあ、夜美ちゃんがそう言うなら、俺は構わないけど」

夜美は楽しそうにニコニコしている。きっと運びだしたらそんな顔は出来ないだろう、と充は思った。

「それじゃ、まずはこの百科事典からお願いね」

見るからに重そうなブリタニカ国際百科事典が我が物顔で床に居座っている。運ぶのは苦労しそうだ。

「どこに運ぶんだ？」

「AからFの棚まで詰めてって」

「私も手伝いますっ」

とりあえず三冊くらいを夜美は手に取った。が、しかし。

「こ、これ、結構重いですね」

たった三冊だというのにずっしりとした辞書である。気を抜くとよるけてしまいそうだった。

「無理はしちゃダメだよ、女の子なんだから」

恵梨奈は苦労している夜美に運ばなくてもいいと言ったのだが、夜美は手伝うと言ってきかなかった。

「一体なんでいつも散らかってんだよ。俺前にこの辞書片づけた覚えがあるぞ」

「授業で使ったり先生方が調べ物したりするんだよ」

そういう点ではこの廃図書館はこの学校にとつて無くてはならないものになっている。特にここに置いてある本は高等部のみにとどまらず、中等部以下でも共通して使われているので、結構頻繁に貸し出さなければならぬそうだ。

「よっこらせつと」

「これは、ここですよね」

やはり二人いると結構スムーズに片付くものだ。見る見るうちにたまっていった百科事典は少なくなっていくた。

「次はこれだよ」

恵梨奈は少しいたずらっぽい顔で奥から英和・和英辞典が百冊くらい乗った台車を運んできた。

「まだあんのかよ」

「多いですね」

「この台車があと四台」

「多すぎるって！」

充はげんなりした。和麻がいればすぐに済むはずなのに。

「こらこら。私はいつもこれを一人で片づけてるんだぞ」

「先生なら雑作もない事だろ」

「それはどういう意味だい？」

「気にするな。さ、片付けようぜ」

先生、お願いですから手をポキポキ言わせないでください。プロレスラーにしか見えないじゃないですか。

「私もまだまだ行けますよっ」

充には恵梨奈ほどの怪力は備わっていないが、だからと言ってひよるひよるというわけでもない。ただ面倒ではあるが、まだまだ平気だった。

しかしその冊数は凄まじく、片付けは昼休み終了まで続いた。

掃除時間。充はまた、あの女子トイレへと足を運んだ。和麻はいないので、充だけである。

周囲にはまだ誤解されたままなので、一度話をつけるべきなのだが、今日のところは痛い視線を無視して女子トイレをノックする。しかし痛い視線と言ってもごく少数になっていた。昨日の一部始終を見ていた人間は充が何をしに来たかを理解しているからだ。

「はい？——あ、黒木さんっ」

「今日は大丈夫かい？」

「はい。掃除場所のメンバーを変えてもらいました」

なるほど。担任も手を打ったということだろうか。それとも恵梨奈先生の差し金か。どっちにしろよい選択である。充はホッと胸をなでおろした。

「それはよかったね」

「はいっ。あ、そう言えば、天崎さんの欠席理由、分かりましたか？」

そう言われて充は、昼休み終了間際に夜美に、和麻の欠席理由を聞いておくことを約束したことを思い出した。

「あ、ごめん、まだ。HRの時に訊こうと思って。担任ってその時くらいしか来ないからさ」

「そうですね。私も担任の先生は朝か帰りにしか見ませんし」

「今日のお弁当、和麻に食べさせたかったんだろ？」

唐突に話題を変える充。その質問に夜美はさっと顔を赤らめ、恥ずかしそうに答えた。

「…分かつちやいましたか？」

「和麻の好きなおかずがいっぱい入ってたからな。昨日好みも聞いてたし」

「…エヘヘ。初めて作るものばかりで、全然味に自信がなかったん

ですけどね」

照れ隠しの微笑みで、夜美はそう言った。しかしそういう割に味は文句なしで、充も一口貰ったのだが、とても美味しかったのを覚えている。

「霧野さん、こつち手伝ってー」

「あ、はい、今行きます。それでは、放課後ですね」

「ああ。またあとで」

充にさよならを言うと、夜美はトイレの扉を閉めた。

「帰ったら和麻にも教えとくか」

とりあえずこれで少なくとも当分いじめられることは無いだろう。

あの三人組が懲りずに仕掛けてきても、担任が状況を把握していれば、手を出しにくいはずだ。

掃除時間はあつという間に過ぎ去り、帰りのHRの時間がやってきた。担任が忌々しい課題プリントを引つ提げ、のつしのつしと我らが教室に向かって歩いてくる姿をクラスの人間が目撃すると、一斉にブーイングが巻きあがり、その後一瞬にして全体的にテンションが低下する。

そんな毎日が日常になっていたので、本日の担任の口から開口一番発せられた一言はクラス全体に衝撃を与えた。

「天崎が、交通事故にあつたそうだ。昨日の帰宅途中らしい」

充だけでなく、クラスの人間全員が声をあげた。すぐに教室中がざわめきに包まれる。

充は担任の放った言葉が理解できなかった。いや、理解したくなかったという方が正しい。

「先生！……それは、本当ですか」

「信じたくない気持ちは分かる。だがな黒木、現実からは、逃げてはいけない」

「今和麻は！」

「国立の病院に緊急搬送された。私も後で向かうが、もし黒木も時間があるなら、向かってやってくれ」

充は固く頷いた。

HRが終わるまで、クラスは落ちつかなかった。

「黒木くん」

充が急いで教室を出ようとしたところを、円は呼びとめた。

「私も一緒に行くわ」

「ああ、ありがとう」

「昨日の帰り際ってことは、私たちと別れたあとよね？」

「ああ。夜美ちゃんも知らないから、更に二人で別れた後ということになるな」

あの分かれ道から和麻の自宅までの数百メートルの間、悲劇は起こったのだ。

「とりあえず、夜美ちゃんのところに行こう」

「ええ」

充と円の二人は二階から三階へと続く廊下を駆け上る。三階にはアドバンスクラス、つまり2―A1から2―A3のクラスが設けられている。2―Dクラスからはそう遠くない距離なので、階段を上がつてすぐ、夜美を見つけた。

「夜美ちゃん！」

「あ、黒木さんと吉野さん。いまそちらに行こうと思っていたところでした」

何も知らない夜美は笑顔で二人に手を振り、近づいてきた。しかし、言わないわけにはいかないだろう。充は意を決して二人を階段下まで連れて行く。

「いいか、夜美ちゃん、落ちついて聞いてくれ」

「？ はい、なんですか？」

一呼吸置くと、充は静かに言い放った。

「和麻が、事故に遭ったらしい」

「――えっ…？ あ、天崎さんがですか？」

「ああ。昨日、夜美ちゃんが別れた後、帰る途中で」

夜美の顔がみるみる哀しみの色に染まっていく。充も、そうなる

は思っていたが、やはり言いづらい現実というものは痛ましい傷を心に残すのだ。

「そんな、……天崎さんが、……事故なんて」

「ああ、泣かないでくれ。今国立病院の方にいるらしいから、今から三人で行こう」

「…助かるんですか？　ぐすっ」

「助かると思うしかないさ。信じるんだ、和麻を」

「そうよ。マイナス思考はやっちゃだめ。行きましよう。結構遠いから、時間がないわ」

三人は決断すると、校舎を飛び出した。夜美は自転車通学ではないので、充が後ろに乗せて行くことになった。

部活動生徒でにぎわうグラウンドを片手に見つめ、二台の自転車は暮れなずむ街を疾走する。向かい風がやけに重く感じられた。早く、急がなければ、という気持ち体が急かす。

「黒木さん、重たいと思ったら、遠慮なく言ってくださいね？」

充の荒い息を気遣ってか、夜美は後ろに乗りながら充に声をかけた。

「へへっ、俺を誰だと思ってるのさ。クールビューティーで優しい黒木充様だぜ。女の子一人乗つけて走れないんじゃ、俺の名前が廃れてしまうぜ！」

「ほら、早く行くわよ！」

この時充は、めちゃくちゃなスピードを出して公共歩道を激走する2-Dクラス委員長に戦慄した。

陽が三分の二ほど沈んだとき、三人はついに国立病院へと辿り着いた。ここに和麻はいるはずである。国立というだけあって、とても大きな病棟がそびえたっている。さらに半年前に出来たばかりであるため、まだまだ真新しい外壁が汚れ一つなく綺麗にあしらわれていた。

「すいません、天崎和麻さんの病室はどこですか？」

受付では、委員長である吉野円が話をした。委員長に相応しい言葉遣いと雰囲気が出ている。

「えーと、天崎和麻様ですか。……少々お待ち下さい」

しかし受付の看護婦はすぐさま答えずに、奥のナースステーションへと入っていった。

「どうしたのかしら？」

「もしかして、ここじゃなかったんじゃないですか……。」

「いや、そんなはずはねえ」

仕方がないので、奥へと消えた看護婦を待つことにする。三人とも不安で胸がいつぱいだった。特に夜美は、今にも泣き出しそうな顔で佇んでいる。

数分の後、ようやく先ほどの看護婦が現れた。手には書類を持っていた。

「天崎様でしたら、現在集中治療室で緊急オペの執行中ですね」

「緊急…オペ…！」

想像していたよりはるかに危険な状態であることを、三人は悟った。

「そのエレベーターで三階まで上って、右の突きあたりの第二集中治療室です」

「ありがとうございます」

素早く礼を言くと三人はすぐさまエレベーターに駆け寄った。

「早く来い！」

「階段が早いわ！」

すぐ横に階段があった。一秒の消費も惜しい三人は階段を使って集中治療室へ向かって駆けのぼる。

突きあたりまでダッシュした三人はもうヘトヘトだった。

「はあ、はあ。ここか」

「やっと、着きました…」

「あら？ あなたたちも、もしかして和麻を見に来てくれたの？」
と、肩で息をする三人にかかる声があった。その三人の中で、声の人物を知る者は充を除いていなかった。

「和麻の、お母さんも来てたんですね」

そこにいたのは看護婦の服を身に纏った和麻の母親だった。簡易ソ

ファに座ってじつと成り行きを見守っているのだ。

「ここは私の職場だからね…。まさか、和麻が来るなんて思わなかったけど」

やはり和麻の母親も目には涙をためている。きつと充たちが知るよりもずっと前から——それこそ昨日の時点からここで待っているのだろう。

「手術の様子は？」

冷静に充は現状を聞いた。母親は答えた。

「大がかりな手術はとりあえず終わっているらしいの。今は絶対安静」

短く言うと、また目を伏せる。

「そうですか…」

「それより、ありがとうね。和麻のために。充くん、この二人は？」
三人が来て少し元気が出たのか、ほんのちよつと微笑みながら和麻の母親は二人を紹介するように促した

「ああ。えーと、こっちは俺らのクラスの委員長で、吉野円です」

「吉野です。はじめまして」

「はじめまして。ありがとう」

「こっちは、霧野夜美ちゃんです」

次は夜美を示して控えめに紹介する。和麻と出会った経緯は本人に話してもらった方が都合がいいからだ。

「あの、霧野といいます。和麻さんには、いじめられているところを助けて頂いたんです。そのうえ私の友達になつて頂いて——」

「あら。あの和麻が？ いいことするじゃない、あの子も。でもいじめなんて、本当に許せないわね。大丈夫なの？」

「はい。和麻さんが、いつもそばにいてくれましたから」

過去形。その響きが現状のすべてを物語っている。そう、和麻はいま、ここにいないのだ。目の前の分厚い鉄の扉で隔てられた間仕切りの向こうで、眠っている。

絶対安静。

事態は極めて深刻だった。

「和麻は、どうなったんでしょう？」

充が和麻の母親に疑問を投げかける。

「どうなったっていうと？」

「事故に遭った状況とか、どういった経路で事故にあったのかということです。何か、分かりませんか？」

「私も詳しいことは分からないんだけど、突然角からワゴン車が突っ込んできたらしいの。搬送されてきたときの和麻は……血だらけで、目も当てられなかったから、かなりの勢いでぶつかったよね……」

ぶつかったのはもちろん和麻ではなくワゴン車の方だろう。だが、何故それなら和麻は事故に遭ってしまったのか。

「普通、気づきませんか？ 車が迫ってくるのって」

「そうね。状況にもよるけど、大抵の場合は聞き分けられるはずね。エンジンの音を」

「じゃあ、和麻はどうして、事故なんかに」

「きつと、何か悩んでいたんじゃないかしら。……あの子、悩みごとを考えていると、名前を呼んでもなかなか気づかないから。きつと周りから意識が無くなってしまうのよね。それなのに悩みを打ち明けようとしらないのよ」

和麻の悩みごと。充には特に思い当たる節はなかった。やはり和麻は話していないのだろう。というか何かに思い悩んでいる和麻を、充は見たことがなかった。

会話はそこで途切れ、重い沈黙と静寂が訪れる。みんな感情が複雑に入り組んで、うまく表情を表すことができない。そんな時だった。

「天崎さん、ですね」

鉄の扉が開いて、なかからマスクと手袋を装備した医師が出てきたのだ。全員の注目が集まる。

「和麻は、大丈夫なんですか？」

苦い顔をしながら、医師は母親の問いに答えた。

「正直、まだ分かりません。脳の出血は見られませんが、体内の出血は凄まじいものでした。さらに事故の時に体の骨が数か所折れたり、一部の臓器が傷ついていました。助かるのは五分五分ですね。彼の生命力にかけるしかありません」

「そんな……」

絶望の声をあげたのは母親ではなく、夜美だった。大粒の涙を目じりに浮かべ、必死で泣かないようにこらえている。今の夜美にとって、和麻は大切な存在である。それを失うときの気持ちは計り知れない。

「まだ助からないと決まったわけではありません。彼を信じて、待つていてください」

夜美をなだめるように医師は言った。

「夜美ちゃん、こんな時だからこそ、和麻を信じてやらなきゃダメだぜ？」

充も泣き出しそうな夜美に、出来るだけ優しく、穏便に言った。

「ぐすん……はい」

力なく夜美は頷いたが、和麻を信じることを決心した。

「ありがとうございます、先生」

和麻の母親は先生に礼を言うつと、充たちの方へと向き直った。

「みんなもありがとうね。さ、後は私がここに残るから、早めに帰った方がいいわ」

まだ母親には仕事が残っている。もしそうでなくともここにいる決意はしていただろう。

だが充は首を縦には振らなかった。

「俺たちも、ここにいさせてください。……親友を置いては行けません」

「気持ちとは分かるけど、もう外は暗いのよ。みんなの保護者さんも心配されるわ」

「充くん、お母さんの言う通りよ。明日だって学校なんだから」

「……」

円の言っていることが正論だということはもちろん分かっている。けどそれでも充は納得できなかった。

「もし和麻に何かあったら真っ先に知らせるわ。約束する」

「…わかりました。無理を言っすいません」

「いいえ。私だってそうするわよ。ここまで和麻も信頼されている証ね」

苦悩の末、充たちは帰ることを了承した。集中治療室の扉に背を向けて、充は歩きだす。二人の少女も、それに続いた。

「二人は、先に行つてくれ。母さんに帰りの電話を入れてから追いつく」

充はエレベーターを降りたところで、携帯電話をポケットから取り出しながら二人に向けてそう言った。

「分かったわ」

「あ、それじゃ私も、お母さんにメールします。それに、黒木さんの自転車がないと帰れませんから」

夜美も同じように携帯を取り出す。母親あてにメールを始めた。

少し円はいぶかしんだ。二人ともこのまま私を先に帰らせてここに残ろうという魂胆かしら？

「私も待つておくことにするわ」

円も電話を入れることにした。

「そうか。じゃ各自で連絡を入れるとするか」

「はい。送信完了ですっ」

考えすぎだったようだ。二人とも特に怪しい素振りを見せることなく連絡を済ませた。

眠っている和麻の身を案じながらも、三人はほとんど人のいなくなったロビーを抜け、病院を出た。辺りはすっかり暗くなり、宵闇の静寂が支配する世界へと変貌している。

「暗くなっちゃったね。まあ夜の七時なら仕方ないか」

「急いで帰るのがいいですが、私たちまで事故には遭わないように

しましょう」

「ああ。そうだな。暗いし、慎重に帰ろうぜ」

三人はまた二台の自転車に乗って夜の街へと繰り出した。街を彩るネオンサインが夜を優しく包んでいる。

「天崎さん、本当に大丈夫でしょうか？」

「分からない。けど、和麻のそばにいるために、メール入れたんだろ？」

後半を小さい声で囁きかけるように充は言った。夜美も小さくうなずいた。

「黒木さんも、残るんですね？」

「ああ。今日は病院に泊ろうと思う。夜美ちゃんは後で、お母さんに迎えに来てもらってくれ」

「いいえ。私も泊ります」

「え？」

思いつきり間抜けな声を出してしまった。前を走っていた円が振り向く。

「どうしたの？」

「へ？ いや、何でもないぜ」

平静を装って充は答えた。円もさほど気にしなかったのか、すぐに前を向いた。

「それじゃ私はこっちだから、じゃーね」

「ああ。また明日」

「今日はありがとうございました」

手を振って円は角を右へと曲がり、姿を消した。見えなくなったのを確認してから、充はUターンする。

「でも夜美ちゃんは流石に帰った方が……」

「大丈夫です。……私も、天崎さんのそばにいたいんです。お願いします」

必死の思いで夜美は充に頼む。しかし充も了承しようとはしない。
「明日も学校なんだよ？」

充は病院を離れる時に円がくれた忠告を使った。

「宿題は出ていませんし、副教科の教科書は学校にあります。問題ありません」

「……お母さんは、大丈夫だって言ってるの？」

「メールの返事は、こう返ってきました」

夜美はポケットから携帯をり出して充に見せた。

『そうなの。それじゃ迷惑にならないように、気をつけて見守るのよ？』

充は頭を下げるしかなかった。考えてみれば和麻は夜美の友達であるだけでなく、危機を救ってくれた恩人なのだ。そばにいたい気持ちには誰よりも強いのではないだろうか。

「分かった。それじゃ、一緒に行こう」

「はいっ」

充は全速力でペダルを回す。せつせと両足を交互に動かして自転車の速度を加速させる。しかしそれでも後ろには夜美が乗っているの、揺れないように、転ばないように進んでいく。いつも和麻とともにサイクリングしていた経験が役に立った。

「え？ どうして、戻ってきたの？」

和麻の母親は驚いていた。少しうとうとしてきたので、コーヒーでも飲んで目を覚まそうと立ち上がったその時、向こうから駆けてくる二人の人影を見つけたのだ。

「やっぱり、和麻のそばで待っていたいんです」

「お願いしますっ」

頭を下げる二人に、和麻の母親は戸惑った。

「で、でも、帰らないと、お家のひとが」

充はその言葉を遮るように言った。

「連絡は貰いました。許可も出ています」

「今日は泊りがけで、ここに残りたいと思います」

夜美が続ける。泊りがけという言葉に母親は心配そうな顔を見せる。

「本当に、大丈夫なの？」

「はい。もう準備は出来ています」

「ここから、明日は登校しますから」

決心の固い目をしていた。母親はここまで和麻を想ってくれる二人に、この場に残ることを許したのだった。

「分かったわ。お願いね」

「ありがとうございますっ」

誰より、夜美が喜んでいた。充はこの時、すでに確信していた。

夜美は、和麻のことが大好きなのだ。それはもう、ずっとそばにいたいくらいに――。

「じゃあ私はひとまず仕事に戻るわ。時々見に来るから、ここにいてね」

「はい。分かりました」

二人は力強く頷いた。

それを見て安心したのか、につこりほほ笑むと和麻の母親はナースステーションへと小走りで駆けて行った。

「天崎さんのお母さんって、綺麗な方ですね。お仕事ができる女性って感じです」

「ああ。俺もずいぶん昔から世話になってるよ。遊びに行った時はよく、美味しいワッフルを作ってもらったっけ」

「うわあ、美味しそうですね。私も食べてみたいですっ」

「和麻が元気になったら、いくらでも食べられるさ」

そのためにも、和麻の無事を祈らなくちゃならない。和麻のそばに
いることが、自分の使命なのだと、充は感じた。

ぐううううう。

空腹というものは突然訪れるものである。そろそろ晩御飯の時間だった。

「お腹すきましたね」

「何か買いに行こう。確か病院の売店に弁当が置いてあったはずだ」
この病院は国立というだけあってとても巨大で、入院患者もとても多い。そのため泊りがけでお見舞いに来る人も多く、弁当の売店が

設けられているのだ。

エレベーターで一階へ。二人の入ってきた中央の入り口とは反対の方向、即ち正面から入って突きあたりにその売店は存在していた。選り取り見取りの弁当が並んでいる。

「夜美ちゃん、何が食べたい？」

「あ、大丈夫ですよ。お金ありますから」

「まあそう言うなって。ここは俺に任せなよ」

今日一日だけでとてつもなく疲れたのだ。せめて少しでも夜美の役に立ちたいと充は考えた。

「で、でも」

夜美は戸惑っている。さっきから見つめているのはエビフライ弁当だ。そこそこの値段がする逸品である。

「よし、エビフライでいいかい？」

「あ、いえ、その、高いのでこっちに――」

「すいません、生姜焼き弁当と、エビフライ弁当ください」

夜美が断る前に充は注文した。しばらく考え込んだが、夜美は小さく「ありがとうございます」と呟いた。充は親指を突き出して二カツと笑った。

「美味しいですね」

「ああ。結構いけるな」

二人は集中治療室前の簡易ソファに戻ると、その弁当を食べ始めた。「すいません、ここまでしてもらって」

「美味しいんだったら、それでいいさ」

「あの、おひとついかがですか？ 多分、私一人じゃ食べきれないと思うので」

夜美はエビフライを一本差し出した。そつと充の生姜焼きの上に乗せる。ありがたく充は受け取った。

「ありがとう」

「大したお礼にはなりませんけど」

夜美はパクつと一口エビフライをかじる。タルタルソースは永遠の

エビフライのパートナーである。とても美味しい。

——いつか天崎さんにも作ってあげよう。

鉄の扉を見つめながら夜美はそつと充に聞こえないように呟いた。食事を終えると、また重苦しい空気が二人を包み込む。つかの間の休息時間は終わりを迎え、ただならない緊張感がやってきた。

「やつぱり、まだ目を覚まさないんでしょうか……？」

夜美は不安の色がこもった声で呟く。

「大丈夫。和麻はきつと戻ってくるよ。俺たちの友達だろ？」

「は、はい。そうですね、きつと——戻って来てくれますよね」

「そう。だから、待ってるんだ」

そうは言いつつも和麻は危険な状態。生死の境界を彷徨っているのだ。帰ってくる保証などもちろんどこにもない。ただ、信じるしかないのである。充も本当は怯えている。和麻が帰らぬ人となってしまうことを。

二人がソファに座っていると、和麻の母親が戻ってきた。

「二人とも、ご飯は食べたかしら？」

「はい。売店の方で弁当を買いました」

母親の問いに充は答えた。この人が来てくれると、いくらか重い鬱囲気が緩和される気がする。

「こつちに来てくれるかしら？ 見せたいものがあるわ」

そう言くと和麻の母親は二人を病院の奥へと誘導する。

「見せたいものですか？」

「ええ。こつちよ」

ナースステーションの中へと入り、そのまま反対側へと通過する。歩きながら夜美は和麻の母親に尋ねた。

「あの」

「ん？ なに？」

「いえ、まだお名前を伺っていなかったなので、よろしければ教えて頂けますか？」

母親はくすつと微笑んで、答えた。

「ああ、ごめんなさいね。私は天崎恵子あまたき けいこっていうのよ。よろしくね」
「はい。よろしく願いますっ」

そんなやり取りをしているうちに、目的の場所へと辿り着いた。
関係者以外立ち入り禁止というプラスチックの立て札が扉の前に置かれていた。しかし恵子は何の躊躇も無しに二人を中へと招き入れた。

部屋の中には少量の医療機器があり、目の前には長方形に縁取られた窓があった。

「あっ」

「あれは」

二人は同時に『恵子が見せたいもの』を発見し、息をのんだ。それは長方形の窓の向こうに横たわっていた。
静かに眠っている和麻が、そこにはいたのだ。

頭は包帯でぐるぐる巻き、肌からは生気が感じられない。そこに横たわる和麻の姿は、二人に衝撃を与えた。

「本当に、天崎さん……なんですか？」

誰にともなく夜美は呟いた。昨日まで普通に、何の障害もなく話していた和麻だとは、到底思えない。そこにいる和麻は誰か、遠い所に住む見ず知らずのひとのように思えた。思いたかった。あれを和麻だと認めたくなかった。

「やるべきことはやったはずよ。あとは和麻自身の生命力に賭けるだけ」

恵子は冷静な声でそう言った。必死に哀しみを押し殺しているように、充には思えた。

「命に別状は……」

「分からないわ。和麻が目覚ましてくれるか、その命が消えてしまつかは、私たちには分からない」

「そんな……」

「神様だったら、知っているのかも知れないわね……」

恵子の声も徐々に震えてきた。確かに、自分の我が子の命が助かる

かどうかわからないという事実を自分で噛みしめなくてはならないというのは、辛いに決まっている。

和麻の事故。

それは三人にとって絶望の象徴だったのだ。そしてその絶望の象徴は今、目の前で力なく横たわっている。

「神様って……」

「ええわかってるわ。そんなものにすがったって、何にもならないことくらい。でも……和麻は……」

「まだ死んだわけじゃない。そんなに哀しまなくてもいいじゃないですか……」

充は涙を流す気は無かった。和麻はまだ死んだわけではない。また和麻とともに登校したり、遊んだりする日が来ないわけじゃない。たとえ目の前に信じたくないような、目をそむけたくないような現実があっても、希望がある限り諦めてはいけない。

充は深呼吸をひとつすると、ガラス越しに見える和麻を覗き込んだ。
「おい和麻！ 何シケた顔してんだ！ さっさと目覚まして、学校来いよ！」

笑顔で和麻にそう問いかけていた。二人のように涙を浮かべることなく。

「夜美ちゃんだって、吉野だって。お前を待ってるんだぜ？ このままずっと寝てたら叩き起こしてやるからな！」

もちろん、和麻は答えはしない。それでも構わず充は、自分の思いを存分に言葉に込めた。

それだけ言うと充は踵を返し、その部屋を出た。あっけにとらわれる二人には目もくれず、扉を閉めたのだった。

二人も部屋の外に出ると、壁にもたれかかっている充を確認した。

「黒木さん……」

夜美は他に言葉が出なかった。誰よりも大切な和麻に、充のように声をかけることができなかったからだ。

「俺はまだ、諦めてなんかないですよ。和麻を信じてますから」

「充くん……ええ、そうね。悲しんでばかりいても始まらないわね。私たちにできることをしましょう」

「ごめんなさいです。私、黒木さんみたいに、強くなれませんでした……」

夜美がそう弱弱しげにつぶやくと、充は笑った。

「俺は強くなかないよ。……信じることしかできないしな」

「私は、天崎さんを信じることもできなかったんですよ？」

「いや。そんな事はないさ。信頼しているからこそ、その和麻がこうなっている時に哀しんでやれるんだよ。一番いけないのは、何もしないこと。哀しむことは必ずしも、イコール信頼していないことにはならないんじゃないかな」

「そう……ですか？」

「ああ」

充の言葉に夜美は微笑んだ。そう考えてくれる人がいると、とてもうれしい。

「分かりました。励ましの言葉、ありがとうございますっ」

「元気出して、笑顔で和麻のそばにいないとな！」

「はいっ！」

と、夜美は元気に答えて、ふと思い出した。

「あのー、そう言えば、泊りがけて言ってしまいましたけど、私たちはどこで寝泊まりすればいいんでしょう？」

「……あ」

充も困った顔をした。そこまで考えていなかったって顔だ。和麻の安否を確認することで精いっぱいだったので、仕方がないと言えば仕方がないことである。

廊下のソファで寝るしかないが、少し迷惑ではないだろうか。

夜美はそれでも構わないが、充は渋々という感じである。確かに、他があるならそれに越したことは無いのであるが。

どうしたものかと二人が思案していると、恵子は待ってましたというような顔をして言った。

「それなら心配はいらないわよ。ついてきて」

充と夜美は顔を見合わせた。どこか寝ることのできる場所があるのだろうか。それとももしかすると外で野宿なのか。夏が近いとはいえ、駐車場で寝るのは勘弁だ。

しかし恵子についていくと、そこはナースステーションだった。

「ここって……」

「ここのベッドを使っているいわ。院長に許可は頂いてあるから」

そこはナースステーションの一角、仮眠室だった。六つくらい並んだベッドの上に雪のように真っ白なシーツがかぶさっている。

「良いんですか？」

遠慮がちな夜美の問いにも笑顔で恵子は答える。

「ええ。今日はみんな仮眠を既にとつてあるからね」

「ありがとうございます」

充も深く頭を下げてお礼を言った。

その日は少し明日の予習をして、寝ることにした。充はまたも渋々予習をやっていたが、やはり夜美のレクチャーは素晴らしいもので瞬く間に終わってしまったのだった。

やがて消灯時間になり、二人は布団に入った。ナースステーションの一部を除いて、夜の静寂が訪れる。

「それでは、おやすみなさいです」

「ああ、また明日」

時折ナースコールが響くが、気にならない程度の音量なので安心して眠ることができた。

しかし夜美はなかなか眠れずにいた。

和麻の安否はまだ分からない。早く目覚めてほしい。そんな事を考えると眠れなくなってしまったのだ。

「黒木さん。……寝ちゃってますか？」

小さく呼びかけ、充の様子をうかがう。返事は期待していなかったが、充はこつちを向いた。

「生憎、起きてるよ」

携帯の指し示す時間を見ると、午前一時三十分。そろそろ寝なければ、明日は睡魔と格闘しなければならぬ。

「夜美ちゃんも、眠れないの？」

「エヘヘ。……つい、考えてしまっんです」

「俺も。……やっぱ眠れるもんじゃねーよな」

寝苦しいわけではない。変に胸騒ぎがするのだ。ナースコールを押したい気分だ。

「なんか、飲み物買いに行かないかい？」

「賛成です。私ものが渴いてきました」

二人はナースステーションを出て、一階の自動販売機へと向かう。

やはり大きな病院のため、夜でもエレベーターは動くようだ。

夜の病院は不気味なものである。誰もいなくなつた受付のカウンタ―は真つ暗でひっそりとしている。

「先ほどは奢つて頂いたので、今度は私の番ですねっ」

夜美は財布から小銭を取り出して数えながら言った。

「いいのかい？ これくらい自分で――」

「もちろんです。恩は返さないと罰があたりますから」

弁当と自販機のジュースでは明らかに不釣り合いだが、これくらいは返さなければいけない。奢ってもらったら奢るのが友達ではないか。

夜美は充のコーラと自分のオレンジジュースを購入した。

「天崎さんには、まだ返せてないんです」

ナースステーションへと戻る途中、ぼそつと夜美は呟いた。

「え？ 何を？」

「あの日――、天崎さんと初めて一緒に帰った日、私にオレンジジュースを買ってくれたんです。これと同じですよ」

「その借りつてわけか」

「はい」

和麻には助けられてばかりなのに、何もできない自分が夜美は悔しかった。だから、せめてそばにいたいと思ったのだ。

「私、天崎さんが元気になったら、何かプレゼントしようって思ってるんです。…それが何かは、まだ決めてませんけど……」

「だったら、毎日お弁当を作ってやったらいいんじゃないか？」

充も一口味わったあの味。一度食べたら忘れられない美味しさである。

「分かりました。がんばりますっ」

和麻が唯一喜んでくれたもの。それが夜美の弁当だ。またカキフライをいつか作って持って行こうと、夜美は頭のメモ帳に書き込んでおく。

胸のつつかえが取れた気がして、戻ると夜美はすぐに寝息を立て始めた。

では、充は何故眠れなかったか。答えは簡単である。

女の子が隣で寝ているというシチュエーションが新鮮すぎて、なかなか落ちつかなかったからだ。

Part 4 - My Wish -

「準備、出来ました」

「よし、じゃあ行こうか」

充と夜美は受付の女性に挨拶をすると、無機質な自動ドアをくぐり抜け、朝の日差しのもとへ出た。

これから学校へと向かう。あまり眠れてはいないが、これ以上寝ると遅刻してしまう。なぜなら病院から学校まではそれなりの距離があるからだ。

「なんか不思議な気分だな、病院から登校するのって」

駐輪場へと向かいながら充はぼそつと呟く。夜美も一緒に笑った。

「本当ですね。きつと貴重な経験ですよ」

小鳥のさえずりを聞きながら自転車走らせる。夜の雰囲気とは打って変わって、街は穏やかだった。

二人は病院を出る時、和麻の荷物を調べていた。事故にあつてからまっすぐここへ運ばれたので、荷物もそのまま病院に運ばれたのだ。その中から、夜美は和麻が授業の時に使っていたノートを数冊取り出した。入っていたのは数学と国語と英語のものだ。

「私が頑張って書いておきますっ」

夜美は和麻が目覚まして、退院した時に困らないように、和麻が出られない分の授業のノートを作っておくことにしたのだ。和麻の分まで授業中に作るのは大変だし、アドバンスクラスの授業と通常クラスの授業では進み方にずれがあるのだが、その辺はあまり気にすることではない。自分の分を休み時間や家で書けばいいのだ。結局は同じノートを二つ作ればいいので、一冊書きあがっておけば簡単である。

「俺も頑張って授業を受けないと」

「黒木さんなら、きつと出来ますよ」

自転車に乗って緩やかな風を受けつつ、二人は学校へと向かった。

もちろん自転車は一台である。和麻の自転車を事故の時にスクラップになってしまったので使い物にならない。

「おはよう、黒木くん」

「ああ、おはよう」

充が教室に入ると、昨日と同じように吉野円が花瓶の水を入れ替えているところだった。少し眉がつりあがっている。

「昨日、ちゃんと帰ってないわね？」

「さて、今日の課題は何だっけな」

やっぱり委員長のきらびやかなメガネにはかなわない。しっかりとバレていた。

「気持ち分かるけど、あそこは病院なのよ？　ちゃんと帰らないと迷惑でしょ？」

観念して充も話を始めた。

「和麻は眠ってたよ。まだ目を覚ましそうになかった。俺たちはナースステーションの仮眠室を借りて、和麻を見守ってたのさ」

「俺たち？　ってことは霧野さんも一緒だったの！？」

「ああ。俺は夜美ちゃんには帰れて言っただぜ？　でも、和麻のそばにいたいって、強く願ってたんだよ。そんな願いすらも摘み取ってしまうのは、可哀そうだったんだ」

「ほんと、馬鹿の考えることはこれだから困るわ」

「生憎、一生治りそうにないんでね」

円はため息をついて、花瓶に花をセットした。

「私にも言いなさいよね」

「……は？」

「何をだよ」

「私だけ帰すなんてひどいじゃない」

「……あんたが勝手に帰ったんでしょーが。充は言い訳すら思いつかない。」

「そう言われてもなあ」

「……まあいいわ。そろそろHRだから、席に着いた方がいいわよ」

充は和麻の机をほんの少しの間見つめ、そして席に着いた。

「今日は、どうしましょう？」

時は変わって昼休みである。夜美と充は今日も病院で過ごすかどうかを考えていた。もちろん弁当は無いので、コンビニのおにぎりを二人で食べていた。

「うーん。さすがに今日は帰った方がいいんじゃないかな。二日連続は許してくれそうにないし、それに風呂も入ってないからな」

「ですよ。そばにいられないのは、残念ですけど……」

「でも、放課後から夜までは病院に行くつもりだから、その時に恵子さんに様子を聞こう」

「はい」

充は案外夜美が落ちついていたので驚いた。てっきり授業にも身が入らないのではないかと心配していたが、そんなものは必要だったようである。

「和麻のノートは進んでるかい？」

「はい。バツチリ纏めてありますよ」

につこり夜美は笑っている。この様子なら大丈夫だろう。夜美のノートは教科書より分かりやすいのだ。少なくとも充はそう思っている。出来ることなら自分のノートも作ってほしいくらいだった。もちろんそんな野暮なことは言えないので、地道に睡魔と格闘しつつほんの少しだけ黒板を写すのだ。

「ごちそうさまでした」

夜美は食べ終わると手を合わせて、その後おにぎりのラッピングをくずかごへと捨てる。心なしか今日の食堂は空いている。いつもはクレープの包みなどを捨てる生徒でこった返しているのだが、今日はそんな様子は見られなかった。

二人は食堂を出ると、恵梨奈のもとへと足を運んだ。二人が図書室

に入ると、恵梨奈がカップ麺をすすりながら新聞を読んでいた。

「あれ、今日も和麻はいないのかい」

そう言えば恵梨奈先生はまだ和麻の現状を知らないのだった。二人は言おうかどうか少し躊躇したが、いずれ分かることだと思い、話すことにした。

「本当かい？ あの和麻がねえ。こりゃ明日は矢でも降るね」

「おいおい。傘じゃ防ぎきれねーって」

「しかも火の粉付きで」

「怖えーよ！」

特に大きなショックもなく、いたって普通の、というか昨日と全く同じような反応を恵梨奈は見せた。だがもちろん、気にしていないわけではない。充と同じで、泣くのは一番最後だと決めているのだから。充は一人恵梨奈の心情を悟った。

「何とも、思わないんですか？」

夜美は恵梨奈先生に質問する。恵梨奈は答えた。

「そりゃ心配だよ。でも、だからってガタガタ騒いだって、現状を打破できるような材料にはならないだろ？ いつも通り、普通に過ごして、普通に和麻を出迎えてやるのが、私の役目だと思うけどね」夜美はその恵梨奈の姿勢に納得して、微笑んだ。和麻を心配しているのは、自分だけじゃない。みんなみんな、和麻を知っている人なら、心配なのだ。それを顔に出さないだけで。

結局時間つぶしにもならず、図書室を後にした二人は、食堂へは戻らずに2―Dの教室の前の廊下でわけもなく突っ立っていた。

「ちよつと、あんたたち」

と、突然後ろから二人を呼ぶ声があった。しかし充は声の主が誰なのかすぐに理解した。

「何の用だよ」

そこにいたのは、夜美をいじめる三人組だった。とつさに夜美は充の後ろに隠れた。

「その、聞いたわよ。あいつ、事故ったんだってね」

「だったらなんだ。お前らには関係ない」

充は三人を無視してどこかへ行こうとする。しかし三人は続けた。

「謝らせてほしいんだ」

「は？」

充は変な声を上げる。

「あんたにも、その夜美にも。そして、あいつにもさ」

どという風の吹き回しだろうか。充はいぶかしんだ。

「あの桜庭先生に説教されて、気づいたよ」

「私たちが悪かったし、間違ってた。ほんと、ごめん」

「許してくれとは言わないけど、あんたの誤解は解いておくよ」

妙に反省している三人組を見て、充は不審に思う。もうだまされるものか。

「今度は何をたくらんでやがるんだ」

「うっん。もう何もしないよ」

「嘘つてのは分かってんだぜ」

疑う心を緩めない充。しかしその時後ろから夜美が現れた。

「あの、黒木さん。もう、許してあげてもらえないでしょうか？」

「でも、夜美ちゃん」

充が反論しようとした時、今度は三人に向かって言った。

「あの、よかったら、私と、お友達になって頂けませんか？」

「えっ？ 私と？」

「あんなことしたのに、私らと友達になろうっての？」

「許してくれるの？」

思いもよらぬ夜美の言葉に三人は驚いた。

充も何か言おうとしたが、止める気は無くなった。夜美はいつの間にか友達の作り方がうまくなっていたのだ。

「お友達になったら、楽しいじゃないですか」

笑顔で夜美は答えた。三人は苦笑しながらも嬉しい表情で、順番に握手していた。

昼休み終了のチャイムは、なぜかいつもより穏やかに、優雅に感じ

られた。

「それじゃ、行こうか」

「はいっ」

「……いいわね？　今日はちゃんと帰るのよ？」

「分かってるって」

「大丈夫です」

「どうなんだか……」

三人は校舎を出ると、昨日と同じ道で病院へ向かっていた。帰りのHRが終了してすぐ待ち合わせたので、今日は昨日よりも少し早い学校を出る直前に、恵子から連絡があった。その情報によると、和麻が病室に移されたようだった。とりあえず集中治療室からは抜け出たが、依然として意識は無いそうである。

「会えるんですね？　……天崎さんに」

「ああ、病室で寝てるらしい」

「急ぎましょう」

三人の進む速度が上がる。信号が変わりかけていたのもあるが、和麻に一刻も早く会うという目的を果たすためである。

昨日より十分ほど早い時間に、三人は病院へ到着した。受付で聞いた病室へと三人は走る。

「ここだな」

302号室。三つ並んだ一番窓際のベッドに、和麻は横たわっていた。

「天崎さんっ」

一番先に駆けだしたのは夜美だった。和麻はまるで死人のように真っ青な顔をしていた。

「みんな。よく来てくれたわ」

いすに座ってリングの皮をむいていた恵子は、夜美と、歩いてきた

二人に手を振った。聞けばこのリングは担任のお見舞いの時に頂いたものらしい。

「どうですか、和麻の容体は」

充の問いに恵子は特に取り乱すこともなく冷静に答えた。

「まだ目を覚まさないけど、悪い異常も見つかっていないわ。今のところは正常よ」

その答えを聞いて三人は胸をなでおろす。死人のような顔をしていても、和麻は生きているのだ。そばにしていると、それがひしひしと伝わってくる気がした。充は和麻を見つめた。

顔にはプラスチックの医療用マスク、腕にはいくつもの点滴の針や管がまわりついていて。そしてうつすらと呼吸をしていた。

「昨日は、二人が迷惑をかけてしまったみたいで、すみませんでした」

委員長は昨日の無茶を謝罪していた。しかし恵子は首を振る。

「迷惑だなんてとんでもない。二人とも、本当に和麻を心配してくれていたのよ。悪く言わないであげて」

「寛大なお言葉、ありがとうございます」

円は、充には到底言えそうもない丁寧語をいい、頭を下げる。充は思った。俺はあんたの子供じゃねえっての。恵子は笑っていた。

「あの、恵子さん」

「ん？ 何、夜美ちゃん」

夜美は一つ気になっていたことがあり、それを聞くことにした。

「天崎さん、一体何を悩んでいたんでしょうか」

事故に遭う寸前、和麻が何か思い悩んでいたという推測が、本当だと夜美は考えているのだった。

「さあ。私にも分からないわ。あの子、昔から聞いても答えてくれないのよね……」

和麻が目覚めない限り、その時の様子は分からず終いである。

「それより――」

今度は恵子の方からの質問だった。

「何か和麻の持ちモノから、収穫はあったかしら？」

「あ、えっと、天崎さんのノートを拝借しました。天崎さんが元気になった時、すぐに使ってもらえたらいいなと思ひまして」

「あら、まあ。きつと和麻も喜ぶわ。わざわざありがとうね」

恵子は笑顔でお礼を言う。夜美も「エヘヘ」と笑って見せた。

「早く元気になってほしいです」

無表情のまま、和麻は眠っている。いつかその顔に笑顔が戻ることを、夜美は強く願った。

「あれ、ここ、どこだろう？」

爽やかに吹きぬける風の中で、夜美は目覚めた。どういいうわけか制服を着ている。ここがどこか分からなかった。

空は金色に染まっている。というのは、単なる夕暮れの街を形容したわけではなく、純粹に空が金色の光に包まれていたのだ。淡く染まった風景に、夜美はいた。

遠くには金の空に映える青々とした山々。見たことのない風景だった。夜美は周りを見渡す。一面の草原だった。

「だれか、いませんか？」

夜美は周りに誰もいないことに気付いた。人が見当たらないので、声をかけても、誰も答えない。ただ透き通った風が吹くだけである。夜美は立ち上がり、周辺を歩く。

幻想的な空の色に、誰もいない草原。まるでファンタジーの中に入った様な感覚にとらわれる。しかし不思議なことに恐怖心は湧いてこない。無意識にここへ来たことを体が分かっているようだ。夜美は歩き続けた。

どれくらい歩いたのか分からない。もしかすると歩きだす前だったのかも分からない。だが夜美は視界の隅に、その人物を捉えた。思わずはっとする。

「あ、天崎……さん？」

そこに立っていたのは真正正銘の天崎和麻だった。こつちを振り返ることなく、吹き抜ける草原の風に身を任せ、佇んでいる。夜美に気づいているのかどうかすら分からない。表情も見えないので、笑っているのか、泣いているのかも判断できなかった。

「あの、天崎さん」

さつきよりも強い声で和麻を呼ぶ。だがそれでも和麻は気づかない。あるいは気づいていても振り向く気配がなかった。

「天崎さん」

駆け寄って、その型に手を置いた。その時、ようやく和麻はこつちを向いた。しかしその顔には以前の雰囲気なかった。

「なんの用だよ」

「え、えつと、起きて大丈夫なんですか？」

和麻は病院のベッドで寝ているはずだ。どうしてこんなところにいるのか、夜美は聞きたかった。しかし夜美の問いには答えず、和麻は冷酷に言い放った。

「ここから消えてくれないか？」

「……はい？」

和麻の口から放たれた言葉を理解するのに、いつもより時間がかかった。それは和麻の口から聞くことはないだろうと思っていた言葉だったからだ。

「邪魔だつて言っただよ」

横からまた声がした。思わず夜美はパツと振りかえる。なんとそこには、もう一人の和麻が立っていたのだ。夜美は絶句する。

「あ、あの、天崎……さん？ その、どうして」

夜美は恐怖感と不審感が入り混じった奇妙な感情に陥った。和麻が二人。どう考えたってあり得ない。

いや、実際そんな事はどうでもよかった。夜美はそれよりも、和麻に邪魔と言われたことにショックを受けた。

二人の和麻は同時に言った。

「俺はお前が嫌いなんだよ」

「……えっ？」

冷たく放たれた和麻の言葉は、夜美の心に突き刺さった。恐れていたことが、現実になってしまった。

和麻——天崎さんに、嫌われてしまった。

「そんな……どうしてですか？」

目にはすぐに大量の涙が押し寄せる。夜美は崩れそうになる体と心を必死で立て直そうとする。

「決まってるだろ」

また別のところから声がした。そこにはあろうことか、三人目の和麻の姿があった。夜美はついに恐怖で頭がいっぱいになる。逃げ出そうと後ろへ後ずさる。

「へあっ!？」

しかし振りかえった先には、先ほどまで穏やかに続いていた草原はなかった。一瞬の間に風景は切り取られ、その形を変えたように別世界になっている。夜美のすぐ後ろは切り立った崖になっていた。断崖絶壁のギリギリで踏みとどまる。

「お前が鬱陶しいんだよ」

四人目の和麻。そしていつの間にか目の前にはたくさんの和麻がいた。みんな口を少しもずらず、一字一句ずれることなく口を開く。

「ジャマナダヨ、オマエ」

「いやっ、いやっ!」

こんな天崎さんじゃない!

逃げることもできない。前にも進めない。夜美は八方ふさがりの中、和麻の罵声を浴びるしかなかった。

「ハヤクキエロツテイツテンダヨ」

「ひっ、きゃあああ!」

夜美は足を滑らせた。深い奈落の底へと夜美は吸い込まれていく。その様子を和麻たちは一斉に笑っている。

大粒の涙を残して、落下途中に夜美は気を失った。

「いやっ！」

夜美は瞬時にベッドから跳ね起きた。額には玉のような汗が噴き出ている。

「はあ、はあ、はあ……」

時計を見ると、午前二時二十五分。まだ辺りは暗く、窓の外で街灯が光っているのがカーテン越しにも分かる。

「ゆ…夢？」

なんて嫌な夢だったんだろう。思い出すだけでゾッとする。頭をブルブルと振って忘れようとした。

和麻に、嫌われる夢。こんな夢を見てしまうなんて、どうかしている。夜美は気分を取りなおすために、のどを潤すことにした。

部屋を出ると、母親がちょうどトイレから出てきた。夜美を見て不安そうな声を上げる。

「どうしたの？ さっき叫ぶような声が聞こえたけれど」

「あ、ああ、大丈夫だよ。ちよつと変な夢見ちゃった」

渴いた笑いを浮かべて、夜美は答えた。それを聞いて母親も少しほっとしたようだった。

「そう」

「うん。心配しないで」

「はいはい。……あ、そうそう。心配と言えば、例の、天崎さんだったっけ。大丈夫なの？ 夜美のお友達でしょ？」

「うん。まだ目を覚まさないけど、異常も特にないんだって」

「もう二カ月も休みっぱなしなんて、早く元気になるといいわねえ」そう。もう和麻が事故に遭って二カ月が過ぎようとしていた。今は六月下旬。あれからずっと夜美は病院へと欠かさずに通った。今日は目を覚ましたんじゃないかって、いつも淡い期待を抱きながら。けれど、まだ和麻は目を覚まさない。依然として状況は変わらず、

和麻は病院のベッドで静かに寝息を立てているのだった。

だがしかし、夜美は、いつまでも待つつもりだった。和麻を信じているから。たとえ夜美が大人になろうと、おばあさんになろうと、和麻がそれで帰ってくるのなら、それで構わないと思ったのだ。和麻にもう一度会えるなら。そう思い、今日まで和麻を待ち続けているのである。

「それじゃ、おやすみ」

母親は自分の寝室に戻り、また眠りに就いたようだった。夜美もトイレを済ませ、軽く水を一杯飲んでから、ぐっすりと眠りについた。

「おはようございます、黒木さんっ」

「おはよう。夕べは眠れた？」

朝の並木道。生い茂った緑の葉が灰色のアスファルトをすっぽり覆い隠しているようだ。その木々の隙間からは木漏れ日が降り注いでいる。夜美はいつもの曲がり角で充を待っていたのだった。

「変な夢見ちゃいましたけど、大丈夫です」

「変な夢？」

「でも、夢ですから、気にしないでください」

「そう、か。じゃあいいよね」

特に追求することもなく、充はさらっと流す。

因みに今日は学校は休みである。夜美と充はあれから毎日、欠かさずに和麻の病院に通っている。一向に和麻の容体が回復する兆しは見えないものの、諦めることなく二人は和麻を待っているのだ。

「それでは、行きましょう」

「うん」

いつも通り充の自転車の荷台に乗り、和麻のいる病院へと向かう。夏の日差しは強いものだったが、だいぶ通っているうちに慣れてしまった。日焼け止めクリームを塗っているので、日焼けの心配もな

い。

「それにしても、罪なやつだな、和麻は」
自転車をこぎつつ、にやけながら充は言った。

「え？ どうしてですか？」

「だって、夜美ちゃんを置いてずっと寝てるんだぜ？ まったく、夜美ちゃんが可哀そうだよ」

「エ、エヘヘ。そうですね。私、可哀そうかもしれませんが」

二人で笑いながら、信号を抜ける。二人はまだ、笑っていられることができたのだ。

それは、二人が病院に着いた時に明らかになった。

病室の前で、恵子が泣いていた。壁にすがりつくように、はつきりと泣いていることが分かる。充と夜美はすぐに駆け寄った。絶対に和麻に何かあったのだと、二人は確信した。

「恵子さん」

駆け寄るなり、夜美はその背中に声をかけた。恵子がゆっくりと振り返る。

「……夜美ちゃん。来てくれたのね」

消え入りそうな声で、恵子は呟いた。

「何が……和麻に何があったんですか！」

同じく充も恵子に詰め寄る。恵子は嗚咽混じりの声で、ゆっくりと囁くように言った。

「和麻が……大変なことに」

「落ちついてください。どうなったんですか？」

「先生に、聞いてちょうだい。私の口からじゃ……ごめんね」

充はすぐに診察室へと走る。夜美もそれに続いた。

「先生！ 和麻は、和麻はどうなったんですか！」

突然押し掛けてきた高校生に不審な顔を浮かべていたが、和麻という名を聞いた瞬間に医師は理解した。一瞬話すのを躊躇したが、伝えるべきことは伝えなければならない。

「落ちついてください。今彼は深刻な状況です」

医師の目つきや表情が険しくなる。充はごくりと唾を飲んだ。体中から噴き出す汗が止まらない。

「和麻くんの脳の機能が、ほとんど低下しています」

「そ、それは、どういうことですか？」

恐る恐る夜美は尋ねる。医師は一呼吸置いて、続けた。

「彼は自分自身では、心臓を動かすことができず、また呼吸もできません。恐らくこの状態が続けば……………彼は植物状態になってしまふでしょう」

頭が真っ白になった。それは文字通り、夜美の頭をからっぽにしたのだ。何も考えることができない。無意識に涙がこみ上げてくる。

「そんな……………それじゃ、ひぐつ、天崎さんは……………」

「このまま進行すれば、命の保証はありません」

医師の言葉はとても冷酷に、残酷に聞こえた。深く夜美の心をえぐり取るように、傷を負わせた。

「ですがまだ私たちも諦めたわけではありません。全力を尽くして和麻くんを助けます。どうかお気を楽にしては頂けませんか？」

慎重に告げた医師の声は、もう夜美には聞こえなかった。夜美は一人、暗い闇の底に落ちて行くように、——今日見た悪夢のように、放心状態になっていた。

「先生。和麻はなぜ、そうなってしまったんですか？」

「私たちも分かりません。しかし脳の出血が原因ということは判明しています。ちょうど一時間後に、手術を始める予定です」

二度目の手術。充は本気で神を呪った。何故和麻がこんなひどい仕打ちを受けなくちゃならないんだ。

「行こう、夜美ちゃん」

「……………」

夜美はその場で凍りついていた。もう、逢えなくなってしまう。そんな考えだけが、まるで傷が入って音飛びするCDのように延々とループしていた。

「夜美ちゃん！」

「……は、はい」

ようやく夜美は我に返った。ネジの切れたオルゴールのように、その場で凍りついていたが、やはり心に受ける精神的ダメージは誰よりも大きい。

「ぐすつ、すみません」

「いや、いいんだ。行こう」

「はい……」

二人は今までにないほど、心が暗黒に塗りつぶされたように重い雰囲気になっていた。

診察室を出ると、夜美はぼそりと呟いた。

「どうして……」

充はなんと声をかけていいのか分からなかった。いままで泣いている夜美はいくらか見てきたが、ここまでつらそうなところは見たことがなかった。

病室の前には、まだ恵子の姿があった。無言でソファに腰掛けている。

「和麻がこうなったのは、いつなんですか？」

充がそう聞くと、か細い声で恵子は答えた。

「私が朝来た時には、もうこの状態だったわ……。病院にいた人の話だと、深夜の二時半あたりに、突然機械に異常が確認されたみたい」

「……二時半？　ですか？」

夜美は涙をためた瞳で、恵子を見た。深夜二時半——まさに夜美はその時間に、悪夢から目覚め、現実に戻ったのだ。

単なる偶然なのか。それとも関連があるのか。いや、きっと偶然にすぎないのだが、夜美は怖かった。もしあの悪夢が和麻の昏睡にかかわっていたらと思うと、今にも背筋が凍りそうになる。あふれる涙を、夜美は必死でこらえた。体の震えが止まらなかった。

「どうしたの、夜美ちゃん」

充が話しかけてくれたので、夜美はなんとか正気に戻ることができ

た。身を案じるような顔で充は夜美の顔を覗き込む。明らかに何かに怯えた表情だったのだ。

「い、いえ、何でもありません」

人間は作り笑いの時の笑顔では感情を表現することは出来ない。充はすぐに夜美が何かを隠していることを悟った。だが深くは追求することはなく、そのまま放っておくことにした。言いたくないことを、むやみに聞くものではない。

夜美はとぼとぼと病室に入っていく。手術前なので、和麻はもうベッドにはいない。空っぽになったベッドの上で、夜美は静かに目を伏せた。そうでもしないと、苦しい現実に負けてしまいそうになるからだった。シートに一滴、また一滴と涙がしみこんでいく。

充はそんな夜美を見ていることしかできなかった。慰めてやろうにも、かける言葉が見つからない。実際問題、充自身、どこかではもう諦めかけていたのだった。

永遠のように長い沈黙が重くのしかかる。三人はしばらく黙っていた。

次に夜美が呟いたのが、もう日が暮れる頃だった。その呟きに、隣のベッドに腰をおろしてうつむいていた充の顔がふっと上を向く。

「昨日、夢を見たんです。それはもう……嫌な夢でした」

夕日の差す夜美の顔からは涙は消えていたのものの、哀しげな表情が無くなることはない。

「どんな、夢だったのか、よければ教えてくれるかい？」

思わず充はそう返してしまふ。言って後悔しても遅いというものだ。だが、しばらく間を置いて夜美はポツポツと話し始めた。

「見たこともないような綺麗な風景の中に、天崎さんが立っていました。嬉しくて胸がいっぱいでした。でも同時に、どうしてここにいるんだろって、疑問も浮かんできたんです」

「和麻が。元気だったのか？」

「分かりません。天崎さんは私の声には、振り向いてくれませんでした。だから私は、そばに言って、肩をたたいたんです」

苦い顔をしながら、夜美は少しずつ絞り出すように言った。

「そしたら、……『お前のことが嫌いだ』って、言われたんです」瞬間、充も苦虫をかみつぶしたような顔をした。それは辛い夢だったはずだ。

「気が付いたら、……天崎さんが何人もいて、同じようなことを言ってるんです。逃げようと思つて後ろを向いたら、いつの間にか崖になっていて、私はそこから落ちたみたいです。気が付いたら、ベツドの上にいましたから」

話し終わると、夜美は窓の外を見つめた。遠くを見るような表情で、オレンジの空を眺めている。最後に一言、夜美は告げた。

「その夢が覚めた時間と、……天崎さんの様子が変になった時間が、同じなんです」

充はそれを聞いて、血の気が引くのを感じた。思わずゾツとする。単なる偶然であろうが、流石に出来過ぎたものだった。

「で、でも、夢だからさ。気にすることないって」

充がフォローするも、夜美は表情を変えなかった。まるで動かない人形のように、話し終えた夜美は固まっていた。

これ以上は何も話が続きそうになかったので、充は家へと帰ることにした。夜美を乗せて行こうとしたが、一言「今日は泊ります」と言われ、渋々だが一人で帰ることにした。

七月四日。和麻が脳死状態寸前になってから、ちょうど一週間がたっていた。

夏の暑い日差しは容赦なく紫外線を放出し、街中を灼熱地獄へと変貌させている。充は重い足を引きずりながら、教室の引き戸を開けた。今までにないほど、疲れていた。

「おはよう、黒木君」

「……ああ、おはよう」

円の声にもそっけない返事を返す。今はとにかく誰とも話したくない気分だった。

「和麻君、もう一週間なんだよね」

「……………」

和麻の話題は充にとって毒だった。そう、手術を受けても、一向に和麻が元に戻る様子はないのだ。呼吸するための器具や心臓を動かすための機械を取り付け、死人のように眠っている。そんな限りなく哀れな親友の話など聞きたくもない。

円は気を遣ったつもりだったが、余計に充の顔が険しくなったので、慌てて口をつぐんだ。

「席に着け」

担任の声はいつもと変わらず教室に響く。しかし和麻の席はいつも通りではなく、和麻の姿はない。いや、これが既にいつもどおりになりつつあるのである。

HRが終わり、授業に入っても、充はずっと顔を上げられずにいた。結局そのまま、正午を迎えてしまう。

「夜美ちゃん、どうしてるかな？」

昼休みにはいつもならば昼食を食べに行く。夜美は来ているのだろうか。

教室にいてもすることはないので、充は食堂へと向かうことにした。食堂に着くと、いつも通り夜美はそこにいた。しかし、やはり表情は沈んでいる。

「やあ、夜美ちゃん」

夜美の前では元気でいたいと思い、無理にでも笑顔を作る。夜美は充に気づき、微笑を浮かべたが、すぐに下を向いてしまった。

「黒木さん……………」

「お昼、食べようよ」

適当にその辺の席へと誘い、二人で座る。夜美はサンドイッチ、充は生姜焼き弁当を広げる。

しかし会話はそう弾むことはなく、二人は黙々と昼食を食べ続ける

だけだった。互いに視線を合わせることもなく、ただ食べるという動作を繰り返す。

夜美が声を出したのは、サンドイッチを食べ終わってしばらくしてからだった。

「私、どうすればいいんでしょう」

「え？ どうするって？」

突然の言葉に、充は戸惑う。

「今までずっと、頑張ってきたのに、……天崎さんは……うつ、ひぐっ」

鳶色の瞳に、涙がにじむ。夜美はずっと待ち続けてきた理想を打ち砕かれた思いだった。もう和麻は戻ってきそうにない。信じることができない。夜美は絶望の淵に立たされた気分だったのだ。感情が一気にこみ上げてくる。その感情をこらえることができなかった。

「夜美ちゃん……」

充はかけてやれる言葉がなかった。現に和麻はもう絶望的な状態だった。もし運良く目覚めても、記憶が消えていたり、自我がなかったりという可能性が極めて高いのだ。それもほんのわずかの目を覚ますという可能性にかけた時の話だった。

「きつと私の所為です。あの夢が、天崎さんをあんな風に」

突然夜美はそんな事を言い出した。充は笑って否定する。

「いや、そんなことはないさ。ただの偶然だって。第一、人の夢で他人が死ぬなんて、そんなのファンタジーの世界じゃないか」

「でも、私にはそうは思えないんです。きつとあの時、天崎さんは私に何かを伝えたかったんです。でも、私は夢から逃げてしまったんです。天崎さんを置いて」

「そんな考え方はやめるんだ。バカげた思想でしかない」

今度は少しきつめに充は忠告した。これ以上夜美が不安定になってしまうのは嫌だった。

それから昼休みの終了を告げるチャイムが鳴るまで、充と夜美は口を利かなかった。

「それでは、明日も遅刻をしないように」

担任が帰りのHRの終わりを告げた。すでに日は傾きかけているが、まだまだ明るかった。充は夜美と病院へ行くために、夜美を探す。三階へと階段を上り、アドバンスクラスへ。教室からはすでに生徒が出ていたので、夜美を探そうと教室へと駆け寄った。

「あれ？ おかしいな」

教室にも廊下にも、夜美の姿はない。もしかして一人で帰ってしまったのだろうか。

「トイレにでも行ったのかな」

まだ夜美が帰っていないのなら、一人で病院へ行くのは心もとないので、充は一度下へ降りて、靴箱を確認することにした。夜美の登下校用の靴が入っているなら、まだ校舎にいることになる。

「なんだ、いるじゃん」

その靴箱の中には間違いなく夜美の靴が収まっていた。クラスと番号は知っているので、間違えることはない。

しかし、再び教室へ戻っても、自分の教室に行っても、夜美は見つからない。

「どこ行っただんだ？」

すれ違いで夜美の方も充を探している可能性は十分に高い。

「今日はゲーセン行きましょ」

「いいね。プリクラ行こうよ」

「帰りにパフェ食べよう」

と、後ろから例の三人組の声がした。夜美と親しくなったため、今のところ夜美はいじめられることは無くなったそうだった。

「あいつらだったら知ってるかもな」

充は夜美の消息を聞くことにした。声をかけると、意外そうな顔で振り向いた。充から話しかけてくるなんて珍しいと思ったのだろう。

「夜美ちゃん、どこに行ったかしらねーか？」

「さあ。知らないわね。HRが終わってすぐ階段の方に走ってつちやったから」

「そうか、すまねえ」

用件が終わると、また三人は話しながら帰りだした。結局得られた情報は何もなし。

「階段って言われてもな」

呟いて充は気づいた。夜美が利用する階段は先ほど充がアドバンスクラスへ来た時に上った階段だった。

「すれ違わなかった」

妙な話である。充が三階へ来た時、クラスからは生徒が今まさに帰ろうとしていた時なので、HRが終わってすぐだと考えるべきであろう。しかし、夜美とはすれ違わなかった。

「上か？」

下へ来なかったということは、あとは屋上しかないのだが、果たしてそんなところに用事はあるのだろうか。

「まさかな」

もういるとは思えないが、充は探す当てもないため、屋上へと上る。普段は施錠が施されているのだが、今はあいていた。

ガチャリとドアを開ける。鉄のさびた音がして、耳に痛い。

そこに、夜美の姿があった。空を見上げて、その場にたたずんでいる。

「あ、……来ちゃいましたか」

「こんなところで、何やってるの。空なら、帰りながらも見れるじゃないか」

夜美は自分のバッグをそばに置き、その上に、和麻のノートが乗っていた。

「私、もう無理です」

「え？」

「初めて天崎さんと一緒に帰った時、この人となら、仲良くなれる

かもしれないって思いました。そして実際、天崎さんと一緒にいた時間は、すごく楽しくて、素敵な時間でした。でも、もう無理です」

夜美の頬を、暮れゆく太陽に照らされてキラリと光る一粒の涙が伝い落ちる。

「黒木さんとも、もうお別れです。もう哀しむのは嫌ですから」

「な、何を言ってるのさ、冗談だろ？」

夜美は『職員用』と書かれた鍵の束を使い、フェンスの扉を開け、その向こうに立った。

「いいえ。淡い希望にすぎるのは、もつやめます。向こうで、天崎さんを待つことにします」

「止めろ！ 危ないって！ 意味分らないことを言うのはやめてくれ！」

充ほどのバカでも、この状況がどういふものなのかは理解できる。

夜美は自分の命を断とうとしている。

「どうして死のうなんて考えるんだ！」

「いままで死のうと思ったことは、正直何回あるか分からないくらいです。でも、私の所為で天崎さんはあなってしまったのですから、私なんていない方がいいんです」

「だから、違うって言うてるじゃんか！」

「それに、もうこれ以上あんな天崎さんを見て哀しむのは嫌です。ならいっそ――」

「ふざけるな！いいから戻ってくるんだ！」

充はフェンスの向こうの夜美に向かって走る。しかし夜美は受け入れようとはしない。

「来ないでください。……もう、私のことはほっといて下さい」

夜美はゆっくりと後ろへと下がる。大丈夫。落ちる時も、夢と同じ。ただ、落ちるといことが、落ちて死ぬということになるだけ。

「させねええええええええ！」

夜美の脚が宙に浮いた。そのまま後ろに倒れこむ。下にはコンクリートの地面が広がっている。部活途中の生徒は、誰ひとりとして気

づいていないようだった。

夜美は閉じていた目を開けた。その瞬間、手に衝撃を感じる。体は宙に浮いたまま、静止していた。ゆっくりと上を見上げる。

「目を覚ますんだ。夜美ちゃんがやろうとしているのは、ただの自殺だ」

充が腕をしつかりと握っていた。夜美の細い腕を、がっちりつかんでいる。

「今夜美ちゃんが死んだって、何の打開策にもなりやしねえ」

「うぐっ、ひぐっ、どうして……」

夜美は充に腕を支えられたまま、泣いていた。充は言った。

「和麻のこと、好きなんだろ？」

「へっ……？」

よいしょ、と充は夜美の体を引き上げる。結構な力が必要だが、夜美は小柄で軽かったため、一人で引き上げることができた。

安全な場所まで夜美を連れて行くと、充は夜美に問うた。

「夜美ちゃんがいなくなったら、誰が和麻にお弁当作るんだ？」

「……それは……ぐすっ」

口をつぐむ夜美。更に充は問いかける。

「夜美ちゃんがいなくなったら、誰が和麻と一緒に登校するんだ？」

「ひぐっ……え、えと……その」

「夜美ちゃんがいないと、和麻は戻ってきても笑ってくれないぜ。

だから、一緒に待つんだ。大丈夫さ。和麻は必ず戻ってくる」

「うぐっ、黒木さん……私………うえーん！」

夜美は充の腕の中で泣き出した。それを充は優しく抱きとめる。夜美は怖かったのだ。和麻の死を確認することが。だから先に死んで全てをなかったことにしようとした。

「和麻が大好きなら、和麻のそばにいたいなら、こんなことで命を、生きる希望を捨てちゃいけない。和麻だって、必死に頑張ってるんだからさ。諦めたら、それで申し訳ないだぜ」

「ぐすっ……はい。すいませんでした」

「分かればよろしい」

充は笑って、夜美を離れた。力が抜けているのだろう。夜美はその場にへたり込んだ。

「私……どうしていいのか、分かりませんでした。考えるたびに辛い現実から目をそらしたくなって、でも、夢の中でも苦しんで……。何もかもが信じられなくなっただんです」

「おいおい。俺だって夜美ちゃんの親友だぜ？　少しは信用してくれてもいいんじゃないかな」

「本当にごめんなさい。黒木さん」

「はっはっは。いいんだよ」

夜美の涙が癒えるように、充は笑って見せた。

「さ、こんなところにいたってしょうがねえ。和麻のところに行こうぜ」

「ぐすっ……はいっ！」

屈託のない笑顔で、夜美は元気よく答えた。

幸い教師や他の生徒たちには見られなかったため、事は大きくなることなく、無事にいった。もともと夜美が飛び降りたのは校舎の裏側だったので、誰にも気づかれなかったようだった。

「ほら、涙を拭いて」

「あ、ありがとう……ごさいます」

階段を降りながら充はハンカチを渡す。本当は夜美も持っているのだが、せっかく充が渡してくれたので、使うことにした。

誰もいなくなつた校舎を二人で歩き、靴箱を目指す。部室棟から聞こえてくる合唱部のピアノ伴奏が、そのままBGMになっていた。

「今日は助けて頂いて、改めてありがとうございます」

広い廊下を歩きながら、夜美は呟くように言う。

「夜美ちゃんに死なれたら和麻に殺されそうだったからね」

「黒木さんが来てくれなかったら、私いまごろ……」

「でも、来たからこうして和麻のところに向かっているんだ。反実仮想……だったっけ、そんなのはよくないぜ」

「そうですね。黒木さんのお陰で、道を見失わずに済みました」
和麻を信じること。帰りを待つこと。そして、温かい、とっておきのお弁当を和麻に作ること。まだまだ夜美はやるべきことが無限に残っているのだ。

二人は登下校用のローファーに履き換えると、いつものように二人乗りで和麻の病院へと向かった。

「今日が、一番の山です」

診察室で、医師は二人に告げた。二人の目は医師と、和麻の状態を表す書類にくぎづけだった。

「山、とは？」

充は医師の言葉を頭の中で復唱し、医師の言いたいことを更に詳しく聞いた。

「今晚で目を覚まさなければ、恐らく彼に意識が戻ることは無いと思います」

それを聞いて、二人の目は陰しくなる。医師は続けた。

「正直いつ彼の脳死を確認してもおかしくはない状況です。明日になつて戻らなければ、和麻さんの生存確率は今度こそ絶望的です。しかし彼の手術は問題もなく、成功しています。ここを見てください」

医者は不安そうな顔をする二人に、一枚の書類の折れ線グラフを見せた。

「これは和麻さんの脳波のデータです。手術の後から、ほんの少しずつではありますが、元の数値に戻ってきているんです」

「それじゃ、和麻は……」

「目覚める確率は十分考えられます。しかし目覚めてくれなければ、今度は体が持ちません。事故の傷を癒すために、体にはただでさえ、大きな負担がかかっています。これ以上人工の心臓で生き延びられ

る分の力があるかどうか……分からないんです」

二人の目に輝きがともった。和麻が息を吹き返しかけている。その言葉が医師の口から聞くことができた。生き返らない可能性がないわけではないとはいえ、二人にとっては嬉しいことだった。

「天崎さんに、また会えるんですよね？」

「ああ、きつと会える」

「我々も全力を尽くします」

頼もしく心強い医師の言葉だった。

二人は最後の希望を抱いて、診察室を出た。明日という時間は無いのに、不思議と二人の気持ちは楽だった。和麻が目覚めないこともないという可能性が出てきた以上、信じないわけにはいかない。マインス思考をしないようにしてきた二人には、希望の方が大きかったのだ。

病室の窓際に、恵子が座っていた。夕焼け空に流れている雲を見上げている。その表情は見えない。充は声をかけようか、躊躇した。和麻はそのそばのベッドで横になっている。ベッドの横には大きな機械があり、音を立てていた。あの機械で和麻の命をつないでいるのだろう。そう考えるとその機械がどれだけ重要なのが分かった。

「あ、あの、恵子さん」

迷いを振り切り、充は恵子に声をかけた。肩にかかった髪が翻り、恵子の顔が現れる。

「ああ、二人とも。いらつしゃい」

夜美も充の後ろから話しかける。

「天崎さんは……」

「まだ眠っている状態よ」

「明日まで……なんですよ」

夜美が呟くように言うと、ほんの少し恵子はうつむいた。

「そうね。目を覚ましてくれるか、それともそのまま眠り続けるか……。明日になったら、分かるわね」

内心、恵子は覚悟が出来ていた。明日もし、和麻が目を目を覚まさなく

ても、それを受け入れる。たとえ哀しい現実であつても、素直に受け止めるつもりでいた。

「私は信じます。天崎さんは絶対に帰ってくると」

夜美はまっすぐな目で、そう訴えた。哀しいことは考えない。涙が流れてしまうから。

「ありがとう。私も、信じてみるわ」

恵子は和麻を見つめ、語りかけるように言った。和麻は何も答ええない。だが、恵子には和麻が笑ったように見えた。

やがて日は沈み、夜の帷が降りる。陽が沈むまで、三人は黙って和麻の病室にいた。が、恵子は仕事でナースステーションへと戻り、夜美と充は二人、和麻のそばで時を過ごしていた。

「今日も、ココにいるのかい？」

「はい。今日は絶対に、ここを動かないつもりですから」

充の問いに、夜美は珍しく力強く答えた。やれやれと充はため息をついたが、充も同じ考えだった。

簡単な食事を済ませ、二人は病室で時間を過ごしている。もし和麻が目を覚ましたらと思うと、一時もここを離れるのが惜しいのである。

しかし夜も十一時を回ると、やがて充は仮眠室へと足を運び、夜美と和麻だけになった。明日は土曜日なので、特に課題をする必要はないのだが、夜美は遅くまで、和麻のノートを纏めていた。自分のノートを開き、和麻のノートにより分かりやすく、丁寧に纏めていく。いつも寝る前にやっているの、すっかり日課になってしまった。

夜美は気がつかないうちに、ベッドに倒れこむようにして眠っていた。

夜美はまた、淡い光の中に立っていた。とても綺麗なところである。

「あれ、ここは」

夜美ははつきりと理解した。これは自分が見ている夢なのだ。普通夢というのは、見ている間はそれが夢だと気づかない。だが今回の夢は明らかに『夢』だと分かった。

「どこだろう？」

目の前に広がる風景は一面にして野原だった。所々に菜の花が咲いており、とても温かい風景だった。そこに、夜美は一人でポツンと立っている。これと同じような夢を、夜美は見たことがあった。

「この前と、同じだ」

もう見たくないと思っていた夢。それとこの夢は酷似していた。

夜美は歩きだすのを躊躇った。和麻に出会ったのが怖いのだ。

だが夜美は、勇気を振り絞って一步を踏み出した。ここで和麻を探しださないと、和麻に会えない気がしたのだ。もう二度と、である。しかしいくら探しても、和麻は見当たらなかった。それどころか、

誰もいない。誰も夜美の前に現れなかった。

「だ、誰かいませんか？」

誰にともなく、人を呼んでみる。しかし返ってくる声は無く、無情にも風が吹きわたるだけである。夜美は走った。

時間がない。この夢が覚めたら、きっと天崎さんは眠ったままだ。

夜美は草が絡まるのも気にせず、裸足で和麻を探した。

「天崎さん、どこですか？」

和麻がここにいるという確実な証拠はどこにもない。だが、ココで探すべき人は和麻だ。夜美は分かっていた。この夢は普通の夢ではないと。和麻を救うための、最後の試練であると。誰に言われたわけでもない。夜美の直感が、そう告げている。だが、それでいい。夢の世界は、その夢を見ている自分だけのもの。頼れるのは直感。それ以外には何も無いのだ。

「天崎さんっ」

いくら走っても疲れることは無い。だがその代わり、いくら走っても和麻はいなかった。時間が経てば経つほど夜美の焦りは増加して

いく。

一体この夢はどこまで続くのだろうか。和麻を見つけることができなかった、そのままタイムアップなのだろうか。それとも見つけ出せなければ、永遠に目覚めることは出来ないのだろうか。夜美としては後者の方が制限時間無しであるため、気が楽だったが、和麻が見つからないと、いつまでもこのままなのでどっちにしろ早く見つけるしかない。明るすぎる雰囲気、逆に薄気味悪い。

「あ……っ」

どれだけ走っただろうか。夜美は川岸の木の下に佇んでいる和麻を見つけた。夜美は思わず安堵した。

「天崎さん」

和麻の名を呼びながらゆつくりと近づいていく。和麻はこの前とは違い、まっすぐに夜美を見つめていた。だが、その口から出たのは、やはり一つの冷酷な宣言だった。

「消える。ここにくるな」

和麻が喋った瞬間、一気に空気が重くなる。夜美にのしかかる気迫が、夜美をまるで心臓を掴まれるような感覚に陥れる。

「あ……天崎……さん……っ！」

言葉がうまく出ない。和麻の気迫に思い切り負けている。歩を進める一歩がとても重い。

「お前が嫌いなんだよ、鬱陶しい」

まただ。あの時と同じである。二人目の和麻が現れる。更にもう一人の和麻が現れた。

「もう付きまとうんじゃない。さっさと消えろ！」

この前よりも口調がきつい。夜美は耳をふさぎたくてたまらなかった。

だがここで怯えてはいけない。後ろを振り向くと、また私は負けてしまう。暗い闇の底に落とされるだけ。

また和麻はいつの間にか夜美の周りを取り囲んでいた。和麻の言葉が頭の中にリフレインし、大音量で響く。

「私の声を聞いてくださいっ!!」

夜美は和麻の声に負けなくらい大きく、和麻に向かって叫んだ。その瞬間、夜美を取り囲んでいた和麻の声がピタリと止まる。夜美が顔を上げると、取り囲んでいた和麻たちが一人残らず姿を消していた。

「天崎さん？」

夜美は顔面蒼白で辺りを見回す。振り返っても崖は無かったが、和麻はみんな消えてしまった。

「どこですか？ 天崎さん！」

「夜美」

夜美の叫びに答えるように、和麻の声が聞こえた。夜美は驚いて、声の方を見る。

それは川の向こう岸、綺麗な紅い花の咲く野原だった。和麻はその花の中に立ち尽くして、夜美を見ていた。

「天崎さん！」

その和麻は、先ほどのような嫌悪感は微塵も感じられなかった。夜美のよく知っている和麻だったのだ。川の向こう岸で、微笑んでいる。夜美は笑顔で手を振った。

だがその笑顔は一瞬のうちに夜美の顔から消えた。

気がつくと和麻の立っている向こう岸は暗く、禍々しい空気になっていた。黒い闇の渦が和麻を取り巻いている。その渦から、黒い手が和麻に伸びていた。

「うあっ！」

和麻は腕に足を取られ、もがいている。草やら花やらが和麻にまとわりついていった。

「天崎さんっ!!」

夜美はすぐに和麻のもとへと走った。スカートが川の水で濡れても、川底の泥に足を取られて水中に転んでも、夜美は進むことをやめなかった。

あれに天崎さんを渡したら、永遠に天崎さんに会えなくなる！そ

地響きが凄まじい。闇ではない別の何かに、夜美と和麻は吸い込まれた。

「夜美、夜美。起きろ、夜美」

自分と呼んでいる声がする。夜美は目を覚ました。

「んっ、うっん……ふぁーあ」

「おきてくれねえと、重いじゃんか」

「んえ？ あっ、すいません」

夜美はベッドに倒れこむようにして眠っていた。いつの間にか寝てしまったらしい。

「あっはっは。嘘嘘。夜美は軽いから、全然重くは無いぜ」

「そ、そうですか。エヘヘ」

ここまで話して、夜美は気づいた。誰と話してるんだろう。ベッドで体を起こしているその人物を、こすっていた目を開けてしっかりと見る。そして、夜美は言葉を無くした。

「ん？ どうした。俺の顔に、なんかついてるか？」

真正正銘。天崎和麻がそこにいた。ベッドの上から夜美を見て、楽しそうに笑っていた。

「あ、あああ、ああああ………天崎さんっ！！？」

「でかい声出すなって。せっかく治ったのに耳が壊れちゃうじゃねーか」

夜美の頭を優しくぽんと叩きながら、和麻は言った。

「ひっ、うっく、ぐすっ、うっあ………天崎さああああああん！！」

「ああおい、こらこら、苦しいって」

夜美は溢れる感情を抑えきれずに、思いつきり泣きながら和麻の胸に飛び込んだ。今まで抑えてきたものが一気に解放されたように、夜美は今の自分を感情に任せた。

「よかったです……ぐずつ、ひぐつ、ううつ、もつ、……うつ、会えないかと思っただじやないですかあ……」

みるみるうちに和麻の服が涙で濡れていく。和麻は夜美が泣きやむまで、そつとその体を抱きしめた。

「一緒に帰るって約束したからな。そんな簡単に死んでたまるか」
「ぐずつ、うぐつ、ううつ……ありがとう……ひぐつ、ございっ、ます」

「礼を言うのは俺の方だぜ。毎日ここに来てくれたんだろ？」

「今日は……うつ、目を覚ましてるんじゃないかって……いつも思つて……ぐずつ、うつ、それだけ……信じてました」

夜美は振り絞るように呟いた。和麻が事故にあつてから、一日も欠かすことなく、雨の日も、風の日も、日照りの時も、必ずここへ足を運んだのだつた。そして、日が暮れるまで和麻の手を握って、いすに座つてじつとしていた。なかなか、そんな事を出来る人間はいない。それだけ夜美は、早く和麻に会いたかつたのだ。

「そつか。サンキュな」

「うつ……いいえ、ぐずつ、ひぐつ、目を覚まして下さつて、本当に良かったです」

「夢の中に、夜美が出てきたよ。俺を助けてくれた」

「えっ、それは、ぐずつ、本当ですか？」

夜美は驚いた。自分の見ていた夢は、まさしく和麻を助け出す夢だったからだ。

「私も、夢の中で、天崎さんを……ぐずつ、助けた気がします」

「そうなのか。じゃあ目を覚ませたのは夜美のお陰だな」

和麻は笑つた。その笑顔を見て、夜美は心の底から安心した。これは夢なんかじゃない。まぎれもなく、天崎さんが目を覚ましたという現実なんだ。

あの夢は現実と関係していたのだろうか。もしあの時、和麻を助けることができなかったら、果たして和麻はこうして笑っているのか。夜美には分からなかつた。いや、誰にも分からないのだ。

だがしかし、きっと和麻は眠ったままだったのだろう。何故なら、あの夢で夜美と和麻はつながっていたのだから。

三途の川の向こうに、立っていた和麻。彼岸の花に囲まれて、和麻を向こうに引きずり込もうとした黒い闇と腕。川の向こうから和麻を連れだしたからこそ、きっと和麻はここにいるのだ。夜美はそう信じている。

「夜美」

「は、はい、なんですか？」

「そのノート、俺のじゃね？」

和麻は夜美がずっと握りしめている大学ノートを見て聞いた。

「あ、これ、天崎さんがいつ目を覚ましてもいいように、今までの授業内容を纏めていたんです。どうぞ使ってくださいっ」

「本当か？ それは助かるよ。充には絶対できないからな」

「うっさいな。お前だってほとんど真っ白だったじゃねーかそのノート」

ベッドのそばに立っていた充がさかさツツコンだ。どっと笑いが起こる。

夜美はその時、いろんな人が病室の中にいたことに気づいた。

お母さん、恵梨奈先生、吉野さん、黒木さん、病院の先生、恵子さん、そして天崎さん。みんな天崎さんの回復を待ち望んでいた人たちだ。

「ほんと、心配ばかりかけさせるんだから」

腕を組んでメガネをいじりながら円が言う。そうそう、と充も便乗する。

「夜美ちゃんを何回泣かせたんだろうな。今ので、えーっと、分かるねえ」

「ほんと、みんなには迷惑かけたな。すまない」

和麻が頭を下げると、院長が声をかける。

「本当に奇跡だよ。よく戻ってきてくれたね」

本音を言つと院長も、もう駄目だと思っただけらしい。今だから言

えるココだけの話である。

「学業に戻るには、もう少し時間がかかりそうだけど、脳死の一手前まで行ったにも関わらず、後遺症というか、不具合が全く見られない。実に不思議だね」

記憶障害も起こることなく、無事に意識を完全回復できたのは数少ない例だそうだ。夜美は早く和麻に目を覚ましてもらいたかった反面、もし目を覚ました時に自分を覚えていなかったら、という可能性がたまらなく怖かったのだ。まるで悪夢の時のように、『お前知らない』などと言われれば、元に戻っても意味は無いに等しい。

「とにかく、和麻が戻ってよかった。またいろいろ手伝ってもらってから覚悟しな」

恵梨奈が実に恐ろしいことを言っている。病み上がりにも重労働は勘弁してほしい。

「改めまして、霧野夜美の母、博美と申します。夜美が先だってお世話になっております」

夜美の母親が続いて和麻に話しかける。

「ああいえ、こちらこそ。夜美さんにはいろいろお世話になってます」

「どうかいつまでも、この子の安心できる人でいてやってください。友達がいままでいなかったもので……」

「はい。任せてください」

その言葉に、夜美も嬉しく感じた。これからも一緒に学校に行って、一緒にお昼を食べるんだ。なんともなかった日常を一度失って、夜美はその大切さに気付いた。

和麻はこれからまだ検査や事故後のリハビリなどで二カ月ほど入院しなくてはいけない。だが夜美は、またその日常が戻ってくることを、楽しみに待っている。いつか必ず、その日は来るのだから。

「星がきれいですね」

「ああ。今日は晴れてよかった」

和麻と夜美は、病室の窓からキラキラと輝く星を見ていた。

七月七日。今日は夏の中で星が一番光る日。そう、七夕だった。天の川は見渡す限りに続いており、無数の星々が見事に空を彩っている。

「短冊、買ってきました。よかったら、どうぞ」

「短冊なんて、久しく書いてないな」

夜美はスーパーで購入した小さな短冊のセットをベッドのデスクに広げる。赤やら青やらのカラフルな長方形の画用紙が顔を出す。

「天崎さんの願い事は何ですか？」

「うーん、やっぱ早く退院することかな」

最もな答えである。夜美は頷いた。

と、今度は和麻が尋ねる。

「夜美の願い事は何だ？」

「私のですか？ うふふつ、秘密ですっ」

いたずらっぽく微笑むと、夜美はスカートのポケットになにも書いていない短冊をしまう。

「ずるいぞ」

「実は、まだ考えてないんです」

「早く考えないと、七夕終わっちゃうぜ？」

「大丈夫です。それまでには考えますから」

二人は笑った後、また星空を仰いだ。流れ星が時々流れていく。黒一色の世界に光の線が浮かぶたびに、夜美は無邪気に指さした。

「あの、天崎さん」

「ん？ なんだ」

夜美には一つ、どうしても聞きたいことがあった。

「なにか、悩んでたんじゃないですか？」

「な、何言ってるんだよ」

不意に凶星をつかれ、少し和麻は動揺する。夜美は食い下がる様子は無かった。

「私にだけでも、教えてくれませんか？ 天崎さんの力になりたいんです」

「……………」

和麻は戸惑う。夜美に話すのが返って躊躇われるのである。

「天崎さん」

「……実は、夜美のことです」

観念して和麻は話します。自分のことと言われ、夜美は少し顔を赤くした。

「俺って、何か役に立ってるんだろうかって、思ってたんだ」

「どういうことですか？」

「実際、最初のあの時以外、俺は夜美を救えなかったんだ。三人の嘘に騙されて保健室に行った時も、自分の悪いうわさが広まるのを恐れて、行くのが遅れた時も、俺は夜美を守れなかった。こんな俺で、何の役に立ってるんだろうかって」

「……………そんなこと、言わないでください」

夜美は和麻の悩みを聞いて、哀しい気持ちになった。夜美は、和麻がそばにいてくれるだけで、ただそれだけで嬉しいのに、和麻は何も夜美のためになっていないと思っている。それが夜美は哀しかった。

「天崎さんは、私の初めての友達です。天崎さんがいなかったら、今の私はいません。天崎さんのお陰で、いろんな人と友達になれました。あの三人の方とも、お友達になってもらえたんです。恵梨奈先生に怒られて、改心したらしくて、私たちと天崎さんに謝ってくれたんですよ」

和麻は目を丸くした。とても信じられなかった。

「あいつらが謝ったっていうのか？」

「はい。ですから、私を守ることが、天崎さんの責任だなんて思わないでください。私は、天崎さんがいてくれるだけで、楽しくて、

嬉しくて、毎日を過ごしていきたくって思えるんです。だから、役に立たないなんて、そんな哀しいこと、言ってほしくないです」

「夜美……」

夜美の哀しげな表情を見て、和麻は気づいた。自分は夜美の友達だ。そばにただで楽しい存在。それが友達ではないか。そう考えた途端に、悩んでいた自分がバカみたいに思えた。自分で夜美を哀しませちゃいけない。

「ごめん。俺が間違ってたぜ。変なこと言ってごめんな。どうしたら夜美に笑ってもらえるんだろうって、ずっと考えてたら、どんな変な方向に考えちゃって、気が付いたら、バカみたいなこと考えてんだ。ほんと、どうかしてるよ、俺は」

「いえ、いいんです。私は天崎さんが隣にただで、笑顔になれますから」

そう言って夜美はにつこりと笑った。

夜美は家に戻ると、自分の部屋へと真っ先に向かい、ポケットにしまっていた短冊を取り出す。油性のマジックペンを取り出してノートに隅に適当に試し書きをし、インクが付くのを確認すると、空を見上げた。

『夜美の願い事は何だ？』

和麻の笑う顔を空に思い描く。

「私の願いは——」

夜美は、たった一つだけ願うことを短冊に綴った。

「天崎さんとずっと一緒にいられますように」

銀色に染まる天河と、そのそばでひときわ明るく光る星——織姫星と彦星を見上げ、夜美は短冊に書いた素直な願いをそつと呟いた。

和麻が入院してから、また季節が一つ過ぎた。夏が終わり、木々は赤く色づき始める季節。だが十月になってからでも、相変わらずの残暑は続いていた。

「それでは、行きましよう天崎さん」

「ああ。どうもお世話になりました」

和麻は一礼すると、病院の自動ドアをくぐる。院長や看護婦さんたちが出迎えに来ていた。

「これからも元気でね」

「はい。ありがとうございます」

和麻は元気よく答える。

今日は待ちに待った退院の日だった。四月月近くになる入院生活に終止符を打つ時が来たのである。軽やかな足取りで和麻は病院を後にした。

「やっと退院ですねっ」

「ほんと。長かったぜ」

夜美は嬉しそうに隣を歩いている。外の気温の高さなど全く気にしていない様子だった。歩きながら夜美は言った。

「また一緒に登校してくれますか？」

「ああ、行きも帰りも一緒だ」

「わーい、ふふっ」

ひまわりのような笑顔で夜美は喜んだ。その答えが返ってくるのは分かっているのだが、つい聞いてしまう。そして安心できるのだ。

「あーあ。ずっと寝てたから、体なまっちゃったぜ」

「また一緒にサッカーしたいですっ」

「充に言えばいつでもできるさ」

新学期はすでに始まっている。始業式には出られなかったが、まだ本格的な授業は始まっていないようだった。夜美がまとめてくれた

ノートのお陰で、遅れた分の勉強もスムーズに済むだろう。

「学校に行くのは気だるかったただけなのに、なんでこんなに待ち遠しいんだろうな」

和麻は自転車をこぎながら呟いた。夜美には聞こえていないようだったが、和麻はいつの間にか学校に対する考え方が変わっていることに気付いた。

やはり気だるいと思っていても、ずっと行かない日が続くと、体は違和感を覚えるのだ。なぜなら、そこにはいつもの日常と、変わらない仲間が待っているから。またみんなと会うために、学校へ行きたいと願うのである。

「新学期か」

春の穏やかな日差しとはほど遠いが、新鮮な気持ちで和麻は自転車を走らせた。日曜日の朝は車が少なかった。

きっかけは一組のチケットだった。

「あ、天崎くん」

「ん？」

退院から一週間ほどたったある日、帰り支度をしていた和麻に突然後ろからかかる声があった。振り向くとそこには日直の仕事を終えた円が立っていた。何か用事だろうか、和麻は不思議に思う。

「どうした？」

「えーっと、これ、いる？」

あはは、と笑いながら円が差し出したもの。それは二人一組のとあるテーマパークの招待チケットだった。なんでも最近オープンしたばかりで注目度も高いらしい。

「俺にくれんの？」

「お父さんの友人のひとに貰ったんだけど、私忙しいし、一緒に行く人いないから、あげちゃおうかなって」

普段から勉強に勤しんでいる彼女には時間は作れないだろう。たまには息抜きにこういうところにも行けばいいのに。

「本当に、貰っていいんだな？」

と、言いつつも和麻は実際困っていた。貰えるのは光栄だが、和麻自身一緒に行く人なんていないし、あまりテーマパークのようなぎやかな場所と馴染みがない。

「うん。あげるわ」

そう言っただけで和麻の手にそれを手渡すと、じゃあね、と先に帰ってしまった。呼び止める間もなく、もう廊下にはその姿はない。

「あげるわって言われてもな」

せつかくもらったのだから使わなければもったいない。だが果たして和麻のそばにこのペアチケットを共有する人物はいるだろうか。母さんは毎日忙しいし、というかいまさらこの年になって母親と二人っきりで遊園地なんてのも虚しい。却下。

充。こいつも論外だ。言えば喜んでついてくるだろうが、何かと面倒である。自転車で街を徘徊する方が楽しいだろう。

「どうすっかな……………あとは、夜美か」

これはペアチケットである。その相手は同い年の女の子。

「恥ずかしい……………」

いわゆるデートになってしまう。和麻は迷った。

親や充と行ってテンションの低いまま遊ぶか、少しドキドキしながらの夜美とのデートを選ぶか。はたまた行かずにこのチケットを誰かに譲渡してしまうか。

「天崎さん」

「ん？」

教室のドアから、夜美が手を振って呼んでいた。気がつけばすっかり夕日が差している。和麻はとっさに手に持っていたチケットをポケットに隠す。

「放課後ですけど、一緒に帰れますか？」

「ああ。今行く」

とりあえず考えていたチケットの事は頭から追い出し、和麻は帰り支度を急ぐ。夜美の元へと駆け寄ると、いつも通り笑って、他愛のない話をする。

「そろそろ秋ですね」

「まだまだ暑いけどな」

木々はすっかり秋模様だが、和麻は何せ、夏の間中病室にいたのだから、夏が過ぎたという実感が全くなかった。

「見てください、ススキが綺麗ですよ」

帰り道。夜美は空き地のススキ畑を指さして、秋の象徴の一つを示す。確かに心地よいサラサラとした音を奏でていた。聞いていると自然に涼しい気分になっていく。

「よし」

和麻はおもむろにススキ畑の方へと歩いていく。夜美は首をかしげたが、和麻についていく。

和麻はススキの上に鞆をドカツと置くと、その横に寝転がった。和麻のやりたいことが分かったのか、夜美も同じように和麻の隣に寝転ぶ。

「気持ちいいですね」

「この季節にはよく充と蛸を見に行つたんだ。その途中、山の中腹辺りに綺麗なススキがいっぱいあるところを見つけてさ、毎日のようにそこに行つては、こうやって寝転んでたよ」

「へえー。いいですね」

「だろ？ 風が気持ちいいんだよな」

流れていく雲。紅い空。オレンジの夕日。そして金色のススキ。邪魔するものはなにもない。風にそよぐススキが自分を包み込んでくれる。

二人はしばらく、ススキの平原で空を見ていた。たまにトンボが飛んできて、秋空に映える。

夜美が寝息を立て始めたので、和麻は慌てて起こして、帰ることにする。

「ふあふ。思わず眠ってしまいました。エヘ」

「気持ちいいから、気を抜くと睡魔に負けるんだよな。俺もよく寝たよ」

再び自転車を押しつつ、帰り道に戻る。陽は大分沈んだようだ。

「なあ、夜美」

「はい？　なんでしょう？」

和麻が突然呼びとめたので、夜美ははてなマークとともに振り向く。和麻は照れながらも、夜美と行くことを決意しポケットからあれを取り出す。

「これ、円に貰ったんだけどさ。よかつたら、一緒に行かないか？」

夜美はそれを覗きこみ、最近オープンしたテーマパークのチケットだと理解した瞬間、素っ頓狂な声を上げる。

「あ、あああああの、私と、その、一緒に行っていただけなんですかつ？」

「充と行ったってつまんないし、ほら、夜美には、夏の間ずっと病院に来てもらって、休みを満喫出来てないかなって思ったからさ。その、どうだ？」

「は、はいっ。ぜひ一緒に行きたいです。嬉しいですっ。ありがとうございますっ」

夜美は顔を真っ赤にしながらも、とても純粋に喜んでいた。誰かと一緒に遊園地だなんてもちろん初めてだし、何より夜美は和麻に誘ってもらえたことが一番嬉しかったのだ。

「そっか。じゃあ次の日曜日でもいいか？」

「はいっ。もちろんですっ」

夜美は輝かしい笑顔ではしゃいでいる。それを見て和麻も自然に顔がほころんだ。

「わー、うふふっ、楽しみです」

夜美は分かれ道に達するまで、一度も笑顔を絶やさなかった。

カーテンの合間から降り注ぐ日差しに目がくらむ。和麻はベッドからニユルッと起き上がり、デジタル表示の目覚まし時計を確認する。そして今度は跳ね起きた。

「やべっ！」

時計の指す時刻は八時十五分。和麻は目をこすり、急いで支度にとりかかった。

「チィ、待ち合わせまで十五分しかねーじゃねーか」

階段を駆け下り、急いで顔を洗う。

「あ、今日はデートだったわね」

母親がまったりと食パンを焼きながら笑っている。

「余計なお世話だったの」

「はいはい。ご飯は出来てるわよ」

歯を磨いたら、一分で着替えを済ませ、家を飛び出す。口にはイチゴジャムの塗ってある食パンをくわえておく。走りながら食べれるのは便利だ。

今日は日曜日。夜美との初デート（？）の日である。寝坊した理由は昨晩なかなか寝付けなかったからだ。

携帯電話の指す時刻は八時二十七分。ギリギリ間に合うかどうかだ。和麻は無理やりパンを口に押し込み、バス停を目指した。

「んっ……」

夜美は寝ぼけ眼で時計を見る。五時三十二分。

「いけない。寝坊しちゃった」

夜美はベッドから跳ね起き、準備していた服に着替える。自分なりに一番似合う服を選んだつもりである。

母親はまだ寝ているようだった。

「お弁当、作らなきゃ」

顔を洗って、エプロン装備。今日は待ちに待った和麻との約束の日。うんと美味しい弁当を作って、和麻に喜んでもらうのだ。だが少し

遅めに起きてしまったため、待ち合わせの場所に間に合うかどうか怪しいところだった。

「うそつ、白ご飯残ってない……」

昨日の残りはほとんど空だった。仕方がないのでお米を炊きなおす。もう少し早めに起きるんだったと、いまさらながらに後悔する。

メニューはこの前事故の所為で食べてもらえなかったおかずである。カレーコロッケや、

鶏もも肉をつかった油淋鶏^{ユリチー}など、どれも和麻が好物だという料理をふんだんに盛り込む。

「あら、おはよう」

「あ、おはようお母さん」

調理開始から一時間ほどたった時、母親が声をかけてきた。夜美の張り切り具合を見て微笑む。これほどまでに嬉しそうな顔を見るのはめったにない、といった顔だった。

「今日はお友達と遊びに行くんだったわね」

「うん。お弁当作ろうと思って」

時刻は七時ジャスト。どうやら間に合いそうだ。夜美は最後の逸品に取り掛かる。

「朝ごはんも食べなきゃだめよ？」

「うん、分かっている。ご飯炊きあがったら作るよ」

作る、と言っても卵かけごはんである。卵とネギと醤油があれば簡単に作れるのだ。しかも美味しい。

夜美は愛情たっぷりの弁当を詰め、卵かけご飯をしっかりと食べると、家を出た。

「はあ、はあ。悪い夜美、寝坊しちゃった」

バス停で待っていた夜美に、和麻は駆け寄る。やはり遅刻である。

「私も今来たところです。昨日は眠れませんでしたから、私も朝寝坊しちゃいました」

和麻の遅刻など全く気にしていないようで、夜美はにこやかに笑っ

ていた。

「バスはまだみたいだな」

目的のテーマパークへはいくらか距離があるため、バスで移動する。バス停に集まったのはそのためである。

「もうすぐ、来ると思います」

夜美はとてもはしゃいでいた。今日一日、ずっと和麻と遊べるのだ。昨日から興奮して眠れないくらい、夜美はこの日を待ちわびていた。洋服だって、他所行きの時しか使わなかった値段の高いものを選んできたのだ。

和麻の視線に気づいた夜美は、両袖を広げて問いかける。黄色のシヤツに水色のスカート。明るく、涼しい色を基調とした綺麗な格好だった。

「似合ってますか？」

「えっ、あ、えと、ああ。すごく似合ってるよ」

今日の私服は可愛いな、などと思っていたら、突然その話題である。和麻はしどろもどろに答える。

「エヘヘ。今日のために、選んできたんですっ」

「そっか。俺もなんかいいやつ着てくればよかったな」

そんな他愛のない話をしていると、バスがやってきた。時間と行き先の終点から、このバスで間違いは無い。

ちょうど席が並んで空いていたので、そこに座る。夜美も和麻も、それほどバスに乗車した経験は無いので、とても新鮮である。

「ガム、食うか？」

まだ眠気が抜けていない和麻は席に着くとポケットからガムを取り出す。眠ってしまったら夜美に申し訳ない。

「頂きますっ」

しかし夜美はそれを口に含んで、なんともいえない顔をした。

「これ、辛いですね……」

「あ、悪い。苦手だったか？ 食べきれないなら、出していいぜ」

「いえ、平気です」

眠気覚ましと言えばブラックブラック。凄まじい勢いで覚醒できる。しかし万人向けではない。

それでも辛いのは最初だけであるので、あとは普通に嘔むことができた。

バスでの移動時間は大体一時間半程度と言ったところか。高速バスなので信号で止まることは無い。

「天崎さんは、遊園地に行ったことがありますか？」

「修学旅行で行ったつきりかな。母親と二人つてのも寂しいし」

実際にそう思ったので今回は夜美を誘ったのだ。

「私も家族では行ったことありません。お父さんは、私が生まれてすぐに死んじゃいましたから」

夜美も和麻と同じく、母子家庭なのだ。意外と似たり寄ったりな事実、和麻は驚いた。

「それにしても、いい天気だな」

話が終わってしまったので、話題を転換する。

「そうですね。雨が降らなくてよかったですっ」

楽しみにしていた日が、実は降水確率百パーセントだったりすると結構傷つくものだ。特に夜美の場合はかなり深く絶望してしまうに違いない。天気予報では晴れると言っていたのであまり心配はなかったが、やはり晴れてくれると安心できる。

「これより、高速道路に入ります。シートベルトをお締め下さい」

車内アナウンスに従い、シートベルトを着用する。案外高速バスは結構揺れるので、着けないのはあまり好ましくないのである。

都会のハイウェイをバスは疾走する。やがてバスは目的地であるテーマパーク『パラダイスアイランド』に辿り着いた。

「うわー、大きいですね」

夜美の感想通り、それはとても巨大な遊園地だった。さらにオープン直後ということもあり、人が大勢集まっていた。

「はぐれないようにしないと」

「じゃあ、えと、その……これでいいですか？」

夜美は少し恥ずかしそうにうつむいた後、和麻の手を握りしめる。

夜美の手が触れた瞬間、和麻はドキツとした。

「あ、ああ。そうだな。これだと、はぐれることもないよな」

思えば夜美と手をつなぐのは初めてだった。緊張が二人の間に迸る。ほとぼり二人はそのまま、入口のゲートへと足を運んだ。受付では笑顔の女性従業員のひとがせわしなくチケットをちぎっては渡している。

「わくわくしますっ」

「俺も初めてだからなあ」

徐々にテンションが上がってきた。園内から聞こえてくる楽しい音楽や、アトラクションの数々が心をゆする。

「さ、入るか？」

「はいっ！」

がやがやした人ごみを縫って受付へと進む。夜美と和麻の二人分のチケットと、夜美の手をしっかりと握りしめ、はぐれないように歩いた。

「はい。特別チケットですね。ではこのパスポートを受け取ってください。このパスポートで今日一日、アトラクション乗り放題となっております」

優しく受付のお姉さんの説明を聞き、破られた半分のチケットを手にする。

中に入ると、改めてその広さに驚く。

「広いですねーっ」

噂に聞くと、東京ドーム一つのエリアだけで七個分もあるそうだ。

広大な敷地の中に、これでもかというくらいのアトラクション、シヨップ、イングリッシュガーデンなどが凝縮されている。

和麻はとにかく位置情報を掴むためにパンフレットを広げる。このパラダイスアイランドは四つのエリアに分かれており、それぞれ異なったカテゴリーのアトラクションを遊ぶことができる。このテーマパークの人気の一つともいえる特色だ。

「うーん、まずはどのアトラクションで遊ぼうか？」

ろくな情報も無しにここへきてしまったため、どんな乗り物があるのかは皆目見当もつかなかった。

「あれ、乗ってみたいですよっ」

夜美は入ってすぐに見つけた、壮大なジェットコースターを指さす。やはりそうくるか、と和麻は頭を抱える。ジェットコースターは、あまり得意な方ではないのである。

「よし、それじゃ行くか」

だがせっかくの遊園地なので楽しまなければもったいない。夜美の要望でもあるので、乗ることにした。

しかし見るからに激しそうなジェットコースターである。急降下の落差はなんと六〇メートル。それもほぼ垂直だった。乗っている客の絶叫が恐怖を煽る。

しかしそれでも夜美は楽しそうにしている。ジェットコースターに耐性がついているのか。人はみかけによらないものだ。

「はい。パスポートですね。どうぞ」

ジェットコースターの乗り場も混雑していた。さすが人気のアトラクションの一つ、その名も「ストレートジェットバーン」だ。国内でも一、二を争うジェットコースターだそうだ。

「ジェットコースター、初めてです」

安全バーをおろして、ベルトを装着。運のいいことに最前列の席だった。

間もなく、ジェットコースターが動き出す。緊張が高まる。夜美は和麻の手を握りしめていた。

トンネルを抜け、視界が開けた。眩しい太陽に目がくらむ。

「くるぞ……っ」

もう頂点がそこまで迫っている。レールの先が見えなくなった。ここから究極の六〇メートル落下が始まるのだ。

「うわあああああああああああああああああああ……!!」

まさしく絶叫と呼ぶにふさわしい。加速が始まって一秒、和麻は見事に絶叫していた。

「大丈夫ですか……？」

「ああ。なんとか」

夜美と和麻は次のアトラクションを目指す。絶叫マシーンで撃沈した和麻は、パンフレットを取り出す。実はまだあと三つのエリアに一つずつジェットコースターは存在する。

「楽しかったか？」

「はいっ。とっても楽しかったですよ」

和麻も絶叫してはいたものの、それなりに楽しんでいた。やはり遊園地というものは人のテンションを高揚させるなにかがあるに違いない。

「えーっと、今が『サマーエリア』だから、……ん？」

夜美が何やらキョロキョロと辺りを見回している。何やらアトラクションを探しているのかと思ったが、夜美は目線の高さで目を彷徨わせている。

「どうかしたのか？」

「へっ？ あ、いえ、その、なんでもないです……」

周りにはお土産やレストラン以外には歩いて通り過ぎていく人ごみしか見当たらない。しかしよく見ると夜美はキョロキョロ見回すというより、じつと何かを見つめていた。

夜美の視線の先を追っていくと、ちょうど同じ年齢くらいの男女が歩いていた。あこがれの視線のようなまなざしで夜美は見入っている。

「あの、……天崎さん」

「ん？」

「……腕、組んでもいいですか？」

顔を真赤にして夜美は言う。言われて和麻も真赤になる。夜美は一度でいいから腕を組んで歩いてみたくなったのだ。

「まあ、その、駄目じゃないけど」

「じゃあ、えと、……失礼します」

少し控え目に和麻の腕にすがりつくようにして寄り添う。別に通り過ぎていく人は何も気にはしていないのだが、どうも無駄に緊張する。

「えっと、それじゃ、行きましょう、天崎さんっ」

「あ、ああ」

二人は腕を組んだまま歩きだす。歩幅が自然と同じになる。

「緊張……しますね…エヘヘ」

「そうだな……ハハ」

顔が火照っている。今自分は女の子と腕を組んで歩いているのだと意識してしまう。そしてそれは夜美も同様だった。

天崎さんが、腕を組んでくれた。それだけで夜美は嬉しかった。

「あ、天崎さんっ、あれ見て下さいっ」

夜美が指さした方向には次のアトラクションがあった。

「よし、じゃあ次はあれに乗るか？」

「はいっ！」

腕を組んで寄り添ったまま、二人は大観覧車に向かって歩きだした。

「次は何に乗りましょうか？」

「うーん、そうだな。『ウィンターエリア』の『アイスシャトル』
つてのが面白そうだ」

まだまだ残暑が続いているこの季節である。避暑地のような役割を果たすということもあって、冬をテーマにした『ウィンターエリア』は人気上昇中だった。

「行ってみたいですよっ」

夜美も乗り気だったので、行くことにする。が、しかしその時だった。

ぐう。

「……そろそろ、ご飯にしないか？」

勢いよく腹がなってしまったので、和麻は提案した。ムード玉砕の効果音だったが、待ってましたとばかりに夜美は喜ぶ。

「そうですね。お昼、食べましょう。お弁当作ってきましたっ」

夜美は辺りを見回して、広くて座れそうな場所を探す。和麻は適当な園内レストランで食べようと思っていたが、夜美の弁当があるのならそっちを食べるに決まっている。タダだし、なにより折り紙つきの味だ。

「あの辺にしようぜ」

「わかりました、行きましょう」

和麻が指したのは芝生の一角部分だった。ちょうど木の陰に隠れていて、日差しが当たらないようになっていいる。

「レジャーシートも持ってきました」

「準備がいいな」

「エヘヘ。昨日の夜から、忘れないようにバッグに詰めておきましたから」

少し照れた様子で夜美は微笑んだ。

夜美の弁当を開けると、食欲を掻き立てる素晴らしいにおいが立ち込めてきた。午前中アトラクションで遊びつくしたため、とてもお腹がすいていた。

「天崎さんのお好みに合わせておかずを作ってみました。お口に合うかどうか分かりませんが、どうぞ食べてみてください」

「マジか。どれどれ」

おかずの一つをつまんで口に放り込む。大好物の油淋鶏だった。

「うまい……！」

「本当ですか？ 嬉しいですっ」

甘い中にちよつとだけある辛味が鶏肉を引き立てる。中華料理でも夜美の腕は健在であった。

「たくさん食べてくださいねっ」

味には正直不安があったが、和麻が喜んでくれたので自信がついた。
「天崎さんが目を覚ましたら、絶対作るんだって、決めてたんです」
「そっか。……ありがとうな。すげえうまいぜ」

「え？ あ、そんな……。お礼なんてよしてください。私が天崎さんに出来ることって、これくらいしかありませんから」

まさかお礼を言ってもらえるとは思っていなかったらしく、夜美はしどろもどろにそう答え、真赤な顔でうつむいた。

「トンカツも入ってるじゃん。……うん、うまい」

和麻の好みを熟知した弁当だった。

「ソースも二種類あるんですよ」

「張り切り過ぎだぜ」

「エへへ。確かに、作り過ぎちゃったかもしれません」

本当は和麻がどれだけ食べるか分からなかったので、多めに作ったのだ。

他にも作りたかったが、それはまたの機会でもいいはずだ。これからどんなお弁当を作ろうか、夜美にとっては嬉しい悩みである。

「ふう、ご馳走さま」

「お粗末さまです。美味しかったですか？」

「ああ。最高だったぜ」

「そうですか。喜んでもらえてよかったですっ」

体力補充はバッチリである。午後也十分に園内を闊歩できるはずだ。レジャーシートをたたんで夜美のバッグにしまうと、二人はまた歩き出した。

「涼しかったですね」

「ああ。気持ちいいとこだったな」

やはり暑いこの季節の冬ものアトラクションは気持ちのいいものだった。このまましばらく『ウィンターエリア』で過ごすのも悪くな

いかもしれない。氷のエリアと言うことで、かき氷やアイスクリームなども他より多めに販売されているようだ。

「かき氷、食べるか？」

「いいんですか？」

「好きなものを選んでいいぞ。買ってやるから」

「じゃあ、私はイチゴにします」

「よし」

人込みをかき分けて屋台を探す。その時だった。

「きゃっ」

夜美が突然声をあげる。和麻が振り返ると、ちよつとこついい男が立っていた。

「おいおいお嬢ちゃん。よそ見して歩いたらだめじゃねーか？」

夜美の肩と男がぶつかったようだった。

「あつ、あの、すいませんでしたっ」

「謝って済むんなら警察はいらねえよなあ？」

どうやら男は許す気はないようだった。それを理由に夜美に詰め寄る。

「ちよつとあんた！ 手え出そうってんなら許さねえぜ？」

とつさに和麻は夜美の前に立ち、男と夜美を遠ざけた。夜美は怯えた表情で和麻の背中にしがみつく。

「なんだお前は？ 俺あ今そこのお嬢ちゃんと話をしてんだけどなあ？」

「てめえに話すようなことなんざ一つもねえよ。さつさとどっかに行ってくれるか？」

静かに、ただそれだけを言い放つ。和麻からは荘厳な威嚇が放たれていた。

「誰に口きいてん——」

「ちよつとあなた、何やってるんですか？」

男が口を開こうとした時、事態に気づいたガードマンのような人が走ってきて、男を止めにかかった。周りで見ていた人々も、ホッと

した息をつく。

チツ、と一つ舌うちをして、男は立ち去った。和麻がケンカしても勝てる相手ではなさそうだったので、ガードマンに感謝だ。

次の瞬間には何事もなかったかのように人々は歩き始めていた。何人かは和麻の勇氣ある威嚇に感心したまなざしを送っていた。

「怖かったです……ありがとうございます、天崎さん」

「心配すんな。もう大丈夫だぜ」

しばらく夜美は和麻から離れなかった。昼前よりも強く腕を組んで、身をびったり寄せて歩いている。

五分ほど歩くとちょうどいいかき氷の屋台があつたので、購入することにした。

かき氷を無事に購入し、近くのベンチに座って食べる。甘く冷たい氷の上にかかった練乳とシロップが何とも言えない。夜美の顔にも笑顔が戻っていた。

「夜美はかき氷は好きか？」

「はいっ。甘いものはなんでも好きですからっ」
なるほど。覚えておいた方がいいだろう。

かき氷を食べ終わると、再び歩き出す。陽が暮れるまでみっちり遊ぶのだ。

時刻が三時になる頃には、既に七つもアトラクションに乗っていたが、まだまだ壮大な数のアトラクションが残っている。これだけのつてもまだ迷うほど数があるのだから相当広い。客もなかなか飽きないのだから大繁盛だ。

「ちよつと、トイレに行つてきていいですか？」

「ああ。じゃここで待つてるよ」

和麻が次のアトラクションを選んでいると、夜美はそう言ってトイレへと駆けていった。そのうちに和麻はパンフレットに目を戻す。

花壇の石に腰かけて、夜美を待つことにした。

「こんにちは。天崎くん」

「ん？」

そんな和麻を呼ぶ声があった。和麻が顔をあげた先にいたのは――。
「あれ、吉野。何でここにいるんだよ？」

円の譲ってくれたチケットで夜美と遊びに来ているのだから、したがつて円がここにいるのはおかしいはずだ。

「お前来る予定なかったんじゃないのか？」

和麻の問いに円は微笑を浮かべる。

「そうだったんだけど、友達に誘われちゃってね。パスって言ったんだけど、聞いてくれなくて。でも、来てよかったわ。案外楽しいものね」

「なるほどね」

和麻が納得すると、今度は円の方から問いかける。

「天崎くんは、誰と来てるの？ 黒木くん？ それとも一人？」

「んなさびしいことするか。夜美とだよ」

言うのが恥ずかしかったが、夜美が戻ってきたときにどうせバレてしまうので嘘はやめた。

案の定円は大爆笑だった。

「わーお。デート？ 天崎くんも大胆な事するのね。あっははは」

「うるせえな。まあ夜美には夏の間の礼もしてなかったしな。ちょうど良かったんだよ」

「ふーん。……でも、今はいないの？」

「トイレ休憩だよ」

「ああ、なるほどね」

「そっちこそ、そのお友達とやらはどこに行ったんだよ？」

和麻がそう聞くと、円は困った顔をした。どういうことだろう。

「それがねー、はぐれちゃったのよ。どこを探してもいないの」

「おいおい。高校生でしかも委員長が迷子じゃ、話にならねーぞ？」

「うるさいわね。迷子って言うのは位置情報を見失っている人のことよ？ 私はいまどこにいるのか分かってるんだから迷子じゃないわ」

苦しい言い訳にしか聞こえないが、まあこの際気にしないようにし

よう。委員長のメンツを守るという意味で、和麻はそれ以上追及しないことにする。

「はいはい。そうかよ」

「一緒に探してくれないかしら？」

位置情報を把握していると言っても、このテーマパークの広さは伊達ではない。一人で探すのは至難の技だろう。

「迷子センターみたいなのないのか？」

「あると思うんだけど、場所が分からなくて」

迷子じゃないか。苦しかった言い訳さえも通じなくなってしまう。

「はあ、しょうがねえな。夜美が戻ってきたら探してやるよ」

渋々ながら受け持つ。円は素直にありがとうと礼を言ったが、しかし。

「遅いな、夜美のやつ」

「お腹壊しちゃってるのかも」

円も隣に腰をおろして言った。先ほどのかき氷が問題だったのかもしれない。量もそれなりに多かったので不思議はなかった。

「大丈夫かな。もしかしてトイレがどこにあるか迷ってんじゃないのか」

「かもね。ここ広いし」

やはりトイレのそばまでついていくべきだったのか。和麻は少し後悔した。

「電話とか、無理なの？」

「そうだな。かけてみるか？」

和麻はジーンズのポケットから携帯電話を取り出して、夜美の番号にコールした。

その電話の先から聞こえてきた声に、和麻は凍りついたのだ。

『てめえはさっきの小僧か？』

和麻の顔から血の気が引いていく。その様子を見て円が不思議な顔をしている。

「て、てめえ！ 何してやがる！」

『まだ何にもしてねえから安心しやがれ』

下卑た声で男は笑う。和麻ははらわたが煮えくりかえりそんな気分だった。

「夜美はどこだ！」

『てめえの連れてたクソ娘ならここだ。ちよいと罰を受けてもらうからなあ。ハハッ』

かすかに受話器から夜美が呼ぶ声が聞こえた。

『あ……きさん！た……けて……さ……お……むえ……あの……う……です！』

それだけ聞こえ、その直後短い悲鳴になった。別の男の声でどなり散らすような言葉が聞こえてきた。恐らく男の仲間だろう。さらに別の女の子の声まで聞こえてきたので、人質も一人ではない。和麻は焦りながらも高速で頭をフル回転させた。

「ねえ、どうしたの？」

隣から聞こえてくる円の声は無視し、男に対して続ける。

「てめえ何する気だ！」

「だから、罰を与えんだよ。ぶつかっておいでタダ済まされると思ふなよ？」

「ふざけんなてめえ！」

男はそれ以上何も答えず、ブチっと電話を切った。ツーツーという無機質な信号音を残して、夜美の携帯との回線は切れたのだった。

「ねえ、何があつたのよ？」

「夜美が連れ去られた。クソふざけた男に」

「なんですって！ どうしてまた」

「受話器に出た男は、つい一時間ほど前に前に会った男だ。夜美に、ただ肩が当たっただけで因縁つけてきやがった」

たったあれだけのことで、何故ここまで付きまとうのだろう。意図が分からなかった。

「最悪ね」

「大方その辺は口実だろう。奢らせるくらいの軽いもんだといいが」
万一身代金を要求されるとも限らない。一刻も早く探すしかない。

「とにかく探しましょう。何か手掛かりは無いのかしら」

「そう言えば夜美の声が少しだけ聞こえたな。よく聞き取れなかったけど…」

「なんて、言ってた？」

「最初の部分は、多分、『天崎さん、助けてください』だと思うんだ。その後が、『お、むえ、あの、うこ』だったかな」

うまく聞き取れたのはその部分だけだった。他の声やノイズが入って聞きとりづらかったのだから仕方がない。

「うーん、何かの暗号なのかな。それとも、とぎれとぎれの文章だったのかな」

必死に円も答えを考えている。なにかそれに準じた場所は無いか、和麻もパンフレットを広げる。

だが、そんな意味不明のひらがなの集まりでは、場所を特定することとは出来ない。うまく聞き取れなくては、情報は何の役にも立たないのだ。

「くそっ、俺がついていながら……っ」

「とにかくこんなところで話してたって何にもならないわ。探しましょう」

二人は大したあてもなく駆けだす。急がなければ何をされるか分からないのだ。

走りながら和麻は呟いていた。

「また、俺の前で……こんな……。くそっ」

埃っぽい空気が蔓延している。薄暗がりの中、夜美は黙ってじっとしていた。

「……………」

大丈夫。大丈夫。と心の中で何度も復唱する。きつと天崎さんが助けに来てくれる。大丈夫。きつと助かる。

その時、唐突に鈍い音がその空間にこだました。

「あーあ。フザけた電話だ」

どうやら男の一人がコンテナの隅を蹴ったらしい。先ほど和麻からかかってきた電話の事をばやいている。

そして夜美のすぐそばから、体をこわばらせる気配が伝わってきた。というのは、夜美以外にもこの場所で拘束されている人がいるのだ。夜美の隣にもう三人、夜美と同じように頑丈な縄で手足を縛られている。全員女の子だった。男が何か行動を起こそうと立ちあがるたび、不安そうな声が上がってくるのだ。

現在、夜美たちを拘束している男は四人。いずれも強そうな体格で、中には入れ墨をしている男もいた。

こんな重苦しい雰囲気の中、夜美は不思議なことに冷静だった。騒げば何らかの処罰が待っている。ここは素直に黙っているべきだ。その夜美の堂々とした風格に、男たちは少し意外そうな顔をしていた。

夜美はトイレから出たその瞬間、今日の昼間ぶつかった男に拘束されてしまった。悲鳴を上げることもできず、ここに連れてこられたのだった。恐らく他の三人も同じように強引に因縁をつけられ、それを理由に無理やりここへと縛り付けられてしまったのだろう。

「お前、怖くないの？」

男の一人が夜美に向かって口を開いた。夜美は答えず、まっすぐに男の顔を見つめる。

「たしかさっきこの場所を叫んだのもお前だったなあ。ああ？」

「……………」

「チツ、なんとか言えや！」

黙ったままの夜美にシビレを切らしたのか、男が大声を上げる。

「くそつ。まだ待つんですか？ さっさとやっちゃいましょうよ。もう待ち切れないっすよ」

夜美に詰め寄った一人が、もう一人の男に何やら提案をしていた。言葉づかいから伺うところ、話し相手の男はリーダーのような存在らしい。

「まあ待て。あと一人、仲間がここへカモを運んでくるはずだ。まだ昼間でもある。パレードがはじまりや、ここらの人間はみんなそっちに行くからな。それからでもたつぷりできるだろ。てめえは相手でも選んでろ」

そうリーダーが言うと、男は納得したように頷く。一体男たちは何をしようと言うのか。

「お願い、早く来てっ、天崎さんっ」

男たちには聞こえない声で、夜美は小さく呟いた。

「暗号は解けた？」

「いや、まだだ」

和麻と円の二人は、パラダイスアイランドを激走していた。時刻は四時を回ったところである。パンフレットを握りしめ、和麻は必死に頭を回転させる。

「お、むえ、あの、うこ……くそ、どういう意味だ？」

パンフレットに目を走らせても、そのニュアンスに似たアトラクションや建物は存在しない。人のいない場所なのだろうが、和麻にはどこに何があるのか、よく分からなかった。

どこだ。どこだどこだ。目を走らせる。どこを探しても人ごみ。人のいない場所は見当たらない。

「くそっ！」

焦ってはいけないと思うほど、体が状況を焦ってしまう。もし夜美の身に何かがあったら、そう思うと感情が高ぶって何も考えられなくなってしまうのだ。

「落ちついて、天崎くん。冷静に考えれば分かるはずよ。そう難し

い暗号なんて考えるはずないもの」

とつさにそう難しい暗号を考え出すことは出来ない。それは分かっているのだが、答えが簡単などころにあればそれだけ、その暗号のつぼにはまってしまふ。無駄に難しく考えすぎてしまつと、もうそこから抜け出せないのである。

「あの時の電波は微弱で聞き取りにくかった。ってことはどこか電波の阻害される場所つてことにはならねーかな」

「その考え、ありかも。探してみましよう」

肩で息をしながら二人は走る。足の筋肉にはすでに乳酸がたまっている。しかしそんなことで立ち止まっている暇はなかった。

和麻はパーク内の案内板を見つけ、それに目を走らせる。近くに電波塔など、別の電波が出ている場所なら、十分に電波の阻害はあり得るのだ。

そして見つける。広いパーク内の全域に迷子のお知らせなどの園内放送をいきわたらせるため、大きな電波塔がパーク中央のセントラルゾーンに設置されていた。ここからはあまり遠くない距離だった。「たしか電波塔のそばには、『オーム園』と呼ばれるイングリッシュユガーデンがあつたはずだ」

「なるほど。『お、むえ』はオーム園つて言いたかつたのね。そこにいってみるわよ」

「ああ！」

条件は満たしていた。しかし和麻もここは半信半疑だった。

何故なら人気のない場所という、憶測ではあるが誘拐の鉄則を無視した場所だったからだ。セントラルゾーンにはいくつものオブジェやレストランなどの建物が隣接し、昼も夜もにぎわっているのだ。特に夜の場合、パレードのスタート地点であり、フィナーレを迎えるゴール地点になっている。そんな場所で誘拐をするだろうか。

だが他に手掛かりは無い。それに夜美のヒントとも一致している。ここへ行くしかないのだ。和麻は荒い息を整える間もなく、オーム園へと駆けだした。

「もう五時か。パレードの第一幕が始まってしまっ」

夜美と一緒に見ようと思っていたアイランドパレード。一刻も早く夜美を見つけるしかないのだ。

パレードのファンファーレが聞こえた時、ちょうど和麻たちは電波塔に辿り着いた。既に周りは人ごみでいっぱいになっており、探すのは困難に思えた。

「あえて人ごみの中に隠したってのか」

和麻は電波塔の横にあるオーム園の看板を見つけて、呟いた。

オーム園というのは、オウムやインコなど、鳥たちがたくさん生息しているイングリッシュガーデンだった。パレードで人は減っているものの、休憩には持つて来いの場所である。

「夜美、いるか！ 夜美！」

「霧野さん！ どこ？」

必死に夜美を呼ぶ。しかしどこにも夜美はいなかった。和麻の心がまた焦り始める。

「どうして……ここじゃないのか？」

「そんなはずないわ。ヒントだって当たってるはずよ」

けれどどこを見回しても、夜美の姿は影も形もない。一体どういうことだ。

「夜美ーっ、どこだー！」

返事など返ってくるはずもなかった。和麻はどうしようもなく、床に手をつく。

「くそっ！ どうして……」

「諦めちゃだめ！ 他を探すわよ！」

だが和麻はもう動く気力が残っていなかった。手掛かりなしで探せというのは、無謀にもほどがある。ましてやこんな広いテーマパークで、それも何千人という人ごみの中をどうやって探せというのだ。

「ごめんな。夜美。やっぱり、俺、ダメだ」

和麻が小さく呟いた時、二人のある声が聞こえてきた。

「おいおい。ピーちゃんのエサが切れてるじゃないか」

「ああ、それ余りが残ってなかったんですよ」

「ああ本当？ そらあ仕方ないな。パレードが終わって人が引いたら、ちよつと倉庫から出してくるよ」

倉庫。ぴくつと和麻の体が震える。どうやらオーム園の従業員のようだ。ピーちゃんというのはパンフレットにも載っている、芸能人のモノマネが得意なオウムである。

「倉庫って遠いんじゃないですか？ 僕が行ってきますよ」

「大丈夫。オータムエリアまでなら、楽勝だよ」

オータムエリア。秋をテーマとしたエリアであり、ちょうどウィンターエリアに行こうとした時に和麻たちも通ったところだった。

オータムエリア、倉庫。『お、むえ、あの、うこ』。

「オ（ータ）ムエ（リ）アの（そ）うこ！」

急に叫んだ和麻に、隣にいた円はビクツと体をこわばらせる。瞬間和麻は従業員の二人を問いつめていた。

「その倉庫、どこら辺ですか？」

「え？ 倉庫なら、オータムエリアの風車の近くだよ。倉庫だけ、駐車場の横に大きくはみ出しているからねえ」

「ありがとう！」

情報を聞くや否や、和麻は脱兎のごとく走りだす。風車なら通った時に見つけたので知っている。完全にヒントとつながった。ここが外れたら、もう終わりだ。

後ろから聞こえてくる「待ってよお！」の声には振りむくことなく、和麻は無我夢中で走り続けた。

「そろそろいい時間だな」

突然男は立ちあがって顔をほころばせる。待ってましたと言わんばかりに他の男は声を上げる。

あれから一人また女の子が連れてこられ、合計五人。そして連れて

きた男も増え、五人。高い位置の窓からさすオレンジの光はもうかすかなものになり、やがて消えた。遠くでパレードの音が聞こえる。もうじきここにもやってくるだろう。

「な、なにを、するんですか？」

一人の女の子が、リーダーらしき男に問いかける。不気味な笑い声とともに男は答えた。

「楽しい時間の始まりだぜ。まずはてめえからだ」

夜美を指さし、男はにんまりと大きな口を開く。さすがに夜美も身じろぎをする。

「なんですか？」

「おい。服を脱がせろ」

「へっ？」

突然男二人に腕を掴まれ、身動きが出来なくなった。縛られていた縄は解かれたが、これでは逃げることは出来ない。

「いやっ、止めて！」

スカートのホックに手をかける男。夜美はようやく何が起こるか理解した。

「おら、抵抗すんなよ」

「やだ！ くっ！」

同時に上着のボタンも外され、黄色のシャツが顔を出す。これを脱がせられたら――。

「やめてー！！！」

「叫んでも無駄だ！ ここいらの人間はみんなお祭り騒ぎでセントラルに行つてんだよ。助けを呼んだって誰も気やしねえ！ ハッハッハ！」

「そいつはどうか？」

その一言で、一気に倉庫の中が静まり返った。続いて、響く足音。

「てめえら、ずいぶんとふざけたことしてくれてるじゃねーか」

和麻は走ってきたにもかかわらず、少しも疲れたそぶりを見せずに、言い放った。

「天崎さんっ！」

隙をついて夜美は男の手から離れる。外れかけていたスカートホックを元に戻し、和麻のそばにかけていく。

「変なことされなかつたか？」

「はいっ。大丈夫ですっ」

和麻が来たという安堵感で夜美の心はいっぱいだった。

「くそお！ 何だてめえ！」

「ボンクラどもには名乗る気はねーな」

指を鳴らして威嚇する。こう見えても和麻は結構ケンカに強い。

だが相手も相手。さすがに五人がかりでは勝てるはずもない。後の四人をどうやって助けるか。和麻は考えていた。

しかし考える余裕もなく、相手は殴りかかってきた。出口まで走るように夜美に促し、和麻も身構える。さっきの一言でキレるとは、なかなかの単細胞である。

「天崎くん、もうじき警察が来るわ！」

「了解！」

倉庫の入り口で心配そうに戦いを見ている円に返事を返す。警察が来るまでの辛抱だ。

迷路のようなコンテナの道を利用して、和麻は五人と絶妙な位置関係を取る。一人相手ならなんとかあしらうことは出来るのだ。ならば、一人ずつ相手をすればいいだけのこと。

だが一つ問題があった。

「こいつらが痛い目見るぜ。いいのか？」

残っていた女の子たちを人質に取られてしまったのだ。下手に動くとかをするか分からない。だが動かなければやられる。和麻は賭けに出た。

コンテナを上り、反対側へと降りる。薄暗い倉庫では人を見失いやすい。それを逆手にとり、人質を守っている男の反対側へと回り込む。案の定気づいていない。

「勝った……！」

静かに呟いてから、後ろのコンテナの上から男に蹴りを入れる。ドロップキックをもろに食らった男は思い切り地面に頭から倒れる。しばらくは眠ってもらえるだろう。

「早く、逃げる」

足の縄だけ解き、四人を解放する。突然人質側の男が声をあげて倒れたため、他の男たちはパニックになっていた。和麻もその場を退散し、倉庫の中には男たちのみとなった。

あとは警察の仕事である。

キラキラと光るパレードのセントラルゾーン。華やかなメロディとキャラクターたちが夜を祭りへと変貌させる。辺りは真っ暗だが、このパラダイスアイランドはまだまだ活気に満ちている。

「まさかみんなまで捕まってたなんて」

フルーツドリンクを飲みながら、円はぼやく。そばには夜美と一緒に捕まっていた三人と夜美、そして和麻。みんな並んでパレードを見ている。

「円のトイレ待ってたらあいづらが来たのよ、びっくりしちゃった」

「天崎くんに感謝ね」

「ありがとう。カッコよかったよ」

和麻は何も言わない。今和麻は夜美を救うことができたという達成感を味わっている。

「やっぱり天崎さんはすごいですっ。ヒーローですっ」

夜美は腕を組んだまま離さない。こうしていることが、今夜美が一番安心できて、リラックスになるのだ。

「夜美に手出しはさせねえさ」

ぼそっと和麻は呟いた。だがその顔は笑顔に満ちていた。

パレードが終了するのは十時だったが、それでは帰宅するのが深夜を過ぎてしまうので、一時間早く帰宅することにした。円たちはパ

1ク内で夕食を食べて帰るということだったので、別れた。

「また、いつか一緒に来てくれますか？」

帰りのバスを待っている時、夜美が呟いた。その声に和麻は顔をあげて答える。

「また、来たいか？」

あんなことがあったばかりである。トラウマになっても何ら不思議はない。夜美の顔も沈んだままだろうと思っていたのだ。しかし夜美は笑って頷いた。

「もちろんですつ。今日はすごく楽しかったですよ」

「……そうか。じゃあ、またいつか来ような」

「はいっ」

夜美が元気に笑った時、ちょうどバスが来た。忘れ物は無いか再び確認し、バスに乗り込む。シートに座った瞬間、どっと疲れが出てきた。

「疲れたな……」

高速道路に入って、和麻は急に帰るのが惜しくなった。

久々にはしゃいだ、テーマパーク。その上夜美の誘拐事件。一つだけでも疲れそうなのに、よりもよって二つ同時進行である。和麻は夜美の方を見た。できるなら、もう少し遊びたかった。夜美を探しまわった一時間。その空白の一時間があれば、まだ乗っていなかったアトラクションにも乗れたはずだ。

「……夜美？」

夜美は和麻の肩にもたれ、すやすやと寝息を立てていた。思わずドキッとしてしまうほど、夜美の寝顔は幼く、可愛かった。和麻の腕を抱き寄せるように眠っている。

夜美も疲れていたのだ。なにせこんなにはしゃいだことなどなかったのだから。

「すー、すー。……天崎……さん」

夜美が寝言を言った時には、和麻もバスの中で目を閉じて寝息を立てていた。

Part 6 - Loving You Forever -

優雅に色づいていた木々たちはすっかりその葉を落とし、どこか寂しい冬の季節の到来を告げる。

秋とは季節の移り変わりが最も現れる時期である。ついこの前まで残暑ばかりが残っていたというのに、今ではすっかり肌寒い。街ゆく人々はみな防寒具を身に纏い、ポケットにはカイロを忍ばせているのだ。

そんな十一月も半分が過ぎた頃のある日。夜美は悩んでいた。

「……はあ……」

朝から何度目か分からないため息。最近あまり授業に集中できていない。時々空を見上げて、雲を眺める。曇り空が多いこの季節だが、それ以上に夜美の心には霽がかかっていた。

「……はあ」

またため息。無意識に何度もついってしまうから、ため息と言うのは非常に厄介である。

やがて授業終了のチャイムが鳴り響く。それが合図となったかのように生徒たちは各々背伸びをしたり、腕を広げたりとリラックスモードに入る。だが夜美はずっと頬杖をついて窓に映る自分とにらめっこをしていた。

「どうしたの？ 夜美」

「えっ……？」

気がつくと、目の前にあの三人組が立っていた。今ではすっかり打ち解けた存在であり、このクラスでの夜美の話し相手だ。最近上の空の夜美を心配して、話しかけてくれたのだ。

「朝からずっとため息ばかりだよ？」

「何か、困ったこともあるの？」

「もしかして、今度は別のひとにいじめられてたりする？」

夜美は悩んでいるからと言って、別に苦しんでいるわけではなかつ

た。嫌なことをされた覚えもないし、傷ついてもいない。夜美は心配そうな表情の三人に笑顔で答える。

「いえいえ、そんなことないです。元気ですよっ」

しかし、なかなか言い出せないという夜美の性格を知っている三人なので、それでもまだ納得できていなかった。

「んー、じゃあ、もし何かあったら言つてよね。力になったげるから。……それが、私たちにできることだから」

以前、夜美をいじめていた人間とは到底思えないような頼もしい言葉だった。その言葉に夜美は力強く頷いた。

「はいっ」

しかし三人が元いた席に去っていくと、夜美はまた空を見上げる。空は変わらず、灰色だった。

やがて時計の短針が頂点を通り過ぎると、午前中の授業は終わりを告げる。夜美はお弁当を持って食堂へと向かった。

混んでいる食堂を縫うように進み、三つの顔を探す。そこには和麻と充、そして円が席に座っていた。夜美に手を振って、待っている。夜美も手を振り返してその席に向かうのだが、少しだけ胸が高鳴っている。今日の弁当は喜んでもらえるだろうか。ドキドキしながら、夜美は席に着いた。

「よし、それじゃ食べようぜ」

最近和麻は自分の弁当を持って来ていない。その理由は、夜美が弁当を作らせてほしいと願い出たからである。夜美に迷惑だからと当時は断っていたが、毎日必ず夜美が弁当を持ってきたため、母親に楽をさせてやりたいという思いも含めて、夜美に弁当を作ってもらっているのだ。

「きよ、今日は豚キムチを作ってきましたっ」

「マジか。美味そうだぜ」

和麻の好反応に、夜美はいつも安心する。作つてよかったという安堵感と、また作ろうという自信になってくれるからだ。実際和麻は夜美の手料理を残したことは無かった。

みんなでワイワイ食べる昼食。いつしかそれは夜美にとって当たり前のもになっていった。一年生だったころは入ることなどできないと思っていた温かい空間。そのなかに、確かに夜美はいるのだ。

「和麻、俺にもよこせ」

「無理な相談だな」

「いいじゃないか少しくらい」

「やだね」

和麻と充が夜美特製の弁当のおかずの争奪戦を繰り広げていた。昼休みはいつも楽しい。そばに仲間がいてくれるから、大切な人が、いてくれるから――。

だから夜美は、ランチタイムが終わったその時、和麻に内緒で充と円に相談することにしたのだった。

「どうしたの？ 夜美ちゃんが俺らに用事だなんて」

和麻はすでに旧図書室へと向かってしまったので、夜美は二人を呼びとめた。いつも通り二人は気軽に夜美の話を聞いてくれる。

「あ、あのですね……」

なかなか続きが出てこない。二人は話の続きを聞こうと聞き耳を立てている。

「そ、そのっ、笑わないで、聞いてくれますか？」

「え？ ああ、もちろんだよ。どうしたの？」

意を決して、夜美は事の次第を説明することにした。

「あ、あの、私、天崎さんのことが、ですね、その、す、好き……なんです……。でっ、でも、それを伝えるのが怖いんです。もし振られちゃったらどうしようって考えると、いつも言えなくて……。あのっ、私、どうしたらいいんでしょう？」

やっとそれだけ言っていると、夜美は顔を真赤にしてうつむく。二人は微笑んだ。

「知ってたわよ、それくらい」

「……はい？」

円の言葉に戸惑う夜美。知ってたというのは、夜美が和麻を好きだということだろうか。

「見てたら分かるわよ。いつもお弁当を作って来ては、天崎くんの食べてる時の顔見て喜んでるじゃない」

「そ、そうなんですか？」

充にもすでに感づかれていたが、夜美は周囲にあまりにバレバレな恋心が急に恥ずかしくなった。同時に和麻にもバレているのではないかと気が気ではなくなってしまった。

「和麻だったら、絶対に振ったりなんかしないって。思い切って告白してみなよ」

「こ、ここに、告白……ですか？」

正直に言うと今の夜美には到底出来そうにないことだった。やつぱり怖い。今まで散々のけものにされてきた夜美なのだ。告白が容易にできるほど、人間関係を築けているかどうか、夜美は不安でいっぱいだった。

「もう半年以上一緒じゃないか。和麻だってきつと、夜美ちゃんのこと好きだと思つよ？」

「本当に……そうでしょうか……？ 半年と言っても、入院中は実質天崎さんとはお話もできませんでしたし、それに私といると、昔からみんな去って行っただですよ？ 天崎さんも、今までは仲良くしてくれましたけど、他に好きな人がいる、とか言われてしまったら……」

「その時は、俺が夜美ちゃんを幸せにしてあげるよ」

「え……？」

充の意味ありげな言葉に、一瞬夜美はドキツとする。しかし次の瞬間には充はいつもの顔に戻っていた。

「なんつってな。大丈夫だって。和麻を信じろよ」

こんなときでも夜美を励ましてくれる充。その姿勢は嬉しいが、そ

れでも夜美には勇気が持てない。このままでいるべきか、一か八か賭けてみるのか、夜美は凄まじい葛藤の中に身を置いていた。

「うーん……」

「どうしても、怖いのか？」

購買で買ったパックのイチゴジュースを飲みながら、もう一度円は訊いた。出来ることなら、力になってやりたいが、夜美から告白しなければ、何の意味もない。夜美に勇気を持たせてやるのが、今自分に出来る精いっぱいのことだと思った。

「……あうう……」

夜美は困った顔をしていた。いつもの夜美にはみられない反応なので、少しだけ新鮮である。

「うん、わかったわ。私たちも、霧野さんが告白できるように力を貸してあげる」

「ほ、ほんとですか……？」

少しだけ夜美の顔がほころぶ。一人では無理なことでも、みんなであればできる。

「じゃあ、まずは何をするんだ？」

充も協力してくれるようだ。夜美はつくづく、二人と友達でよかったと安堵する。

「そうねえ……。天崎くんに直接聞いてきてあげよっか？」

「そ、そそれはちょっと、恥ずかしいです」

「あくまで自然に会話の中で話すから、大丈夫だって」

「でっでも、そのっ、やつぱり、私からちゃんと言いたいですし……」

「その、でも、えーっと」

言いたいけど言えない。夜美の心は複雑だった。

「あれ、みんな何してんだ？」

「はい？」

声が出た方を振り返ると、和麻が立っていた。夜美は瞬間的に体をこわばらせ、ピクツと背筋を伸ばす。欠伸をしながら、和麻は続けた。

「図書室行ったら鍵が閉まっててさ。珍しいな、昼休みに恵梨奈先生がいないのは」

円は夜美の背中をピンと人差し指で軽くつついた。

「ほら、今がチャンスじゃない？」

「ふえっ？ あ、えと」

夜美は思わず顔を伏せる。今まで何ともなかったのに、好きだと思い始めた時から、ともに和麻の顔が見れなくなってしまった。

「ああ、ああああ、あのっ！」

少し力が入り過ぎてしまったのか、やたら大きな声で和麻に向き直った。ビクンと和麻は身じろぎする。なにやらおかしい迫力が夜美にはあった。

「な、なんだ？ どうした」

「じ、実はっ！ ですね、あの、その、あ、ああああ、あまつ、あ
あっ」

「あま？」

「甘酒さんが好きなんですっ」

「「はいっ！？」」

隣にいた二人が盛大にズッコケる。いま夜美は何と言ったか。

「夜美、お酒は二十歳になってからだぜ？」

「へっ？ …… あ、ああ、はい。そうですね……っ。エヘヘ」

「しかし甘酒をさん付けで呼ぶ人間がいようとは」

和麻はケラケラ笑っていた。とりあえず悟られはしなかったようである。夜美は何故だか安堵感に包まれた。

「というわけで、作戦を発表するわ」

時は変わって放課後。それぞれ一旦家へと帰宅し、今はとある喫茶店に三人で集合している。もちろん和麻には内緒だ。

「作戦って、何の？」

百パーセントオレンジのジュースをストローですすりながら充が聞き返す。作戦と言うのはもしかしくなくても夜美の告白を成功させるためのものであるが、何となく嫌な予感を充は感じていた。夜美はきよとんとしている。

「まずは、映画作戦ね」

「映画？」

「作戦……ですか？」

親指をぐつと突き立てて円は笑う。充の嫌な予感は更に増していく。昔からこういうことは好きなのが円だ。こう見えても和麻と充は円とは幼馴染で、よく幼稚園のころから振り回されてきた。そして結果的に損害は和麻たちに返ってきたのだった。

「霧野さん！ 頑張つて！」

「は……はい」

「で、具体的にどんな作戦なんだ？」

充の問いに、円は自信満々に答える。

「簡単よ。霧野さんは天崎くんを映画に誘うだけ。まあデートよね。それで、映画のクライマックスシーンで、その映画の主人公と一緒に天崎くんに告白するのよ！」

「デ、デデデ、デート……！」

『デート』という言葉に過剰に反応する夜美。だが、充は、円の案にしては悪くない方だと思った。少々クサイ芝居になることはこの際目をつぶるべきだ。

「一回和麻とはデートしたんだろ？ じゃあ今回もそんなに緊張しなくていいんじゃないかな」

だが夜美はいまいち自信なさげに首を横に振った。

「あの時は……ですね、その、天崎さんの方から、お誘いを頂けたので、その、デートできたんですけど……、私のお誘いで、一緒に行ってくれるでしょうか？」

「大丈夫だって。最近和麻も映画見に行っていないから、チャンスだぜ！」

充は親指を突き出してグッドラックのサインを送る。夜美は自信なさげだったが、頷いた。

「天崎くんに伝えることから始めるのよ？」

「はい。……不安ですけど、頑張ってみます」

夜美自身、映画に行くことも少ないので楽しみなのだが、何しろ理由が理由であるし、そばに和麻がいるのでは、全く映画には集中できないだろう。

「そうね。それじゃ今度の土曜日に決行しましょ。私たちも行くわよ、黒木くん」

「へいへい。って土曜って明日じゃねーか！」

それがどうしたの、という顔をする円。夜美としては心の準備が必要なはずだし、何より急に明日映画に行こうと言われて簡単にOKするだろうかという問題がある。予定も聞くことなく、明日突然映画に行こうと誘われたら、行くのは難しいはずである。

「約束は電話でね。時間は……そうね。一時にしましょか。映画館集合ね。私たちはバレないように、二人が入ってから十分後に入るわ」

きつちりと約束を決めて、やる気満々の円を止めることは不可能である。充が一番よく知っている。

「分かりました。では明日ですね」

日程と内容が決まると、三人は喫茶店を後にした。夜美はまるで遊園地に行った時のような気分で、ドキドキしながら家路をたどったのだった。

その夜、夜美は慎重な面持ちで和麻の携帯番号を入力していた。既に電話帳登録はしているので番号を直接入力しなくてもいいのだが、今の夜美は気が気ではないのだ。無駄に三回も見直してから通話ボタンを押す。四コールほどで和麻の声が聞こえた。

「もしもし。夜美か？」

「あ、あのっ、天崎さん」

「こんな時間にどうかしたか？」

「いえ、あのつ、えーと……明日、時間空いてますか？」

『明日か？ ああ、特に用事は無いけど？』

和麻の返答を聞いて、ほんの少し安心する。どうやら誘えそうだ。

「あの、でしたら、映画とか、一緒にどうですか？」

『映画かあ。よし、いいぜ。行こう』

「ほ、本当ですか。嬉しいですっ」

とりあえず、映画作戦の第一段階はクリア出来た。あとは映画を見て、その時に告白するだけ。言葉で言うのはたやすいが、そう簡単にできることではない。

「じゃあ、明日の一時、映画館の前で待ってますねっ」

『了解。んじゃ』

「はい。おやすみなさいですっ、天崎さん」

パタツと携帯電話を閉じると、緊張の糸が切れたように夜美はベッドに倒れ込んだ。衝撃でベッドの上に乗っていたティベアーがころんと倒れる。よくやったと笑っている気がした。実際、夜美も十分満足だった。

「がんばって。あと少し」

無意識に、自分でそう呟いていた。

翌日。

「じゃ、行ってきます」

夜美は財布をポーチに入れると、お気に入りのベージュのダウンコートを羽織って玄関を出た。突然の誘いだっただが、和麻は快く了承してくれたので、夜美はウキウキ気分映画館へと向かっていた。外は冷え込んでいるものの、もう正午を過ぎている。雲ひとつない快晴の空で、太陽は輝いていた。寒さがなければピクニックができそうである。

「来てくれるかな？ メールしてみようっ」と

きつと和麻のことだから、来ないはずはないと分かっているのだが、それでも夜美は注意深く和麻への連絡を怠りはしなかった。少しばかり心配性なのが夜美なのだ。

『今映画館へ向かっています。天崎さんはもう支度はお済ですか？』大分文字を打つのに慣れてきた。テキパキと入力して、送信。じきに和麻から返事が来た。

『後方、百八十度後ろを向いて、横断歩道の向こうを見てみよう』

夜美は一瞬、何のことか分からなかった。送り主は間違いなく和麻である。言われるがままに後ろを向いて、信号の先をみる。夜美はようやくメールの意図が分かった。

信号がちょうど青になり、和麻がこちらへと走ってきた。

「天崎さんっ」

「よっ。いい天気だな」

和麻は澄んだ笑顔で夜美をみる。夜美は少し恥ずかしくなってしまう、下に視線を揺らす。

「どうかした？」

「へっ？ あ、いえっ、なんでもないです」

悟られてはいけない。いや、悟られた方がかえっていいのだが、恥ずかしいのでやっぱりダメだ。

「後姿だけで、私だって分かったんですか？」

「もちろん。帽子とポーチは、夜美のトレードマークみたいなものだからな」

なるほど、と夜美は納得する。さすが和麻、夜美が知らないうちに夜美の特徴を把握しているのだ。

歩きながら、二人で他愛もない話をする。

「今日は、どんな映画を見るんだ？ やっぱ、女の子は恋愛系が いいのか？」

「恋愛系も好きですけど、基本的にはどのジャンルもオツケーですよっ」

「そうなのか？」

少し意外だった夜美の返答に和麻は驚いた。ハリウッドのアクションのような爆撃系でも平気なのだろうか？

「あ、でも、一つだけ」

「ん？」

「ホ、ホラー映画はどうしても見れないです。怖いです」

「そりやそうだよな」

やはり女の子である。もちろん和麻もその辺はわきまえているつもりなので、ホラーを無理やり見たりはしない。

「天崎さんは、どんな映画がお好きなんですか？」

「俺か？ うーん、そうだな。……ってよくよく考えたら、俺最後に映画観たのは小学生だったな」

仮面ライダーを親と見に行った記憶がある。なぜか母さんはえらくはしゃいでいたのだ。

「そうなんですか。でしたら、どのような映画が見たいですか？」

「んー、ホラーとか？」

「う……が、頑張ってみます」

「冗談だよ。俺もわざわざそう言うのは見たくないって。感動できる映画がいいかな」

「感動ですか。いいですね」

感動もののストーリーならば最後に告白が待っている可能性が高い。これはチャンスと言える意見だろう。それも本人からの要望ならば否定する理由がない。今回のテーマはこれで決まりのようだ。夜美も喜んで賛成する。

「しかし、なんでまた、急に映画見ようなんて思ったんだ？」

和麻の質問に、夜美は答えが探せなかった。告白したいからなんてもちろん言えないし、何より計画が和麻にバレては水の泡になってしまう。五秒くらい悩んだ後、緊張で声が裏返りつつ答えた。

「えーと、それは、ですね、あのっ、この前の遊園地が楽しかったので、また天崎さんと遊びに行きたいなって、思ったんです」

パツと浮かんだいいわけだったが、うまい具合に和麻は納得してく

れた。

「迷惑じゃなかったですか？」

「まさか。俺も楽しみにしてたんだぜ？」

「わあ、本当ですか？ そう言ってもらえると嬉しいですつ。最初は、私のお誘いなんかで来ていただけるか不安でしたから……」

電話のときだつて心臓は早鐘のようにものすごい速さで動いていたのだ。夜美は嫌われることが何よりも怖いので、すぐに神経質になつてしまう癖があつた。

「俺もちよつと驚いたかな。夜美の方から電話してくれるなんて、思わなかったからな」

だが映画だつてデートの定番コースだ。夜美と一緒に過ごす時間が増えたものの、学校以外ではそれほど会わないので、こういうことはとても新鮮である。

そんな話をしていると、映画館に到着した。駐車場は今日も満車のようだ。相変わらずの大盛況である。夜美は目を輝かせていた。

「どんな映画をやつてんのかな」

「あつちに案内があるみたいです」

夜美の指さす方には絶賛上映中の案内板が立っていた。

「へえ。結構いろいろやつてるもんだな」

全シアターでそれぞれさまざまな映画が上映されている。和麻はざつと目を走らせた。

「上から二番目の映画、いかがですか？」

夜美が指をさしながら見たい映画をチョイスする。どうやら冬物のラブストーリーのようだ。女の子が好きそうなジャンルである。

「わかった。じゃ、あれにしよう」

夜美一押しの映画で決定。早速映画館の内部に入る。

と、映画館の外、駐車場に止めてあつた車から、二人の人影が降りてきた。

「なるほど。この映画を選んだのね。愛と感動。美しいじゃない」
なぜか映画を前に熱くなっている円を隣でやれやれという表情で見

つめる充。

「ったく、『冬の力ナタ』とか完全にデイスってんじゃねーか」

「うるさいわね。ちゃんと日本の映画なのよ。韓国人は出てこないわ」

「タイトルのおかしいと言ってるんだ」

「つべこべ言わない。もう少ししたら私たちも入るわよ」
「やっぱりなぜか楽しそうにしている円。」

（こいつ、一緒に見ようとしてやがるな）

和麻たちの隣に座るかもしれないという可能性が考慮できていない。やはり円が何かを企むと常識というか鉄則というか、あらゆる「あたりまえ」が完全に無視されてしまうのだ。困ったものである。

「ほらはしゃぐな。入るのはエントランスだけだぞ」

「えー、何でよお。意味ないじゃない」

駄々をこね始める円。よくこんなのが委員長になれたものだ。

「和麻たちと同じシアター入ってどうする。気づかれるじゃねーか」

「……………ケチ」

「どうとでもいいやがれ」

「じゃ、じゃあ、せめて他の映画が見たいわ」

「和麻たちの方が先に終ったらどうする？」

「ほらっ、あれ！ 上映時間、一緒よ？」

「……………ったく、まあエントランスにいてもヒマだしな。しょうがない」

「やったー！」

隣で四歳児くらいの女の子が啞然としているのは見なかったことにしよう。我がまま委員長ってのは終始我がままなのだ。

「奢って」

ついに暴走し始めた円。もちろん充には奢る気などさらさらない。

「帰る」

「ひどーい」

「金ないもん」

「男でしょ。それくらいはたきなさい」

奢ってもらう身でなんちゆうこといつてんのかなこいつ。

「なんで奢んなきやいけないんだよ」

「財布持って来てないもの」

「お前一体何しに来やがったあああああああ！」

充の叫び声で子連れの家族に白い目で見られたので円を連れてエン
トランスに入った。

「ポップコーン、キャラメルでいいですか？」

「ああ。いいよ」

「はいっ。天崎さんのお飲み物ですっ」

「おう。サンキュー」

チケットを買った後と言えば、ポップコーンとジュース。二人で一
つLサイズのポップコーンを購入した。

「それでは、シアターに行きましょう」

休日であることもあって、館内は人であふれていた。

楽しそうに前を歩く夜美。確か『冬の力ナタ』はシアター3で上映
されているはずだ。席は前過ぎず後ろ過ぎずのジャストミートな位
置を獲得している。

「エヘヘ。楽しみですっ」

ポップコーンのたっぷり詰まったカップを両手に持ち、シアターに
入る。

大画面のスクリーンに館内での注意書きや新しい映画の宣伝が広が
っている。まだ上映まで数分あるので、足下の誘導灯は光っていた。
「席はここですよね？」

「ああ。いい位置だな」

ど真ん中にフルスクリーンを望める位置である。大分客の入りが多
いので、そう簡単には取れない席だ。

映画上映前の独特の雰囲気漂う中、瞬く間にシアター3は満員になった。それなりに人気のある映画らしい。

やがて非常灯や誘導灯が消え、劇場内が闇に包まれる。壮大なスクリーンに映像が映し出される。和麻と夜美は携帯電話の電源を切り、映画に没頭したのだった。

「ええーっ、寝ちゃったのー!？」

円は素つ頓狂な声をあげた。店内にいた客や店員が一斉にこちらに注目する。

翌日、日曜日。夜美と円の充の三人はまた例の喫茶店に集まったのだった。

「すいません。あの日の夜はなかなか眠れなくて、映画の途中で寝てしまいました」

映画の後半、夜美は熟睡してしまい、目覚めたときにはちょうど主人公が告白をしていた時だった。和麻がその時になって夜美の熟睡に気付いたため、結局夜美は告白のタイミングをすっぽりとぬかしてしまったのだ。

「本当に、すいませんでした」

「夜美ちゃんの謝ることじゃないって。やっぱり変な作戦だったんだよ」

充の言葉に円はムツとしたが、よく考えればあれだけ人がいる中で告白は余計に難しいものだとな得する。

「でも、せっかく作って頂いたチャンスが……」

夜美はしょんぼりうなだれてしまった。自分を責めているのだ。もともと自分の優柔不断の所為でみんな助けてくれているのに、それさえも無駄にしてしまったのだから。

夜美を励ますように、円は言った。

「まだよ。まだまだだわ。作戦の一つが失敗に終わっただけ。私の

中では予想の範疇よ」

充の背中にまたヒヤリとした汗が流れ落ちる。この委員長、まだ常識はずれなイベントを隠し持っているのだ。恐るべき女である。

「そうなんですか？」

「ええ。第二の作戦を実行するわよ」

そういうと円は怪しい光をメガネに宿した。それが見えるのは充しかいない。

「第二の作戦って、なんですか？」

夜美が不思議そうな顔をしている。円は得意げな表情して、自信満々に言い放った。

「お弁当作戦ね！」

「お、お弁当作戦？」

充がなんだそれ、という顔をする。

「お弁当ですか？ それなら、いつも天崎さんに作ってますけど……」

円は指を立ててチツチツと左右に振っている。では他に何をするのか、充と夜美は顔を見合わせた。

「霧野さんのお弁当に、工夫を施すのよ」

「どんな工夫なんだ？」

「そうね。海苔とか、錦糸卵で文字を書くの。お弁当を開けたらいきなり『大好きっ』なんて書いてあったらもう和麻くんはメロメロね」

夜美は一瞬それを想像する。とたんに顔が真赤になった。

「ちよつと、恥ずかしいです……」

「でも、口で言うよりはずっと楽じゃないかしら」

それは確かにそうであるが、何というか、和麻の反応を見るのがとても恥ずかしいのだ。

しかし方法としては他にはない。夜美はまたもや葛藤する。

「……わかりました。やってみますっ！」

「大丈夫かい？」

「お弁当は、唯一天崎さんに喜んでもらえる私の特技ですから。頑張ってみます！」

心配そうな顔を浮かべる充だが、それでも夜美の決断を応援してくれた。

「そうだな。夜美ちゃんのお弁当なら、きっと和麻も答えてくれるぜ」

「はいっ。では、早速明日のお弁当は、頑張って可愛く作ってみますね！」

いつも見た目は美しくきれいに飾るのが夜美の料理スタイルだ。可愛さを重視して作ったことはあまりないので、難しいかもしれないしかしそれでも和麻のために、お弁当を作るのだ。この思いを届けるために。

第二次打合せも終わり、店を出ようとしたその時、夜美の携帯が鳴った。このメロディは和麻からのメールである。

「だれから？」

「天崎さんからです」

携帯を開いて、受信したメッセージを表示する。普段あまり和麻からメールを受け取ることは少ない。夜寝る前にはほぼ毎日夜美から少し電話したり、メールしたりとおしゃべりしているのだが、こんな午後からメールをもらうのは初めてだった。

『今ヒマか？ ヒマなら、こよあわ暦川のほとりに来てくれ』

「これは……」

和麻のメールは明らかに呼び出しである。暦川はここから五分ほどでいける、街を流れる川だ。あまり広くないが、長い面積で流れている。学校からは反対なので、普段はあまり近寄らない。

「いいじゃん、行ってきたよ」

「ちょうど打合せも終わったしね。行くべきじゃないかしら」

「分かりました。行ってきますっ」

勘定を済ませると、夜美はメールを返信する。

「分かりました。今から行きますね（^^）」

風のように喫茶店を飛び出し、歩道を駆け抜けていく。冬の冷たい風が夜美の髪をなでた。

五分ほど走ると、暦川の土手が見えてきた。肩で息をしながら、和麻を探す。

枯れ切った大きな木の下に、和麻が立っていた。夜美には気づいていない。

「天崎さん！」

力いっぱい叫んでみると、和麻が振り向いた。笑いながら手を振っている。夜美はその優しい笑顔に向かってもう一度ひた走る。なんだか、いつかの夢を見ている気分だった。

「何をされているんですか？」

和麻は黙って微笑むと、木の向こう側を指さした。ほんのり煙が立ち並んでいる。

「わーっ、これって焼き芋ですよね？」

「うまそうだろ。さっきここを通ってたら、おじさんが焼いててさ。俺にも二、三個くれたから、一緒に焼いてたんだよ。もう帰っちゃったけどな」

夜美は外で焼いた芋を食べるのは初めてだった。たまに通る軽トラツクの焼き芋は食べたことがあるが、たき火をしてまで作ったことはない。

手袋をした手を、煙にかざす。ほんのり暖かい。

「そろそろ、焼きあがるころかな」

和麻が太い枝で薪の中を掘り起こす。火を消さないようにして、中から二つ、形のいい焼き芋を取り出した。

「熱いから、気をつけてな」

「はいっ、頂きます。とっても美味しそうですっ」

二つに割ってみると、中からたっぷり湯気が立つ。鼻をくすぐる甘いにおいがたまらない。

喫茶店ではジュースを飲んだだけだったので、夜美はお腹がペコペコだった。皮ごと思いつきかぶりつく。

「ふわっふ。おいひいれすっ」

「暖かいな」

「ふぁいつ」

和麻も一口かぶりつく。熱くて吐きだしそうになったが、なんとか耐えた。

「外で食べると、美味いんだよな」

「本格的で、いいですね」

夜美も笑顔ではむはむと食べている。外は寒いが、体の中はぼかぼかである。

「私、初めてお外で焼き芋食べました」

「へえ、そっか。食べたことなかったんだな」

まあ、今までは友達がいなかったのだから無理はないだろう。あまり深く掘り起こすとまた夜美の苦い過去を突きつけることになるので、ここで留めておく。

「……………あ、あの……………」

焼き芋を一つ食べ終わった時、夜美は控えめに口を開いた。

「ん？ どうした？」

「え……………えと、その……………」

夜美は思い切って告白することにした。しかし、やはりというか、言葉が出てこない。自分では決めたつもりでも、心のどこかで、まだ受け入れてもらえないかもしれないことに怯えている。

和麻は疑問を抱いた顔で、夜美が話すのを待っている。夜美は自分から話そうとしたことを後悔した。このままでは変な子だと思われるてしまう。どうにかしないと。しかしどうすればいいのかわからない。

「あ……………雪だ」

「えっ？」

和麻はふと、空を見上げた。灰色に濁った空から、白い粒が舞い降りているのが見える。

「初雪か。運がいいのかもな」

「初……雪」

かじかんだ唇で、夜美は呟いた。そう。もう雪の降る季節。夜美は雪の日も、晴れの日も、部屋の中か、教室の中にしかいなかったの

で、降り積もった雪にしかふれたことがなかった。

手を差し出すと、その中に一粒の雪が落ちてきた。体の体温で、すぐに溶けてなくなってしまふ。

「きれい……」

「雪ってさ、不思議だと思わないか？」

唐突に和麻が、そんな事を問いかける。夜美には、どう不思議なのか、分からなかった。

「どうして、でしょうか」

「雪って、簡単にいえば雨が凍って落ちてくるものだ。でも、雪はまるで自分を暖かく包み込んでくれるみたいに、ゆっくり降ってくるだろ？ 雨と雪の違いは、それだと思うんだ。雨だって冷たいけど、雪に比べりゃ温度は高い。でも、雨って本当に冷たく感じるんだよな。まあ、こんなの、心の持ちようだけだな」

普段は和麻の口からは聞かないような言葉に、夜美は驚いた。とても、大人びていて、まるで、どこか遠くへ行ってしまった和麻が、何年もたって目の前に現れたかのような、そんな気がしたのだ。だが、次の瞬間、和麻はいつもの微笑みに戻っていた。

「なんてな。ちょっと、かっこつけすぎだよな。忘れてくれ」

雲がほんの少しだけ切れ、太陽が顔を出す。粉雪が太陽の光に反射して、煌めいた。

「私も、そんな気がします。案外冬で冷えた体を温めてくれるのは、雪かもしれないね」

夜美もちよつとだけ、かっこつけた言葉を言ってみる。しかしそれを言っただけ、結局和麻が言ったことを繰り返したただけだということに気付いた。

私は、背伸びしても、大人にはなれない。そう思った。和麻は笑っていたが、夜美は心の奥で、そつと呟いた。

「だって、天崎さんに、この思いを伝えることも、出来ないのだから」

翌日。さすがに雪が降り積もることはなく、あちこちで水たまりになっていた。

今日は、勝負の日。夜美特製の、名付けて『告白弁当』である。命名したのはもちろん円だった。

時刻は七時五十二分。もう十分もすれば、和麻が来てくれるはずだ。しかしその十分も、最近では結構辛いものである。手袋をしてはいらるものの、手がかじかんでうまく動かない。一限目の授業でペンを持つのが一苦労なのだ。

しかしそれでも、夜美は和麻を待っている。和麻と同じ道を通ることができるなら、一緒に会話しながら登校出来るなら、これくらい安いものである。

小鳥のさえずりが聞こえた頃、和麻が現れた。

「おはよう、夜美」

「おはようございますっ、天崎さんっ」

いつものように元気な笑顔であいさつする。こうして和麻とともに朝の道を歩くのも、今では当たり前となっている。

ゆっくりと歩幅を合わせて、枯れ切った並木の道を進む。

「はあ。あと十日で期末試験だぜ。困ったなあ」

和麻が気だるそうに呟く。十二月の頭に、期末考查が実施されるのだ。

「早いですね。ついこの前中間考查だったんですけど」

二学期の中間考查と期末考查はたったの一カ月半しか空きがなかった。めまぐるしく勉強しなければならず、充は毎日悲鳴をあげている。サッカーの練習にも身が入っていないようだ。

「今度、数学教えてくれ」

「は、はいつ。私でよろしければ、いくらでもお力になりますよっ」
夜美の纏めたノートが功を奏し、時々和麻はこうして夜美と勉強するようにもなった。夜美のノートの方が黒板の板書よりも分かりやすいのだ。

「ところでさ、夜美」

「はい、なんでしょうか？」

「昨日言いかけたことつて、何だったんだ？」

和麻の問いに、夜美は目を泳がせる。そう言えば、言い損ねていたのである。

「あ、あの、えと」

「いや、良いんだよ。言いたくないことなら、無理に言わなくてもいいぜ」

夜美は首を横に振りたかった。言いたくないわけではない。言いたくないなんて、そんなはずがない。言いたくて、だけど、ただ自分の決心が甘く、踏み出せないだけなのだ。

「あのっ！」

「おはよ、お二人さん」

「今日もいい天気ね」

夜美が口を開こうとした瞬間、前から円と充がやってきた。和麻が「よう」と手を振り返す。

夜美の発言も尻すばみになってしまい、結局和麻には聞こえないまま終わった。

四人は信号へとたどり着く。空は晴れているが、夜美の心は曇っていた。

昨日和麻が言った、雪の温かみの話。何故だか、夜美にはあれが、まるで自分の心を見透かされていたような発言に思えるのだ。君には、勇気がないのか？ 和麻に言われたわけではなく、その言葉に直接問いかけられているような気がする。

和麻が大人びて見えたのも、そのせいなのかもしれない。なのに自分は、ちつとも和麻みたいにかっこいいことが言えなかった。別に

だからといってそれに意味はないし、言えなかったからどうというわけでもない。けれど、夜美は、なんだか自分がずるいような気がしたのだ。お弁当という媒体を使っただけ、思いを伝えられない自分が。そんなものを使って思いを伝えようとしている自分が、である。

校内に入っても、授業が始まって、一向に夜美の心の靄は晴れなかった。またいつものようにため息が始まる日常。それはまるで、和麻に好きと言えない自分を、誰かに助けてほしいと体が言っているようだった。

「それじゃ、授業おわり。起立」

「気をつけ、礼」

『ありがとうございます』

四限目の授業が終わりを迎え、いつもどおりにまた昼休みが始まる。夜美は食堂に行くのを躊躇った。

本当に、こんなお弁当で喜んでくれるだろうか。お弁当には白ご飯の部分に、『大好きです』と刻み海苔で文字が書いてある。

「……………」

だが、やると決めたこと。夜美は自分と和麻、二つのお弁当を持って、食堂へと向かった。

「おーい、夜美」

少し教室で突っ立っていたため、和麻は腹をすかせていた。緊張した面持ちで、しかしそれを悟られないように和麻たちのところへと向かう。

「少し授業が長引いてしまいました。ごめんなさいです」

「いいんだよ。それくらい気にしないって。さ、食べようぜ」

「……………」

「？　どうかしたか、夜美」

席に座ろうとしない夜美に、和麻は心配そうに尋ねた。

「体の調子でも、悪いのか？」

「あ、エヘヘ。い、いえ、そんなことはないです。はい、どうぞ。私ちよつと職員室にプリントを取りに行かなければいけなかったの
で、先に食べていてください」

そう言つて、和麻に渡したのは、自分の分の弁当だった。量は和麻の分に比べて少ないが、女の子らしいデザインの箱ではないし、大ききさも一緒である。和麻はいつものように、それを受け取った。和麻の箸箱をそこに置いて、夜美は食堂を出た。

「変ねえ。あの子、今日は確か……」

和麻に聞こえないように、円は呟いた。和麻の弁当箱はいつも通りの、白ご飯。本当ならここに文字を入れる約束だったのだ。円と充は首をかしげた。

夜美はというと、食堂を出た後、その足で近くのトイレへと入った。「やっぱり、自分の力で伝えよう。こんなのじゃ、ダメ」

自分の口から伝えないと、きっと和麻は振り向いてくれない。こんなものをいきなり見せられても、困惑するだけだ。こんなずるいやり方じゃなくて、ちゃんとストレートに好きという方が、絶対いいに決まっている。

夜美は個室に入り、弁当を開ける。海苔の部分だけを箸でつまみ、先に食べた。これで和麻の弁当と何ら変わりはない。

「よしっ」

夜美は両手で拳を握ると、トイレを抜け、二、三分待つてからまた食堂へと戻った。

「お待ちせしました」

「お、きたきた」

「よ、待つてたぜ」

「おつかね」

三人とも、口々に言葉を振りかけてくれる。あとで二人には謝っておかなくちゃならない。せっかく自分のためにおぜん立てをしてくれたのに、それを無視して、自分のやりたいようにしているのだ。だけど、これでいいと、夜美は思っている。

「お味はどうですか？」

「もちろん美味しいさ。また料理の腕上げたか？」

「エヘヘ。毎日、特訓してますからっ」

いつか、和麻の朝ご飯や、晩御飯も作りたい。それが、夜美の夢だ。そのために、もっと料理の腕を磨くのである。もちろん、今の和麻には内緒だ。

円には、夜美の意図が分かった。お弁当なんて使わなくても、ちゃんと思いを伝える。もう夜美は決心したのだ。現に夜美の弁当の白ご飯には、ほんの少しだけ、海苔がのつていた跡がある。きっと職員室ではなく、どこか人目につかない場所で、食べたのだろう。

「頑張りなさいよっ」

席を立つ時、円は夜美の背中をポンとたたいた。

もう冬が到来しているが、風は吹きすさぶほど吹いてはいない。穏やかな夕焼け空だった。

「ったく、正面に太陽つてのは本当に眩しいぜ」

「エヘヘ。綺麗な夕焼けです」

二人は放課後の通学路を歩いている。いつもなら充と円がいるのだが、今日はいない。夜美にはその理由が分かっているが、きっと和麻は知らないだろう。

「夕焼けが綺麗ってことは、明日は日本晴れかな」

「そうになると、いいですね。この季節、日の光がないと、寒いですから」

「日の光があっても寒いけどな」

朝にはあった水たまりも、今は小さくなったり、消えたりしている。夜美の心の靄も、大分晴れ切っていた。残るは——そう。告白が成功するかどうかだ。

もし振られてしまったら。そんなことはもう考えないようにした。考えれば考えるほど、告白の言葉が出にくくなってしまっからだ。和麻を信じて、決心したのだ。きっと和麻は答えてくれる。自分でそう言い聞かせて、心を少しでも落ちつかせた。

だが、言いだすタイミングがつかめない。いつ言ったらいいのだろうか。それを考えながら、夜美は歩く。だがそうしているうちに、日はどんどん傾き、分かれ道が迫ってくる。

「どうしたんだ？ 今日の夜美、なんか変だぞ？」

歩いていると突然和麻が話しかけてきた。いや、きっと何度か呼ばれたのだろう。自分が気づかなかったのだ。

「そ、そうですか？」

「なんていうかさー、思いつめてるって言うか、悩んでるって言うか」

やはりこういうことを考えると、顔に出してしまうのだ。自分では平然としていたつもりなのに、周囲にはバレバレである。

「もしかして、また新しいいじめが起きたんじゃないのか？」

「いえ、それは大丈夫です。もし起こったら、きっと一番初めに天崎さんに言うと思いますから」

「本当か？ ならいいんだけど」

和麻はまた前を向いて歩きます。その先には――分かれ道があった。「じゃ、また明日な。何かあったら、俺に言えよ？」

そう言っつて和麻は去って行こうとする。手を振って、分かれ道の向こうへと進んでいく。

ここで止めなければ、また言えなかったままになる。今しかチャンスはない。

「ま、ま、待ってくださいっ、天崎さん」

体の中の全精神力を使っつて、和麻を呼びとめた。和麻は歩を止め、振り返る。

「ん？ なんだ？」

心臓が破裂しそうなほど高鳴っている。言い終わるまで、耐えてほ

しい。

夜美は慎重に言葉を選び、ゆっくりと話す。

「昨日、言いそびれたこと、言ってもいいですか？」

「言いそびれたこと……ああ、あれか。教えてくれるのか？」

「はい。やっと、決心が付きましたから」

もう、誰の力も借りない。自分で、最後まで、告白して見せる。そう決心した。

「ずっと、言おうと思ってて、でもいざというときには、どうしても言えなくて……だけど、だけど、このままではダメだと思うので、ここで言います」

夜美の言葉に、黙って耳を立てる和麻。もう告白すると分かってしまったのだろうか。

しかしそんな事を気にしている場合ではない。意を決して、夜美は言葉を紡いだ。

「い、今、現在、天崎さんが、その、お、おお、おつ、お付き合いをされている方はいますか？」

夜美はじつと目を瞑って、和麻の答えを待つ。ゆっくりと冷たい風が吹き抜け、やがて和麻はこう言った。

「ああ、いるよ。今付き合ってるやつ」

「……………え……………！」

一瞬、時が止まったかのような錯覚に陥る。たった一瞬の出来事なのに、夜美にはそれが永遠のように感じられた。

和麻には、既に付き合っている人がいたのだ。

「そ、そう………だったのですか」

かろうじて、そう返すことができた。立っているのがつらくなった。夜美の瞳には夕焼けのオレンジを受けて光る大粒の涙が、今にも流れ落ちようとしていた。

和麻の答えが、延々と頭の中でループする。今まで培ってきた、想い出、記憶、笑い話、何もかもが音を立てて崩れようとしていた。

「う……………っ、ひぐっ」

感情が心の奥からこみ上げてくる。涙とともに流れ落ちている。

「あ、いや、ちょっと待った、何で泣くんだ？」

「ひぐつ、いえ、あうつ、ひつく、すいつ、ません。なんでっも、ぐすつ、ないですっうく」

やはり、ただの片思い。夜美の恋は儚く散ったのだ。そう思った時である。

「俺が付き合ってるのは、今年の四月、偶然出会った女の子なんだよ。そいつ、クラスでいじめられててな。毎日泣いてたんだ」

「ぐすつ、……へっ？」

「けど、案外話してみると結構面白いやつでさ。笑った顔とか、すげえ可愛いんだよ」

「ひつく、ぐすつ、その子って……？」

「それでさ。俺が事故に遭って、入院してた時、一日も欠かさず、お見舞いに来てくれたんだぜ？ ノートを纏めてくれたり、俺の学校生活に、不自由がないようにって、いろいろやってくれたんだ」

そこまで和麻が話して、夜美の涙が止まった。

「そんな顔してないで、笑ってくれよ。……俺も夜美のこと、大好きだからさ」

「！……今、なんて……」

「だから、俺はすでに夜美と付き合ってるんだって、言ったんだよ」夕焼けが、空が、光が。すべてが夜美を包み込んだ、そんな気がした。夜美はまたもや、うまく笑顔が作れなかった。口を横に伸ばしても、顔の筋肉が震えて、うまく動かない。

「す、すい、ません………私、今……笑えません。それでも、いいですか？」

声まで震え始めた。和麻は「はあ」と一息を吐くと、言った。

「しょうがねえ。特別だ」

夜美は湛えていた涙を溢れさせ、和麻の胸に飛び込んだ。夜美の体を、和麻は強く抱きしめる。夜美は思い切り声をあげて泣き出した。

「天崎さん、ひぐつ、ぐすつ、天……崎……さん……っ」

「ずっとこれを言おうと思ってたのか？」

「……私、怖かったんです。振られちゃったら、もう一緒にいる人がいなくなっちゃうって……ぐすつ、だから、ずっと言えなくて……」

「一緒に登校して、一緒にお弁当食べて、一緒に遊園地行って、一緒に映画見たら、誰がどう見たって、そいつを嫌いだろうなんて思わないって。俺はずっと、夜美と付き合ってる気でいたけどな。まあ、好きだって言いそびれてたけど、夜美もそう思ってるんだろ？な、って思ってたからさ。けどまさか、そんな葛藤をしてたなんて、気づかなかったよ。ごめんな」

「いえ、でも、よかったです……。私も、天崎さんのこと、誰よりも大好きですからっ」

夜美の頬には、いくつもの涙が流れた筋があつた。そんな夜美がいとおしくて、和麻は更に夜美を強く抱きしめた。

「天崎さんに、抱きしめられると、とても……安心してしまいます」
「そりゃそうだろ。夜美が安心できるように、抱きしめてるんだからな」

「これからも、私のそばにいてくれますか？」

「あたりまえだ」

冬の凍てつく風の中でも、夜美を抱きしめるととても暖かい。白く浮かぶ吐息が、互いの顔をそっと撫でる。そして、夜美はこんなことを言いだした。

「……私、まだ、ファーストキス、したことないです」

心臓が飛び出そうなほどドキドキしているが、平静を装って、和麻は答える。

「奇遇だな。俺もだよ」

「じゃあ、えっと、その、……キス、してもいいですか？」

「目を閉じる。ゆっくりでいいから」

夜美が目を閉じると、そっとその唇の上に、和麻は自分のそれを重ねた。

「いつから、付き合ってるって思ってたんですか？」

帰り際。分かれ道を通り越して、和麻は夜美の家に向かっている。

夜美がどうしても和麻を晩御飯に招待したいと言いだしたので、こ相伴にあずかることにしたのだ。

「さあ、いつだろうな。夜美があることに気づけば、答えは見えるかな？」

「あること、ですか？」

「俺が夜美のことを『夜美』って呼ぶようになったのは、いつからだろうな」

「あ、そういえば、本当にそうです。今の今まで気づかなかったです。いつからですか？」

「さーて、そいつは秘密だな」

「えー、天崎さんずるいですよー」

「あっはっは。さあ、早く行こうぜ。腹が減って死にそうだ」

夜美が先導しなければ辿り着くことは出来ないが、和麻はすたこらと歩き始めた。

夜美はというと、今日の献立を考えていた。一緒に食べられるご飯ということで、なべ料理がいいだろうか。体も温まるし、良いアイデアだ。

「おーい、夜美、早く行こうぜ。まずは買い物だ」

和麻が呼んでいる。夜美は鍋の材料を頭の中で整理する。そして、これからの事を考えた。

私の名前を呼んでくれるひとが、そばにいる。ずっと、これからずっと、一緒にいてくれる。もう私は、一人なんかじゃない。孤独なんかじゃない。寂しくなんかない。

出会った日から今まで、そうだったけど、これからだってずっと一緒。私の、世界で一番大切な人と、一緒。だから今日から先は特別

な日々の連続なんだ。なぜならもう二人は友達なんかじゃなく、恋人なのだから。

私も区切りをつけて、これからもっと好きでいるために、呼び方を変えることにした。

「待ってくださいーい、和麻くーんっ！」

夕焼けの空に、また雪が散り始めた。

- Epilogue -

凍りつくような冬が終わり、木々は再び色付き始める。しかしそれは秋のような鮮やかさというものではなく、初々しい新たな芽ぶきである。

桜色に染まる並木道、その前に小さな分かれ道がある。満開の桜を眺めながら、一人の少女が待ちぼうけをしていた。

「おはよう」

やがてその少女にかかる声が聞こえてくる。少女もまた、笑顔とともに手を振り返す。

「おはようございますっ、和麻くんっ」

「あれ、夜美、髪型変えたか？」

夜美の雰囲気が少し違っている。笑って夜美は答えた。

「少し前髪と耳の横を切ってきました。どうですか？」

「なんていうか、ちょっと爽やかになったかな」

「本当ですか？ 嬉しいですっ」

夜美生まれつきの黒髪が暖かい春風になびく。桜の乗った風が、夜美の頭をなでて行く。

「和麻くんも、今日は少し早いですね」

いつもならもう十五分ほど遅い時間に来るのだが、今日は違った。

「早くしないと、桜が全部散ってしまうからな。それに、あまり夜美を待たせるのも良くないしな」

「エヘヘ。ありがとうございますっ」

「さ、行こうか。充たちも待ってるだろうっ」

「はいっ」

いつものように、夜美を自転車の荷台に寄せ、坂道を駆け下る。春休みぶりだった。

下のコンビニに着くと、ちょうど充が出てきた。

「よっ和麻、夜美ちゃん」

「おはようございます、黒木さん」

「今日はメシいるのか？」

「うっせえ。補習だこの野郎」

こんな日まで鬼の補習とはつくづく可哀そうなやつである。一年前から何も変わっちゃいない。いい加減に勉強嫌いを治さないと大変なことになるというのに、暢気だった。

「あら、おはよう、みんな」

ついでにファッショ誌を立ち読みしていた円も現れた。円の方は昼食ではなく、新学期の新たなノートを購入したのだそうだ。

「さ、行こうぜ。始業式が始まっちゃう」

「まだ時間には余裕があるだろうが」

「さっさと行かないとクラス編成混み合って見れなくなるぜ」

充が自転車のロックを解除する。和麻の前に先手を切って走り始めた。

「ったく、もうちょっとゆつくりできねーのかな」

「エヘヘ。黒木さんらしいですね」

「さ、それじゃこんなところで話してもなんだし、行きましようか」

「そうだな」

充に続いて和麻たちも自転車を走らせる。信号の前で充が手を振っていた。

「わあ、桜ですっ」

校門に到着すると、大量の桜が咲き誇っていた。夜美は荷台から降りると、背伸びをしつつ桜色の空を振り仰いだ。ひらひらと舞う花弁がまるで雪のように肩に落ちてくる。

「もう一年たっちゃったのね。早いものだわ」

円も同じように桜の幹を見つめている。雀たちがこぞって合唱していた。少しばかり早い桜の開花に小鳥たちもはしゃいでいるようだ。和麻は何となく微笑んだ。

今日は始業式。新しい学年へと進級し、またクラスが変わる。出会いと別れが交差する、真っ白なノートの一ページめのような、そんな

な日なのだ。

「お、体育館の前に掲載されてるみたいだぜ。見に行くぞ和麻」

「せめてチャリを留めさせろ」

桃色の花びらで埋め尽くされたアスファルトを、四人は歩く。それぞれに、各々の思いを抱きながら、新たに始まる生活に、身を委ねて。

輝かしい思い出は、心にしまつ。辛い思い出は、明日へのバネになる。明日をまた、今日よりもすばらしい日々にするために――。

自転車を小屋に留めると、四人は体育館へと足を運ぶ。充の読みが珍しく当たっており、まだあまり人だかりは出来ていなかった。

「ちよつとジュース買ってくるよ。みんな飲みたいものあるか？」

特にほしくなつたわけでもないが、何となく和麻はジュースを買うことにした。意味はない。ただそこに自販機があつたからだ。

「それじゃ私はキリマンジャロゴールドブレンド無糖ね」

「俺はコーラでいいや」

「えつと、それじゃ、私はオレンジジュースがいいですっ」

みんな口々に飲みたいものを注文した。

「了解。じゃ、先に行つててくれ」

自転車小屋の近くにある、運動部員御用達の自動販売機に千円札を投入する。春は平気でこんなことをしてしまうくらいに穏やかだから厄介だ。思えばジュース代に千円を使ったことはなかった。五百円がなかったというのもあるのだが。

ガコン、という音がして無事に四つのジュース及びコーヒーを入手した。朝っぱらから何をこいつはやってるんだという少々痛い視線や、きつとジャンケンに負けたんだろうなという哀れみの視線なども感じたが、気にするほどのことでもないだろう。

いつの間にかクラス編成の発表されている体育館前には人だかりが完成していた。和麻はため息をついて、校庭前のベンチに腰を下ろす。さすがにこの人だかりの中を探すのは無理だった。

と、その時夜美が和麻にむかつてかけてきた。何やら喜ばしそうな

顔をしている。

「和麻くんっ！ 来てください！ 同じクラスですよっ！」

夜美に手をひかれて人ごみの中に突撃する。もみくちゃにされつつ目にした編成発表には、確かに同じクラスの中に和麻と夜美の名前があった。ついでに霧野夜美の下には黒木充の、一番下には吉野円の名前が見つかった。和麻はそれに気づくと、苦笑とも、嬉し笑顔ともとれる表情になった。

みんなそろっての、三年生。それも悪くないかもしれないな。

ベンチに戻ると、円と充の二人が和麻の買った飲み物を飲んでいた。

「全部同じクラスだな」

「三年生でも、よろしくってことね」

「はいっ。みんな一緒ですっ」

「そうだな。充とは腐れ縁なだけのような気がするけどな」

「いいじゃねーか。腐れ縁は切っても切れないぜ」

みんなで笑いあう。その様子に、立ち並ぶ桜も溶け込むかのように精いっぱい花を咲かせていた。

始業式が終わると、クラスの新しいHRがあり、午前中で終了する。明日からは早速身体測定や頭髪検査、来週からは学力テストが開始される。正直たまったものではないが、和麻はそれを鬱には感じていなかった。

和麻が新たなクラスから帰宅しようと夜美を探すと、教室には夜美がいなかった。

「なあ、充。夜美、見なかったか？」

「あれ？ さっきまで、一緒にいたのにな」

「そっか」

和麻は携帯を取り出し、夜美にメールを送信する。

『どこにいるんだ？ ひよっとして、帰った？』

すぐに返事が返ってきた。

『いえ、まだ校庭にいますよ。桜がきれいなので、眺めているんです』

なるほど、と和麻は納得する。円がまたもやクラスの委員長に任命され、和麻がそれを手伝わされていたので、気づかなかったのだ。靴を履いて外に出ると、食堂のテラスに、夜美が立っていた。校庭が見える場所であり、なおかつ桜に囲まれているため、絶好の花見スポットである。白いテーブルの上に、いくつもの桜の雨が降り注いでいる。しかし今日は昼食を取る人間がいないので、がらんとしていた。

「夜美」

和麻が呼びかけると、黒く長い髪を翻し、夜美が微笑んだ。

「きつと、明後日くらいまでは満開ですね」

「そうだな。綺麗なもんだ」

和麻が相槌を打つと、夜美は深呼吸をして、一步前に出る。桜の幹の間からさす木漏れ日が、夜美の顔に陰で模様を作る。

「もう、あれから一年が立ちますね」

「ああ、そうだな」

夜美と和麻が出会った日。あの日から、もうすぐ一周年が立とうとしている。女子トイレで涙を流している夜美の姿が、昨日のことのように和麻の脳裏に鮮明に映し出された。

「あのときは、本当に、本当にありがとうございました」

「いまさら、何言ってるんだよ」

「和麻くんは、私の未来を、ううん、私自身を、変えてくれました。ただ、情性のように毎日を無意味に繰り返すだけだった、私を」

まるであの日の心情を語るかのように、夜美は話し始めた。

「あの時、和麻くんがいなかったら、きつと私は今、ここでこうして桜を眺めてたりは、しなかったと思います。もしかしたら、もうこの世にもいないかもしれません。だから、私はいくら感謝しても、和麻くんにはお返しができません」

「そ、そんなこと……」

「和麻くんは、私の憧れです。友達だってたくさんいますし、スポーツだって、万能です。私のために、数え切れないくらいいろんなことをしてくれました。和麻くんは、私の大切な人であって、私の憧れで、そして、私の永遠のヒーローなんです」

舞い散る桜が、高く昇った太陽の光を受けて桃色に光る。夜美を包み込むように、花弁が降り注いでいた。

「和麻くんがいてくれたから、今の私がいます。迷惑をかけるかも知れませんが、私はずっと和麻くんのそばにいたいんです。どんなことがあっても、離れずにいたいんです。だから、和麻くん。これからも、私のヒーローでいてくださいね」

「夜美……」

「このくらいしか、言えないけれど、私の感謝の気持ち、受け取っていただけでしょうか？」

あの日から、ずっと、ちゃんと言えなかった、ありがとうの気持ち。いや、ありがとうだけでは言いくるめられない、とてつもなく大きなもの。そんな日常をくれた、感謝の言葉を、夜美は思いつく限りの語彙で、丁寧にまとめあげた。

「そしたら、ずっと笑っていてくれるか？」

「はい……？」

和麻は小さく、夜美に呟いた。

「俺がずっと夜美のヒーローでいたら、夜美はずっと笑顔でいてくれるのかって聞いたんだよ」

正直、夜美を救うことができたのは、和麻一人の力ではない。充、円、恵梨奈先生や、他にもいろんな人々が、和麻を助けてくれた。だから、和麻一人でヒーローを気取るのは、本来間違っている。だけど、それを夜美に告げたところで、夜美は意見を変えない。ずっと、和麻がヒーローだと言っただろう。だが、それで夜美が笑ってくれるのなら、たった一人、夜美のヒーローでありたいと、和麻は思ったのだ。

夜美は今までで一番の微笑みとともに、答えた。

「エヘヘ。もちろんですよ。ずっと一緒にいてくださいね、和麻くんっ」

透き通った青空と、満開の桜の下で微笑む少女。その笑顔は、どんな春の日の日差しよりも暖かく、どんな夏の日の太陽よりも眩しく、どんな秋の日の木々よりも鮮やかで、どんな冬の日の雪よりも真っ白で輝かしかった。

あなたは、人生の目的について、考えたことがありますか？ つまり、簡単に言うと、『生きる意味』です。自分という人間の存在価値、そしてこの世で自分が果たすべきことについて、じっくり向き合ったことがありますか？ という質問です。

私があります。なぜ、どうして、何のために今自分は生きているのだろうか、そんなことを考えたりするのです。

もちろん、答えは一つです。

——誰かを愛し、そして愛されながら、幸せを手にするためです。

私は昔、いじめを受けていたことがあります。その時は、毎日がつらくて、寂しくて、生きて行くのが嫌でした。自分が生きる意味なんて、きつとどこにもありはしないんだと、そう思っていたのです。だけど、生きることが楽しいことを、生きて行くことの素晴らしさを、私に教えてくれた人がいました。その人はとても勇敢で、優しくて——、私を変えてくれたのです。

その人のお陰で、私は毎日を生きているのが楽しくなりました。なぜなら、その人が、一緒に登校してくれたり、私の作ったお弁当が美味しいといって食べてくれたりしたからです。そして、私はその人に恩返しがしたいと思うようになりました。だから、生きて行こうと思ったのです。

その人を愛し、その人のために、その人とともに生きて行きたい。その思いを、その人は受け入れてくれました。私と一緒に歩いてくれることを、望んでくれました。

だから私は、幸せを手にするために、今日も生きています。和麻くんと、同じ道を歩んでいくために。

命を投げ出すようなことは、決してあつてはならないことです。和麻くんは、それを私に教えてくれました。どんなに辛いことも、いつかは幸せにつながるんです。道を踏み外さず、自分らしく生きて

行けば、必ず幸福が待っています。

それが、私の答えです。これから、この答えを曲げるつもりもありません。私は私の道を進むために、この答えを信じています。涙の跡も、哀しい過去も、いつか想い出に変わるんです。だから、生きて行きます。幸せになるために――。

- Epilogue - (後書き)

どもー、はじめまして。銀色流星群です。さて、「Black Heart」という不思議な小説を読んでいたき、誠にありがとうございます。書いてて自分も恥ずかしくなるようなところがありますが(告白とか)なんとか、形にしてみました。

えーとですね、はっきり言うところこの小説の9割強は妄想で作られています。軽く主人公に嫉妬してるんじゃないですかね(笑)。自分で作った中でもこのお話のキャラクターたちはお気に入りなのです。

実はこの小説はもともとヤンデレの話を書こうぜとか友達と話してまして、ヒロイン思いつきり暗い性格にしてやろうとか思っていました。

しかしどう考えてもここはベタベタさせた方がしっくりくるんじゃないかとか自分の妄想癖がフルスロットルで動き出しまして、気がついた時は、こうなっていましたね(笑)。反省はしてません。

まあ、そんな感じでいろいろとアレな小説が誕生したわけです。処女作でヤンデレはキツいと思った次第ということにしてください。それではまたどこかでお会いしましょう。銀色流星群でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6309v/>

Black Heart Open Your Mind

2011年11月15日16時33分発行